

---

# 終わりの続きに

桃Kan

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

終わりの続きに

### 【NZコード】

N8836Q

### 【作者名】

桃Kan

### 【あらすじ】

これは一人の、答えを得た一人の英靈の物語。

## プロローグ（前書き）

これは答えを得た、英靈エリヤの物語。

## プロローグ

広がるのは目を覆いたくなるほど輝き。  
光がすべてを包み込む黄金の海原のようだ。

そこにぽつんと佇む一つの影がある。

そう、それはわが親愛なる主、そして最高の友人だった人だ。

「大丈夫だよ」

強がりだった。

そう一言告げて、いつかのように去つていけばいい。  
そう思つていた。

「答えは得た。大丈夫だよ、遠坂」

もう一度気丈に、ハツキリ思いを言葉にする。  
さよならを明確にしていく。

それが悲しかつた。本当に最後になつてしまつ。

それならば、そだだからこそ、俺は笑顔でいたかつたのだ。

「これから俺も、頑張つていくから」

それが本当に最後の言葉となつた。

消え行く刹那に垣間見た、彼女の宝石のような笑顔を俺はこれから  
先、何があつても忘れることはないだろ？

聖杯が消える。

最初からなかつたようにその場から焼き消える。

そして俺はまた待ち続けるんだ。

再び、このセカイに帰つてくることを夢見て。

### interlude

漂い流れるように“ナニカ”がそこにいる。

ここが何処なのか、それは分からぬ。  
知りえない事実。知つていたはずの事象。

そう、ここはセカイの外側だ。

總てから隔絶された、總てのものを『えられた場所。

何が起こつたのだろうか？

“ナニカ”が思いを描いた。

何かをしたいはずだったと。

それが使命であると、心に信じて疑わなかつた思いを持つていたと。

そう、殺したかったのだ。

理想を抱いた自分を。綺麗だから、カッコいいからと借り物の理想を抱き続けた自分を。

『しかし見る、今の私を……俺を見る！』 かつての自分に敗北し、

その思いすら間違いであると気付かされた！』  
言葉が力タチを成す。

不器用なまでに真つ直ぐなその言葉に呼応するよつて、空間が徐々に変質を始める。

『俺は……守りたかつたんだ！』

握り締めた拳が、腕が力タチを成す。  
血が滲むほどに力強く、しかし脆くも消え去りそうな其れは何かを  
掴もうと必死に足搔くよつ。

『だから、強くなりたかつたんだよ！』  
地を踏みしめた脚が力タチを成す。

シッカリと立ち上がり、何かに向けて必死に、ただ必死に道なき道  
を歩き出そうとしていた。

『分かつたんだ！ 見つけたんだよ……』

そう、その姿はまるで昔に戻ったように幼い。しかしその瞳に宿  
す光は、信じたものを決して疑おうとはしない。疑う心を捨て。た  
だ真つ直ぐに前を見つめた。

『だから……戻して、戻してくれ……』

だが理解していたんだ。此処にいるから、自分は世界の『外』に  
いるから、もうあの場所には戻れない。戻れるはずもないって。  
ふと頬を過ぎる零を感じた。そう、俺は涙を流していたんだ。  
弱さ、不甲斐なさ、頼りなさ、その總てが俺に涙を流させていた。

ただ、一番大きかったこと。それは……。

『あいつに、もう一度あいつに会いたいんだ』

ポタリと涙が地に落ちる。

それがまるで波紋のよつこ、水面を揺らすよつこやつこいつのや  
カイに響き渡る。

それは何かのきっかけだったように、目を覆いたくなるような、で  
も優しい光を放ちながら、総てを包み込んだんだ。

interlude out

## プロローグ（後書き）

はじめまして。読んでいただいた方ありがとうございます。  
桃かんとおいます。

かなり拙い文章になると思いますが、誠心誠意頑張りたいと思います。  
よろしくお願いします。

## 田覚めの朝、決意のとき

「んっ…」

窓から差し込む日差しが俺の顔を照らし、朝の訪れを伝える。背に感じるひんやりとした硬い石の感触。総てがあまりに懐かしい。もうはるか遠く、記憶の片隅に追いやつていたはずのものが俺を包み込んでいた。

ああ、何でこんな夢を……こんなにも、こんなにも私は此処に戻つて来たかったのだろうか？

そう、夢でなくては困るんだ。私は前に進むと決めた。今与えられた時間の中で、ゆっくりとチャンスが来るのを待つていよつと決めたのだから。

「口う、土郎！ またこんなところで寝ていたのかい？ まったく

……しうがない子だねえ君は」

ふと懐かしい声が響く。そう、これも幻聴だ、幻だ。そう思いながら、声のするほうに目を向ける。

そこには記憶の中にハツキリと残る、優しい笑顔をした俺の憧れの人が佇んでいた。

「じ、じいさん（き、切嗣）……？」

それは俺を救つてくれた正義の味方の姿。此処にいるはずのない人。

「さあ、大河ちゃんも待つてているんだ。早く居間においで？」

優しい笑顔が私を外に誘う。私は言われるままに立ち上がり、そのまま出口へと足を進めた。

「嘘、だろ……？」

愕然とした。私は完全に田を疑い、その場にボオッと立ち尽くした。

田の前に広がったのは、私がかつて住んでいた庭の風景。流れるよう広がる綺麗な風景だ。

「ほら、どうしたんだい、早く行こう？」

私の手を引き、ゆっくりと家に近付いて行く切嗣。私はそうしている内も、ずっと考えていた。

私は…英靈エミヤは聖杯によって世界に具現化されていた存在……。

「え？ ああ……うん、わかったよ」

そう、これではまるで過去に戻つてきただようではないか。

それから一週間が経とうとしていた。

そこで分かったことが一つあった。

どうやら私は、本当に過去……切嗣に助けられたすぐ後の時間に、どうこうわけか戻つてしまつたということ。

もう一つは私がこれまで経てきた時間の記憶、つまり英靈になつてこれまで戦つてきた中で培ってきた知識がはつきりと残つているという事。

「一体、どうなつてんだか」

一人縁側で空を見上げながら悪態を吐く。息の白色がまるで言葉に

力タチを持たせたみたいに、すっと現れ消えていく。  
なんだか不思議な気分だ。

此処でこいつやって、空をこんなにも平穏な気持ちで眺めているなんて。

「私、なんで此処にいるんだ？」

そんなこと、分からなかつた。ただこの一週間、ずっと怖かつたんだ。

次に目を覚ましたとき、またあの何もない……自分の力タチも分からぬ場所に戻っているんじゃないかと。

「それだけは……それだけは嫌だ！」

グッと握り拳を作り眺めていた空にかざす。

すごく、すごく小さい拳だ。強くなりたくて、助けてくれたあの人  
に縋つて、追いかけて、何とかあの人みたいになりたくつて足搔いていたあの頃の拳だ。

でも、きっと違う、今は違う！

「私は、見つけたんだ。やりたい」と、するべきことを…  
何に語りかけるでもない。自分の決意をそつと口にする。

そう、私は…いや、俺は誓う。

「この答えを見つけた自分の心に！」

不器用なまでに信じる道を貫いたかつての自分に…。  
不器用な俺を支えていた、最高の友人たちに！

だから、強くなろう。やり直すために。

いつか来る、あの冬に向かつて……俺は強くなる…

「パツツ！ でたああ～」

「あの、何ぞ、それ？」

翌日、俺は決意を固め、切嗣にこう切り出した。

「ねえ親父、頼むよ！ 俺に魔術を教えてくれ！」

「ヨシツツ！ いいよお。よく見てるんだあ

ぽんと叩かれた両の手から飛び出したのは、数羽のハト。なんでこんなマジシャン紛いになつていいか……。まあそんな具合で、切嗣の手から飛び出したハトは縦横無尽に居間を飛び回つていた。

「…といふか、その決め言葉……な、なんぞや。

「え？ 魔術を教えてつて士郎が言つから……」

「コツと意地悪な笑顔を浮かべながら、切嗣は俺をからかう。何だからひどく不快な気分だ。

「違う！ そんな誰でも出来るようなやつじゃない！」

俺はお膳をドンと叩きつけ、切嗣の顔をジッと見つめた。

そう、この人には生半可なことを言つても通用しないことは分かつていた。だから此処は頑固に、絶対に譲らない気持ちを持って、切嗣に対することが必要だったんだ。

「俺が教わりたいのはそんな手品じゃない！ ちゃんとした、魔術師が使う魔術だ！！」

「土郎……前にも言つたけど、僕は正義の味方じゃない。いや、正義の味方の成りそこないさ。だからそんな僕が教えたって……君はみんなを救えるヒーローにはなれないんだよ？」

すごく冷たい、でもどこか悲しさを孕んだ響きがゆっくりと俺に届いてくる。

何故だろ？ それが俺にはとても優しい響きに聞こえたんだ。だから俺は言わないといけない、そうじゃないんだって。

「違う！ みんなを救いたいって……そうしか思つていられないわけじゃない！」

上手く言える自信はなかつた。ただこれを言わなきゃ俺は此処から先に進めない、そう思つたんだ。

「そりやみんなを救えるヒーローになりたいよ。でも、そうじゃなくてさ……大事な人を守れる、そんな正義の味方になりたいんだ！ だから力が欲しいんだよ！」

そう、知つていたんだ、力がなければ出来ないことがある。俺が欲しかつたのは大事な誰かを守る力だ。そのためならどんな痛みつて厭わない。

覚悟は出来ていた。

俺が必死に言葉を綴っている間、切嗣は真剣な表情で俺の目を見つめていた。まるでその言葉に偽りがないかどうかを試すようだ。

「だから、だからっ！ 痛くても、辛くても最初から諦めたくなんかないよ」

「うん、いいよ」

さりりと風がなびく様にその一言は返ってきた。

「えっ？」

「うん、いいよ。教えてあげよう、僕の知る世界の神秘を」

満面の笑みを浮かべ、切嗣は俺の手をとる。その笑顔はどこか、かつて俺を救ってくれたときのあの笑顔に似ていて。

俺は知らず、涙を流していたのだ。

目的に一步近付いて安堵したのだろうか。それとも握った親父の手が暖かかったからなのか……なぜかは分からない。

ただ、その笑顔を見れただけで、俺は幸せだった。

## 別れ

「月が、綺麗だね。士郎」

切嗣と二人、縁側で空を見上げている。

空には満月がクッキリと、その存在を露にしている。

「そう、だね。じいさん」

このときの俺は、もうそれ以上の言葉を口にすることは出来なくなっていた。

俺は理解していた。もうすぐ、別れのときが訪れるって。それはかつて経験したことのある別れ。もう一度と経験したくはないと思つていた別れだ。

次第に家の外に出ることがなくなっていた切嗣。

表情も徐々に暗くなり、以前のような笑顔を見ることも稀になつていた。

古い記憶の中、かつて一度体験した嫌な思い出を、俺は再び経験しようとしている。

変えられるものなら変えたかったんだ！でもこれは決して変わらない、変えることの出来ないことだと理解していた。

だからこそ、大事にしたかった。切嗣と共にいる時間を。でも、それももうすぐ終わってしまうから……。

「ねえ、士郎。君は正義の味方になりたいかい？」

唐突に、静かに月を眺めていたはずの切嗣が俺に尋ねる。

俺はその問いに唖然としてしまった。その問いはあまりに穏やかだつたから。

「正義の味方……「うん、俺正義の味方になりたいよ」  
そう、俺は正義の味方になるつていう『理想』を捨てることはない。

でも、新しい生き方を見つけたんだ。

「正義の味方になりたい。でも、みんなを救えるなんて思つてない。俺は弱いから。でもさ、弱い弱いって言つてちや本当に守りたい人が出来たとき、守ることが出来ないなんて嫌だ。俺は……大事な人を守れる、そんな正義の味方になりたいんだ！」

きつとこれはこんな言葉じゃ伝えきれないんだ。

でも切嗣は笑顔を見せてくれた。  
いつも……幸せそうな笑顔で。

「そう、だね。きっとみんなを救うより、大事な人をずっと守り続けていくことの方が辛いかもしれない。そんなときは今の決意を思い出すんだ。いいね？君は強い子だ……」

「お……ありがとう、親父」

「ありがと……しのひ。ぼくは…きみの」

それが、切嗣と交わした最後の言葉になつた。  
もう動くことのない、話すこともない。

今を真つ直ぐ見つめる。

冷たくなつた親父を見ると、とても悲しくて涙が零れ落ちた。

ゆつくつと目を閉じる。

あの笑顔を思い出すと、嬉しくて、幸せで涙が零れた。

月明かりが照らす清涼な空氣の中、俺は再び切嗣と別れた。きっとこれが最後の別れなんだ。

俺の、かつての理想への今生の別れ。

## 世界の始まり

親父が死んだ。

かつて、HIMIヤシロウの生き方の雛形だった人。理想だった人。

葬儀の手配や色々難しいことは、藤村のとのの雷河じいさんが済ませてくれたおかげで、つつがなく終えることが出来た。

沢山の人が涙を流していた。藤ねえも、雷河じいさんも。

俺は泣けなかつた、いや、もう泣く事が出来なかつたんだ。だつて、俺は覚悟を決めたから。切嗣が最後にそうであつたように。

みんなの正義の味方じゃなく、誰かの……俺の正義の味方になつてくれたようだ。

そういうしてゐる内に49日が過ぎ、ようやく俺の周りが静かになり始めていた。

「 つづつ、くつ！」

ゆつくりと、異質な“なにか”が身体を駆け巡つていく。

俺は理解している、それが魔力。今、行使しようとしているものが魔術。

切嗣はやつぱり『強化』以上の魔術を教えてくれることはなかつた。

ただそれ以上に、世界の神祕、世界の成り立ちについて教えてくれた。それを学んでいく中でも収穫はあつたんだ。

相変わらず魔術回路もないこの身体だけ、『強化』を基礎からシカリと身に着けていくなかで、確実に以前の自分より何かが変わっている自信があった。

しかし、上手くいく」との方が少なかつた事も事実だった。

「ぐつ、うああ！」

木刀一本に、『強化』をかけるだけでも声を上げ、脱水症状を起こしてしまったほど体たらくだ。結局、今の俺じゃ何にも進んじやいない。

「ハアハア、はあ、つ！ ふう～」

身体を蝕んでいた熱い鉄の塊が、その力タチを消していく。それと同時に整えられていく呼吸、動悸。魔術というものがこんなにも身体を酷使するものだったなんて、久しく忘れていた。

「つたく、何してんだよ」

誰に言つてもなく投げ出された言葉。身体から立ち上る湯気と共に白い色を持つたそれが土蔵に響いて消えていく。何もかもが新鮮で、でも憤りを隠せない。こうしていふと思いつく、かつてもこんな気持で日々を送っていたんだ。

「進歩なしの毎日……か」

俺は手元にあつたタオルで汗を拭い、土蔵を後にすることにした。気が付けば月はすでに空の頂にあり、何かを告げるよつて俺を眺めている。

月に表情があるなら、もしかしたら俺のことを嘲笑っているのだろうか。

「それも風流つてな。さて、親父に挨拶して今日は寝るかな  
俺は独り言を呴きつつ、切嗣がかつて寝所に使っていた部屋へと歩を進めた。

気が付けば、寝る前にまず彼の部屋に行き、写真に語りかけることが日課になっていた。あまり人には知られたくない日課であったが、そうすることで切嗣との約束を忘れないでいられる。勝手にそう思つていたのだ。

切嗣の部屋に入り、ただじつと写真を見つめる。

一人になつてからそれを毎日のように続けていると、切嗣に対する別の感情が俺の中で溢れてきていた。それは……切嗣に対する贖罪だった。

俺はこれから起こりえることを知つていて。魔術師が殺し合つこと、も、これからこの地で多くの人が死に直面することも。それを知つてもなお、俺はそれを止めようとせずにただ『時が来ていない』という言い訳をし続けていた。

そして、切嗣が最期まで思い続けたであろう『あの少女』と会わせてやれなかつたこと……そのことが俺をどうしようもない絶望に駆り立てていた。

「ああ、じんなのはもう……」

そう、こんなことではもう、自分を正義の味方などと呼ぶことは出来ない。

それを少なくとも実行しようとしていたかつての自分にも、この理想を与えてくれた切嗣にも顔向ければ出来ない。

結局俺は再び生を与えられて、自分が最も成し遂げたい思いを実

行に移すために行動してしまった。切嗣、だつて……もつと幸福な最期を迎えることが出来たかも知れないのに。

だからこれは、俺の贖罪なのだ。

「親父、俺、裏切つてばかりだ」

口の中に感じる鉄の味、こんなにも苦しいものだとは思わなかつた。

ただ今はかつての理想の前で、これから自分がどうするべきなのか、それを考えなくてはいけない。

これが間違いであつたとしても、もつそれを巻き戻すことは俺には出来ないのだから。

## 世界の始まり（後書き）

こんばんわ、これまで更新していた分を一部……といつより大部分カットして更新を再開していきます。

これまで賛同いただいた方、本当にごめんなさい。ちょっとでも面白いと思ってもらえる作品をかけるように頑張ります。

## 必要なもの

一人になってしまったこの衛宮の屋敷で、俺は思考を巡らせていた。

このままではいけない。ハツキリとそれだけは分かる。  
俺は知識だけを有してこの繰返しの時間を過ごしている。  
それがあれば、大抵のことは苦も無くこなすことが出来るだろう。  
魔術の運用もそれを動かす自らの肉体自体もどうにでも鍛練することができるだ。

しかし、それではどうしても埋められないものは存在した。

「己の未熟さ、だな」

縁側に座りながら一人呟いた言葉に、どうすればいいのか分からぬという考え方しか正直浮かばなかつた。  
少なくとも戦いが起こるまでの間にかつての自分より強くなくてはならない。そうでなくては、俺の目的は達成されない。  
つまりところ、自分自身の身体の能力を底上げしないとならない。  
そのための経験値が、この身体には少なすぎる。

「だったら、そうなるために行動を起こすしかない  
かつてしなかつたこと、それをすればいい。

これから戦場に赴いてもいい、人外の者との戦いに身を投じてもいい。しかしそれにも問題はある。

それは何の経験もないこの幼さでは、誰も自分を魔術の使える者として信じてはくれない、相手にしてはくれないということだ。

「そうするためのきっかけ……」これが結局必要になるか  
穏やかに流れる時間の中、あまりに醜悪なことを考えているとい

う実感はあった。しかしすぐにでも動き出さなければいけない。一番手つ取り早い方法はどこかの魔術師と関わり合いになることだろう。

「遠坂、間桐……はダメだ」

一番最初に思い浮かんだのは一つの名門を、俺はあつせつと思考から外す。

俺は目的を達するためにあの戦いを再現しないといけないのに、みすみす自分の正体を明かすことなど出来るはずもない。

だがそれと同時にどこか言いようのない疑念が頭の中を駆け巡っていた。確かに目的はある、そのために強くなる必要も。しかし“戦いを再現する必要性”が見つからない。何か再現することを強要されているかのような感覚を覚えた。

しかしそんなことも言ひていられない。何を選択するにしても強くならなくては意味がない。ならばいつその事、生半可なものではない、関わるならば最も鬼門……廃人にされてしまつ、そんな魔術師のところに赴いてしまおう。この冬木から離れてしまつても構わないのだから。

「確か……アオザキ、だつたか」

不意にこの名前が口から零れた。記憶の中では魔法に至つた家系、とある靈地の管理者ということくらいしか情報がない。しかし、日本に残る名家といつてすぐに出るのは、もつてのこの名前しか俺にはない。

なんにせよ、そんな家系の者との間に行けば様々な経験を得ることが出来るだらう。関わる前に殺されるような下手をうたなければいい。俺はそう考えた。

ただこの名前を出した時、そして利用しようと思つたときに俺は何

故思いとじまらなかつたのだろうかと、後になつて後悔することになる。

そして俺は、『アオザキ』と接觸するために行動を開始することとした。

これがエミヤシロウの変化の最初のきっかけとなつた。

## 回り始めた歯車

「何の手がかりもなく、見つかるかつて！」  
自分の考えのなさを嘆きながら、俺は一人見知らぬ街を彷徨つていた。

理由は簡単だ。関わろうと決めた魔術師がいる場所の手がかりがどこにもないということだった。

ただ『アオザキトウコ』という名前を思い出し、これを手がかりにどうにかこの街、観布子という土地にやつてきていた。俺の記憶にあるその名の人物が、最後に世間……魔術師の間で“居るのでは”と囁かれた場所だったからである。

ここに来るまでにも色々と難関があつた。

一番の難関は藤ねえの説得。幼い俺を一人で遠いところに行かせるわけにはいかないと言い出したのだ。そのところは雷河じいさんが説得してくれてどうにかなつたが、その雷河じいさんにも納得してもらうのにもかなりの時間を要した。

まあ色々とあつてどうにか俺は一人で観布子市まで来ることが出来たのだが、これから先、名前以外の手がかりがない状態で人を、しかも魔術師を探すことはあまりにも困難だった。

自分にとつては、故郷と離れたあまりに遠い場所。知り合いもいなければ土地勘ない。俺は早速自分の思いつきを後悔することになつた。

「でも、ここがアオザキの手がかりがある気がするんだ……」

一人途方にくれながらもその確信はあつた。もちろんアオザキが管理しているという靈地にいることも考えはしたが、それでもこの観布子という街に手がかりがある様な気がして仕方がなかつたのだ。

しかし俺のそんな思いもよそに、時間は刻一刻と過ぎていった。次第にあたりは黒の濃度を増し、駅前でさえドンドン人が疎らになり始める時間に差し掛かっていた。

一人ポツンとこの時間帯にはふさわしくない年齢の少年、俺がその場にベンチに座り込んでいることがあまりに異質であつただろう。そしてそんな時間帯だ、言わずもがなおかしな考え方を持つた人種は多くいる。

「あれえ！？ どうしたの～ぼくう？ ママとはぐれたのかなあ？」  
「お兄さんたちが探してあげようかあ？」

大げさな抑揚のついた声が俺に降りかかる。俺に声をかけてきたのは大柄な二人組。明らかに親切心から声をかけているのではない。表情から読み取れるのはハッキリとした悪意だ。

「いえ、もう帰りますから」

俺は荷物をまとめたバッグを担いでその場から立ち去ろうとするが、俺の行く道を阻まんと二人は道を塞ぐ。あまりの伸長差に俺はどうすることも出来ない。

それにもいはついたが、何よりこんな街中で不良に子供が絡まれているにも関わらず、見て見ぬふりをする歩行者たちに俺は憤りを覚えていた。

「さあさあ、行こうぜえ！？」

男の一人が俺の担いでいるバックを掴んで、路地裏に引っ張りこもうとする。

無論、こんな街中では魔術は使えない……子供の俺では敵いつこない。とにかくどうにかして逃げようと思つた時だつた。その声が聞

「えてきたのは。

「ええ、そうです。駅前のベンチで、小さな男の子が絡まれていて……すぐ来てくれます？……あ、ありがとうございます」

人ごみから聞こえてきたのは男性の声、会話の内容から通報しているのだろうと思ったのだろう。男たちは顔を青くして、早々に俺の傍から離れていった。

一瞬静寂に包まれた駅前の一角、しかし数秒後には何事もなかつたかのように人々が再び喧騒を取り戻していた。

俺もあまりにあっけない幕切れだつただけに少し放心していたが、その喧騒の中から男性が声をかけてきたことによつてようやく正気を取り戻していた。

「君、大丈夫だつたかい？」

「あ、ありがとうございます……」

その男性は、子供のような笑顔を見せながら続けてこう呟いた。

「今時あんな小芝居に引っかかる人もいるんだね、ちょっと面白かつたよ」

あの時助けてくれた声の主……この男性はそう言いながら俺に差し出したのは自身の掌。それから伝わってくるのはあまりにありふれた、『誰しもが持つてゐる親愛』の心だ。

「なんか困つてゐみたいだつたからほつとけなかつたんだ。さあ、ここも危ないしお店にでも入るつか？」

その男性は俺の手を引いて歩き始めた。  
これが俺のもう一つの変化の始まりだったとは、この時考えもして  
いなかつた。

「衛宮……士郎くんか。冬木ってす」く遠くから来たんだね？」

俺は男性に導かれるままに、彼の行きつけだといつお店にやつてきていた。落ち着いた雰囲気を感じる店内からは、大勢の人が楽しく会話をしている音が聞こえてくる。

思えば、切嗣が亡くなつてからはこんな雰囲気とは少し離れたところにいたような気がする。だからだろうか、男性の優しさが凄く嬉しい感じたのは。

「はい、ちょっと会いたい人がいて……」

男性の言葉に答えながら、店員から出された「コーヒーを口にする。その仕草に男性は微笑みながら、君つて子どもっぽくないよねなどと呟いてくる。

「ん~出来れば手伝つてあげたいんだけどなあ……。さすがに会つたばかりの人間を信用することは出来ないよね?」

「すばりと核心をついた一言が俺に投げかけられる。当たり前だ、ただでさえ探している人物は魔術師。それを一般人に頼つてどうにかなるわけがない。それにこの人にも迷惑がかかるのは目に見えるいる。」

「あ、いえ、そうゆうわけではなくて」

「……つと、そういうえば名乗つてなかつたよね」

「そう呟きながら男性は懐から名刺を取り出して、俺に差し出してきた。

「えつと、クロ……キリさん?」

「ううん。『クトウ、クトウミキヤつて読むんだ。まあ『仕事』で使つてる名前…なのかな。まあ幹也つて呼んでくれればいいから」幹也さんは恥ずかしそうに笑つ。俺にはその理由が分からなくてとりあえず相槌を打ちことしか出来なかつたが、何故かこの人は信用できる人なんだということはハッキリと思った。

それから少しの間、幹也さんとの会話を俺は心の底から楽しんでいた。最初に思つた懐かしい感覚も、今なら何とか説明することが出来る気がする。

幹也さんの纏つていた空氣感が『普通』で安心する……どこか羨ましさすら感じられた。

「だからさ、君みたいに危なつかしい子はほつとけなくてさ。僕の…まあ奥さんもそんな感じの人なんだけど」

苦笑いをしながらそう呟く彼の顔から感じたのは、その“奥さん”に対する慈愛だった。その表情を見た時やはりこの人は最初に思つた通りの、信用に足る人物なんだろうとハッキリ意識することが出来た。

この人ならば頼つてもいいのではないか、そんな気持ちが頭を過る。しかしその考えにNOを突き付けながらも、幹也さんの言葉に甘えてしまおうと考へてゐる自分がいた。

「だからつて訳ではないけど、僕にも協力させてくれないかな？ こう見えてモノ探しは得意なんだよ」

「いや、本当に会つたばかりの人に頼るわけには……」

俺がどうにも断り切れず言葉を濁していると、店の入り口のチャイムが短く鳴り響き、新たな来店を告げていた。

その音の方に目をやつた時、ハツキリ幹也さんの顔が引き攣つてい  
くのが分かつた。会つてはいけない人物に会つた時のようなそんな  
雰囲気を醸し出している。

俺の座る位置からは確認できないが、その足音は迷うことなく俺  
たちの座るテーブルへとまっすぐ歩を進めていた。そして悠然たる  
響きが投げかけられる。

「何してんだ、幹也。今日は早く帰るつ……お前、一体“何”だ？」

俺が出会つはずがなかつた、ある美しき死に神との出会いだつた。

## きっかけ

必死に、必死に俺の理性が、いや俺の総てが訴えをやめない。

「もう一度聞く。お前は一体“何”だ?」

女性は黒絹の髪ゆつくりとかき上げながら、凛とした響きを再び投げかける。それからはハッキリとした俺に対する警戒心を感じ取ることが出来る。いや響ひこなれば警戒心などではなく殺意だ。

「お、俺は……」

幹也さんの名を呼んだその女性の瞳に射抜かれ身動きが取れない。頭では冷静に状況を判断している。なのにこの殺気に身体が慣れていないからだらうか、言つことを聞かない。

「俺は衛宮……衛宮士郎です」

その眼光から、その立ち居振る舞いからハッキリと分かる。この女性は幹也さんの知り合いのようだが、この人は幹也さんのような『普通』の人ではない。寧ろ俺の側、非日常に身を置く人間。それがこの女性なのだろう。

「ごめんね式。ちょっと色々あつてさ」

幹也さんは素直に謝罪を口にしながら、式と呼んだその女性を自身の隣に手招きする。彼女もその誘いに素直に応じながら流れるような動きで俺の目の前に腰かけた。言わずもがな、未だに俺への警戒を解いたわけではない。その瞳は変わらず俺を見据えたまま、冷えた視線を俺に向け続けている。

「じゃあ紹介するね、この人は両儀式。僕の奥さん……でいいよね?  
?」

「なんでオレに聞くんだ？ お前がそう思つてるならそれでいいだ  
ら」

「え？ ……すいません、もう一回いいですか？」

「うん、この人は式。僕の奥さんなんだよ」

正直に言おう、信じられない。このあまりに特異な人が、目の前のこんなにも『普通』な人の伴侶だとは。誰に言つてもそう簡単に分かる人はいないだろう。

それだけこの人たちが夫婦だということが信じられないのだ。しかしどうだろう。先ほどまで俺に殺氣を向けていたはずの瞳はすっかり優しい色を滲ませて幹也さんを見つめている。それは幹也さんからも同じで、一人には強い結びつきがあると容易に感じ取ることが出来た。

と、思つていたのだが……。

「 でね、土郎くんに協力してあげようつて  
「 またお前はお節介を……そんなどから！」

式さんがテーブルに着いてからというもの、幹也さんと一人で会話を始めてしまつて俺は完全に置いてけぼりをくらう破目になつていた。

というよりも完全にいのちとして扱われているような、全く眼中に入つていないうやうな……とにかく一人の会話を俺は黙つて聴き続けることにした。

「　　おこ、衛宮…」

「は、はい！」

不意に式さんから声をかけられる。その声はどこか荒々しく、表情からは無理やり説得されて少し不愉快だと言わんばかりのオーラが満ち満ちている。俺の方はといつて、田の前のコーヒーを何度も運んだかも分からないほどに待たされて正直疲れ切っていた。

「お前にまず一つ、言つておかな」といけないことがある」

「　　な、なんでしじう？」

その響きから理解出来るのは否定を許さない確固たる意志。寧ろ俺の意見など端から聞く気もないのだろう。そしてギロリと俺に視線を向け、ゆっくりとじっかり刻みこむよつてつ眩いた。

「いいか？ 幹也はオレのだ。お前がどんなに頼つたって口いつはオレのだ」

うん、理解した。完璧になんかずれてる……なんていうか俺、この人凄い苦手だ。

「　　で、最初の質問に戻るけどな。お前一体“何”だよ？」  
「式、幾らなんでも酷過ぎやしないかい？ こんな小さな子をつかまえてさ」

結局、よく分からぬままに俺は一人のペースに巻き込まれていった。一しきり話し終えた後落ち着ける場所に行こうと三人で店を出た俺たちは、幹也さんが独身時代からずっと使い続けているアパートにやつてきた。今幹也さんはコーヒーを入れるために台所に立つていて、俺と式さんが向かい合つ形で座つている。しかし先ほどの店での惚気ムードはどこに行つたのやら、式さんの表情は俺と初めて顔を合わせた時の殺氣を滲ませている。

これ以上はぐらかし続けても無駄。その表情を見れば一目瞭然、自分たちに害を為す者ならば遠慮なく排除する。式さんの表情はそう告げていた。

突き刺さる視線に俺は姿勢を正し、言わないでおこうと思つていたはずの言葉を口にする。

「人を……ある人を探しています」

「ふうん。それはお前と“同種”って考えていいのか衛宮?」

『同種』

そう。もう式さんは俺が何者かを直感で理解している。俺が魔術に関わりを持つ人間だということを、非常の側に身を置く者だとということを。

「そうです、その人と関わりを持ちたくて俺はここにきました」  
肝心な部分、『利用するため』ということを俺は告げずに話を進める。思うに式さんは俺がアオザキと会おうとしている事情なんて

どうでもいいはずだ。

ジワリと額に汗していることを肌が感じる。それだけこの両儀式といつ人との会話にすぐじく緊張しているのだと改めて理解させられてしまう。

かつてならばこんな局面は簡単に打破出来たのに……それがどうしよつもなく悔しくて仕方がない。

「鮮花たちと同種つてことかよ。……まったく！ 本当に似たような変な奴ばかりに好かれやがつて」

呆れ顔になりながらベッドに身を投げ出す式さん。お約束の展開だよと悪態を吐きながら、ジッと「コーヒーを入れていい幹也さんを眺めている。

俺はというと質問が終わつたのか終わつていないのか未だに分からず、困惑したまま一人を見ていた。

「あ、あのすいません。式さん？」

式さんの言葉が何を指し示しているのか、よく分からぬままとりあえず彼女を呼んでみる俺。だが帰ってきたのは、無言の視線だけ。完全にイライラしていらっしゃる……もつこれ以上何かしたら、どうなるか分かつたもんじやない。

「式はコーヒー……いらないよね。つまり鮮花に似てるつてことは、もしかして魔術に関わりを持つ人つてことかな？」

準備した「コーヒー」を俺に渡しながら、幹也さんが尋ねる。式さんは面倒そうにコクリと一度だけ首を縦に振るだけだった。それにしても『魔術』というワードを全く違和感を持たずに使う幹也さん。この人に式さんが関わっているという時点で何かしらそれに関わりを持つているだろうという想像に容易かつた。

「やつぱり。お一人つて魔術師と何か関係あるんですね？」

「まあ、前に勤めていた会社の社長が……そうゆう関係の人だったからね」

しみじみと懐かしむように呟く幹也さん。一方式さんの方は嫌なことを思い出したように不機嫌な顔をしている。

それにしても式さんはともかく、幹也さんが魔術師と実際に関わりを持つていていうことはあまりに信じられなかつた。なぜなら幹也さんのどこをとっても『特別』な所は見受けられない。

いや、この考え方自体が間違つていいのか。それはともかく、もしかすると本当にアオザキにつながるヒントを手に入れたのかもしぬな

い。

しかしそれも次の幹也さんの一言であっさりゴールへと変わつてしまつとは考えもしていなかつた。

「士郎くんも知つてゐるんじゃないかな？ 橙子さん……蒼崎橙子さんつて言つんだけど」

「 つえ？ すいません、もう一回言つてもらつていいですか？」

「前にも、蒼崎橙子さんつて人のとこで働いてたんだよ。今はもうこの街にはいないんだけどね」

返した言葉はあまりに間抜けで、正直これから一体どうなつていくのか……今の俺では全く予想することは出来なかつた。

「ここか……うん、ここで合ってるな」

幹也さんと知り合いになつてから一ヶ月後、彼からに送られてきた地図を頼りに俺は自分の住む街を離れ、見知らぬ街にやつて來ていた。そこは冬木からだと観布子ほど離れているわけではないが、新都などと比べるとこれから発展していくであろう可能性を感じさせるような街。

それにしても幹也さんの捜索能力には脱帽である。

幹也さん曰く、アオザキが会社をたたんでしまつてから全く連絡も取り合つていなかつたにも関わらず、もの一ヶ月ほどで現在の居場所と連絡先までも仕入れてくれた。感謝してもし足りないくらいだ。

しかし遠く見ていた街にこうやつて立つと、なぜか不思議な感覚になる。観布子の時にも感じていたが、知らない土地に『戦う』という目的以外で来ると何故か少しだけ嬉しい気持ちになるのだ。俺は今まで色んな風景を見てきた。

荒廃した地平、鉛色に重い空、血に塗れた大地、そして多くを助けるために犠牲にしてしまつた人たちの亡骸。でも違つていた、ありふれた景色がこんなに綺麗だったことを俺は改めて感じていた。

「……にしても、ここに本当に人が住んでるのか？」

指定された場所はもう何年も人の手が入つていないうな廢れたビル。人もあまり寄り付かない、街の中心から外れた場所にそれはあつた。

『アオザキトウコ』……式さんと幹也さんの話だと、掴み所のない人らしい。それに加えて二人はちゃんと意味を理解していなかつたが、アオザキトウコは魔術協会から封印指定を受けた魔術師なのだという。しかしこれだけでは情報が不足しすぎていて一体どんな人物なのか、全く予想が出来ない。

「とにかく入つてみるしかないか」

ビルの入り口であれこれと悩んでいる場合ではない。俺は決心をかため、恐る恐るビル内に足を踏み入れようとした時だつた。

「 ッッ！ な、何だつ！？」

身を突き刺すような明らかな感情。これは最近にも感じたもの……それは殺氣。かつて戦場に身を投じていた頃、日常茶飯事に受けていたモノ。

これは……上から？

「意外に若い魔術師だな。この場所が分かるなんて意外だつたよ。でだ、人の工房に勝手に入つたんだ。覚悟は出来ているんだろうな？」

階上から聞こえるのはあまりに綺麗な声。それは殺氣と非常さを内包した響き。

見上げた先には、声に違わぬ美しい女性が立つていた。

「あ、なたが……アオザキ？」

「そんなこと、どうだつていいだろ？に。まあ『シキ』の真似をす

るわけじゃないんだがね、殺しあおうか？若い魔術師くん

ドンと重い響きをたて、田の前の魔術師が手にしていたアタッシュ  
ユケースを床に置く。

その音に続くように奏でられる甲高い靴音。

「ああ、餓の時間だ。存分に楽しめ」

現れたのは嵐、そして黒い猫。それは爪をたて、牙を向いて俺へ  
と突進してくる。

「この俺の幼い身体では避ける事の出来ないスピード。

ダメだ。こんなところで戦つては！？

そんなこと、無駄だ

でも、俺にはあの人に対する敵意なんて……

見せ付けるのだ

一体何を？

覚悟、そして自らの力を

そり……自らの力を見せ付ける

英靈であった私の

今の俺の力を！！

迫る、それはさながら身を切り裂く風。ならばと俺は息を呑んで、駆ける。

分かること、それは“今の俺”には離れた敵への攻撃する術を持たないこと。

ならば近付け！唯一の攻撃手段を生かすことの出来る場所まで！

一から、何のアドバンテージもないこの身体に魔術回路を打ち立て魔力を通す。それは焼けていくような鉄を焼き入れる様な感覚。気持ち悪い……痛くて、辛くて、膝を突いてしまいたくなる。

その痛みに耐え敵を見据え立ち続けた。

俺には、その痛みに耐えるだけの覚悟があるはずだ！

「同調・開始！」  
トレス・オン

お決まりの言葉。だからこそ、俺にとつては必要不可欠な言葉。目の前に迫る猫。普通に当たれば骨は砕け散る。

当たりに行つても同じなら、向かい討つての一撃で勝機を見つける。

ズタボロな身体に鞭を打ち、俺は一気に階上に向け駆ける。身体に『強化』の魔術。成功とも言えない、穴を見つければあり過ぎる成功のない魔術。

「……ツシー！」

ゴキリと音をたて、猫が俺の足元に沈む。

突き出した拳に残る鈍い痛み。そんなことは今は考えない。痛みを

思考の外に逃がし、次の一手を打つために顔を上げ、階上にいるはずの魔術師へとまた疾走を試みる。

「なかなかの瞬発力だ。それなりに鍛えてはいるようだな」

そう、その響きを耳にし、俺は自分の間違いを痛感せられた。こんな安直な行動、簡単に見破られる。これは子どもの喧嘩ではない、相手は……相手は、生糸の魔術師なんだ。

「だがな、これは『魔術師の殺し合』なんだぞ？」

「ハツツツ……」

落下する。俺の身体が、俺の意思とは無関係に……ただ落ちていく。

そう。俺は昇っていたはずの階段から落り、出口まで落ちていた。身体にははつきりと衝撃を受けたが残る。魔術師は俺の見えないとこから、第一手を用意していたんだ。

「身体は頑丈なんだな……なかなかに楽しめたよ、魔術師くん」

冷たい言葉が頭上から降つてくる。霞みゆく意識の中で最後に目にしたのは、あまりにも美しそう、そして冷酷すぎる魔術師の表情。

「お、俺は……まだ……」

総てが甘かった。いや、もしかすると口を過信しすぎていたのかも  
しない。俺は最後の強がりも口に出来ず、闇の中へと意識を落と  
していく。

interlude

それは人外が、互いの血を求める狂う狂乱の夜。

魔術師が根源の渦への到達を悲願とし、その業を昇華させる時。廃ビルの一室。机とソファ、そしてはたから見ればガラクタばかりが散在している、おおよそ何かのオフィスとは誰一人として思わないであろう部屋である。

ここに、二人の魔術師がいる。

一人は衛富士郎、かつての英靈の魂を宿したこの世界のイレギュラーア。彼は今、ソファで寝息をたてている。身に受けたダメージを少しでも回復させようとしているかのように。

「……ああ、来たよ。確かに前の言つ通りだつた」

淡々とした女性の美しい声が部屋に響く。その瞳は鋭く、自らが打倒した若い魔術師を捉えている。

その声の主こそ、衛富士郎が面会を求めていた人物。

名を蒼崎橙子。このオフィスの主であり、魔術協会より封印指定を受けた魔術師の一人である。

彼女は『HIMIヤシロウ』という名の少年が自分のところに来ることを、今電話で話している元部下・黒桐幹也から事前の連絡で聞いていた。

そう。わざわざ黒桐幹也が連絡までして、自分に会わせようとする

のだ。それ 자체がおかしさを物語つている。

「しかしね、下手すると殺してしまうところだつたぞ。半人前の魔術師ならば先にそう言っておけばよかつたろうに」

呆れたと言わんばかりの声で橙子は幹也に対して悪態を吐く。しかし受話器の向こうからは帰ってきたのは意外だと言わんばかりの驚き悚いた響きだった。

あの子どもには特筆すべきものはない。

ただ一つ、自分と相対した時に感じさせた殺氣。それは幾度となく修羅場を乗り越えてきた者が発するモノのそれに等しい……いやそれ以上のモノだった。

その点だけを見るならば、確かにあの年齢の子どもにしては筋が良いのかもしれない。

それこそ彼女がエミヤシロロウに下した評価だった。  
きっと式も同じことを思ったに違いない。だから何も言わずにあの少年を此方に寄越したのだろう。  
しかし受話器の向こうから聞こえてきた返答は、自身が予想したものとはあまりにかけ離れていた。

「何、だと？ 本当に式がそう言ったのか！？」

それは式が言つたとは思えないような言葉だった。しかし彼女の夫、黒桐幹也がこの手の冗談を言つわけもない。それは紛れもない事実なのだ。

「なるほどな……全く、お前たちと関わつてると退屈をしないよ」

幹也の返答に、橙子は面白そうに口元を歪めた。

「まあ、後は私に任せることいい。式がそう言つたんなら、お前たち

でこの子をどうにか出来るわけではないだろうからな

彼女のあまりに素直な反応に、幹也は溜息混じりに問いかけてくる。だがもはや橙子には彼の問いかけなどより、今日の前にいる少年への評価を改めなければということに興味の大半をもつていかれていた。

「 大丈夫だ、悪い様にはしないさ」

最後に一言告げ、あつさりと電話を切る橙子。おそらく受話器の向こうでは幹也が慌てふためいているのだろうと想像しながら笑みをこぼす。

そうして自らの工房に足を踏み入れた少年へと視線を移し、先ほど幹也の口から出た『式が言つた』といふ言葉を反芻する。

「『普通じゃなさすぎむ』か……」

それは魔術師からすれば当たり前のこと。世界の神秘に触れている、非日常に身を置いているのだからそれは当然だろう。しかし式が言つた言葉が、他の魔術師や人外のモノと比べての事ならばかなり意味合いが変わってくる。無論式ならばこれまでの経験で、エミヤシロウが魔術に関わりをもつてているであろうといふことは一目瞭然だろう。それを踏まえてあえてその言葉を選んだとするならば、それはあまりに興味をそそられることなのではないか。そしてもう一つ、『エミヤ』という名。

かつて多くの魔術師を震え上がらせた『魔術師殺し』と同じ名を田の前の少年は持っている。もし本当にあの男の関係者ならばこんなおかしな巡り合わせはない。

想像通りならばこんなに面白いことはないと、嬉しそうな顔を見せ橙子は胸ポケットに入れてあつたシガレットケースを取り出し、煙草を一本取り出した。

「 ああ、本当にせつないば……」

火を燈した煙草から立ち上る煙が徐々に室内を覆っていく。まるで彼女の心を表す様に、靄がかつたその向こうに、かつて対峙した憎むべき者を思い描くかのよう。

これから起つてゐるであろうことを考えるだけで、彼女は自身の興奮を隠せなかつた。それは魔術師としての性か、それとも人としての興味から来るものか。どちらにせよ蒼崎橙子にとって、退屈しきになることは変わりないのだ。

「確かに、どう転んでも面白いことは変わりはないか」魔術師は咳く、その瞳に嬉々とした色を漲らせながら。それはまるで子どものように、そして異常者のよう。

それが一体どちらなのか、その答えを知るのは彼女だけであった。

interlude out

## 朝、見知らぬ部屋

ひんやりとしたタオルの感触。

冷たくて、気持ちが良くて、心地よくて。

それに引かれるように、俺の意識は覚醒へと向かう。大事なものを思い出すように。

「…………」

視界に蛍光灯の光が痛い。慣れない視界をじんわりと正常に戻しつつ、俺は起き上がり周囲を眺める。

「…………」

「…………」

「…………」

ギイと音をたてて開けられたドアから眼鏡をかけた赤毛の女性が一人、にこりとした笑顔を見せながら入ってきた。大量の書類と、救急箱を手にして。

「え？ あ、貴方は？」

俺は部屋に入ってきた女性の方を見ようと身体を起こそうとするが、あまりの激痛にうまく身体は動いてくれない。

「うん、田はしつかり見えてるわね。熱は……大丈夫。怪我はまあ、ちょっと酷いかもしないけど」

女性は荷物を置き、俺の前に座りながら俺の様子を見てくれる。そうして彼女は救急箱から包帯を取り出し、俺の腕に巻かれた包帯を取り替え始めた。

「今日はサービスよ。普段は絶対にこんなことはしないの」部屋に入ってきた時と違わぬ笑顔を見せ、彼女は手際良く作業を進めた。しかし女性が俺の包帯を取り替えてくれている間、俺には何が起こったのか理解できないほどに困惑していた。そう。目の前の女性こそ、俺を打倒した魔術師……アオザキその人だったからだ。

「どうしたの？ 少し強く巻き過ぎたかしら？」アオザキは不思議そうな顔をして俺に尋ねる。

あなたがあまりにあの時と雰囲気が違いすぎるから困惑したと言えぬ俺は平静を繕つよう深呼吸をして、噛みしめるように返答する。

「いえ、別に……たゞ少し身体が痛くて。あ、俺は土郎。衛富士郎です」

「ええ、知ってるわ。私は橙子、蒼崎橙子よ」はつきりとそしてあまりに簡潔に言葉を返すアオザキ。何か色々俺と戦った時とはあまりに食い違つてゐるが、この人が俺の探していたアオザキトウコその人であるといつことは間違いないらしい。

「やっぱり、あなたがアオザキ……」

俺の緊張と困惑を感じ取つたのだろうか、アオザキは無言で俺から離れて自分のデスクに腰を下ろした。そして、ゆっくりとした動作で耳にかけていた眼鏡を外しながら呟く。

「さて、自己紹介もすんだんだ。本題に移ろつか？エミヤシロウくん？」

鳴り響くような、綺麗な声が部屋に響いた。刹那、思い出すあの屈辱。倒れた俺を見下す表情。田の前の女性の瞳は瞬時に別のものへと変貌を遂げた。

それは魔術師。自らの願望のために、手段を選ばず何でも犠牲にしてしまう者の瞳だ。

「あ、あ……俺は！」

「その目から感じたのは殺氣だけではない。蔑むように、嘲笑うようにすら見えた。

「……全く！ お前は一体なんなんだろな？なぜ式があんなことを言ったのか……今のお前からでは想像できないよ」

視線と同様に、嘲りを孕んだ響きが再び投げかけられる。それは完全にあの時相対した魔術師のモノに相違なかつた。

『試されている』。素直にそう思つた。あの時の戦闘も、そして今も……俺はこの人物に品定めをされているのだ。

「式さんが言つたことってなんですか？」

呼吸を整え、しつかりとした視線を俺はアオザキに向ける。怯える身体を制し、ゆっくりと言葉にしていく。魔術師との対話がこんなに神経を使うモノだったのかと、改めて思い知らされる。

「橙子でいい。……まあ式はね、お前のことについて言つたんだ。『普通じやなさあざる』と。」

一言、俺に向けて放たれた言葉は、正直俺の予想しなかつたものだつた。

あの一日で特異であると見て取れる人間が俺を『普通じゃなあすぎる』と言つた？何か悪い冗談なのだろうか。

しかし俺が頭を悩ませている最中にも、橙子さんは矢継ぎ早に言葉を投げかけてきた。

「まあ黒桐が連絡してこなければ、その場で殺していた……。ただし式の言葉もあって、お前に少しだけ興味が湧いたんだよ」

橙子さんは俺を正面から見据える。それは俺の意思の確認。

“今のお前なら、いつでも殺すことが出来る”暗にそう言われていると、その言葉から理解することは容易だった。

「さて、まず三つ質問ばかり質問だ。お前は衛宮切嗣といつ男を知つてしているか？」

ズバリと、橙子さんは俺の想像していなかつたことを俺に問いかけてくる。無論、目の前の女性は俺の黙秘権を完全に否定している。隠すことなどではない。これは寧ろ今の俺が魔術師に存在を認めてもらつたための名刺代わりなのだから。

「はい、衛宮切嗣は俺の育ての親です」

「む？つまりお前は切嗣の実の子でもではないと？」

怪訝な表情で俺を睨みつける橙子さん。俺は構わずに自分の素性をドンドン明かしていく。

「俺は冬木で起こつた災害の孤児でした。切嗣はその災害の後、すぐ俺を引き取つて育ててくれたんです」

彼女は俺の言葉に耳を傾けながら、何か考え事をしている様子だつた。そして考えがまとまつたのか、もう一度俺を見据えて問いかけた。

「では一つ目。お前は衛宮切嗣に魔術の手ほどきを受けたのか？」  
「ええ、ただ切嗣が教えてくれたのは魔術の大まかな知識と主に『強化』です。常々才能がないと言われてましたから」

「待て！ じゃあお前は『強化』しか使えないのに、単身で魔術師の工房に侵入したというのか？ 呆れたやつだな……」

橙子さんは俺の蛮勇とも言える行動を苦笑する。笑われても仕方がない。だが今の俺の身体では『強化』しか……いやそれすらまともに使えない。それを打開するためにここに来た、これは間違いではないはずだ。

それから切嗣絡みの質問は続いた。

俺はぐつと握り拳を作つて、この嘲りともとれる橙子さんの言葉を受け続ける。いや、寧ろ今の傷付いた状況では俺には何も出来ないという方が正しいのかもしない。

「……なるほどな、大体は分かつた。あの『魔術師殺し』が死ぬ前に残した忘れ形見がお前ということ……つまりお前は私を『魔術師殺し』と同様に師事したいとでも？」

来た、この言葉を待つていた。別に俺は蒼崎橙子を師事したいわけではない。ただ魔術の世界の入り口とじよつとしているだけに過ぎない。

だからあえて俺は嘘を言わない。ハッキリと俺の目的を口にする。

「……あくまで強くなるきっかけが欲しいだけです。師事して後ろ盾を得ようとか、そんなことは思っていません。」

「これだけの言葉では説明には不十分かもしだれない。しかし橙子さんは大体のことをくみ取ったのか声をあげて笑った。考へてもみれば、こんな子どもが何を生意気なことを言つてゐるのだろう。だが、俺にはこれ以上に説明できる言葉を持ち合はせているわけではなかつた。

一しきり笑い終えた後、呼吸を整えながら橙子さんは“いいだろう”と呟いた。田尻に溜まつた涙を拭きとしながら、もう一度俺を見据える。それはおそらく最後の確認のためだろう。

「まあ気に入らなければすぐこいつでも出来るということを覚えておけよ。今後お前がどれだけ出来る奴か調べるとして……もし修行が必要ならば手を貸さないでもない……さて、最後の質問だ。お前は一体“何”だ？」

「え？」

予想出来ない一言。式さんに初めて会つた時にも言われたその言葉に俺は思考を乱されて……自分でも何が何だか全く理解できない。ただ、俺にはこいつ答えるしか術が見付からなかつたのだ。

「誰つて……俺は衛宮士郎です」

間抜けな顔をしているつていうのは十分に分かつてゐた。ただ、俺にはこいつ答えるしか術が見付からなかつたのだ。

橙子さんの眼は、俺を瞳を見つめ、嘘を言えれば呪い殺さんとばかりだつた。

その手は俺の首筋を握りつぶそうとしている。

「お、俺は……」

「そつだ、『今』の君は衛富士郎だ。しかし……」

“私と戦っていたときのお前は『今』の衛富士郎ではないだろ？”

完全な停止。

思考が完全に止まる。

何も出来ずに、顔を伏せる。

分からぬ、わからぬ……ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ  
！！

嘘ダ、分カラナイハズガ無イ

ソウダ、俺ハ英靈ダツタ。世界ト契約シテ、多クノ戦場ト、数多ノ  
血ヲ見テ来タ。

「確かに、あの時の衛富士郎は少し違っていた。でも……」

ソウダ、俺ハアノ頃トハ違ウンダ。答エヲ見付ケタ。ソシテ……

「俺は、衛富士郎です！」

そう、俺はそんな疑問を打破してきた。  
だから、今ハツキリ言えるんだ。

「だから強くなりたいんです。強くなつて……」

守りたい。大事な人を。俺を救ってくれた、俺の道を示してくれたあの子を。

何時になく心は澄んでいた。目の前にいる橙子さんも殺氣を消して、苦笑しながら煙草の火をつけようとしていた。大丈夫だ、きっと……これからもやっていける。

あの冬に向けて、俺は再び進みだした。

俺の総てを変えるための戦いの日々が。

## 荒廃の大地

広がるのは見慣れた光景。

鉛を垂らし込んだように重く落ちる空。

荒れ果て、目も当てることの出来ない大地。

そして数多の剣、墓標のようにただ冷たい剣の葬列。

「ああ、俺は……まだ此処にいる」

そう、俺は此処にいる。この世界から逃れることは出来ない。どれだけ違う風景を見ようと、感じたことのないことを感じようと。俺はこの世界から、この呪縛から逃れることは出来ないのだ。これは……いやこれこそ俺がエミヤシロウたる由縁の風景なのだから。

「でも、ここで立ち止まってばかりはいられない」  
ジックと、剣の葬列の終点に目をやる。彼方、砂埃をあげてこちらに歩いてくる。

赤い外套に身を包み、焦げた肌をした一人の男が。

「なんだ、そんな顔するなよ。久しぶりの再会だろ？」

男は何も答えない。ただこちらを睨み付けるだけ。感じられるモノは明確な一つの感情。

俺には分かっていた。そいつが言いたいことも、したいことも。

「いいぜ、俺だって試してみたいんだ」

手のひらに現れる一対の夫婦剣。ゆっくりと掲げられるそれを目にし、俺は思い出していた。自分の信念を疑わず、走り続けていた

あの頃を。俺の歩んだ道が間違いではないと気付かてくれたの人たちを。

そしてそれは、俺が行おうとしている矛盾を肯定させるための言い訳に過ぎないと理解していたのだ。

「さあ来いよ！ 英靈HIMIヤー！」

俺の敵意を理解したように、赤い外套の男は俺に向け疾走する。同時に、後ろ手に構えていた剣を、風をも突き破るような速度をもつて突き出す。

「 ッツ！！ 投影・開始トレイス・オン」

甲高い音をたて、剣の侵攻が止まる。俺は瞬時に目の前の敵が持つものと同じ夫婦剣を投影し、敵に対する。容赦のない力、鍔迫り合い。力を抜いてしまえば、そのままに斬りかかられてもおかしくはない状況。

「はああああー！」

その定石を覆すように俺は剣をくるりと返し、もう一方の剣を横に滑らせる。

狙うはがら空きの胸。しかし、赤い外套の男はそれも先読みしていたように、剣を外された途端、俺の剣が当たる寸でのところで後方へと飛び退いた。

「ああ、そうするよな。俺もそつだつた……」  
語りかけ、相手の表情を見据える。

憎しみの籠った、今にも爆発してしまいそうな爆弾を抱え、男は再び疾走を開始する。

これで最後だと、お前は死ぬべき人間なのだと諭すよつ。

「お前の気持ちは良く分かる。でもな……俺は自分には負けられないんだよ」

その言葉の裏に、もう引き返すこと、逃げることが出来ない自分の戒めを籠め、俺も男と同様に血の速度を上げていく。

互いの距離が縮まる。そつ、これが夢だと分かっていても、俺の心は躍っていたのだ。

さあ、俺はどれだけ近付いた？

お前に、かつてのエミヤシロウニ……

## 矛盾を抱えて

「 ちよっとー こつまで寝てこらつもつなの? 」

鈴が鳴るよつた響きが耳に響いてくる。

朝の日覚ましのように無機質ではなく、どこか落ち着くよつた温かみのある響き。

「あ……少し

開きかけた瞳を再びぎゅっと瞑り、俺は夢の世界へトロップを試みた。

「ゴツッ！ ！

しかしそれもつかの間、ゴツリといたい衝撃が俺の顔面を強打したのだ。

「 いつてえええ！ 何するんですか！ ？ って、あ……鮮花さん」

目の前の女性は、艶のある黒髪をなびかせ俺に鋭い眼光を向ける。

「確かに貴方が疲れているつていうのは分かるし、橙子さんからの課題を持って来てくれるんだから感謝はしてるわよ。でもね……仮眠を取るつていつも一時間以上も女性のことを待たせるつていうのは、男性としてどうかと思うのだけど? ？」

容赦ない言葉攻めが俺を襲う。

目の前の女性、黒桐鮮花さんはあからさまに不機嫌になってしまっている。

ああ、こつなるとこの人には歯止めが効かないのだから性質が悪いのだ。

「あ、えつと、すいません！」

「まつたく……まあ私の方も少し大人気なかつたわ。ごめんね、士郎くん」

小言を言われるのかと思いきや、あつさりとした鮮花さんの物言いに少しばかり困惑してしまつ。

そう考へながら壁にかかつた時計に目をやると、確かに約束の時間から一時間以上も経つていた。何と言つか……思つた以上に自分自身が疲れているのだと実感してしまつ半面、素直に鮮花さんへの謝罪の気持ちにかられてしまう。

「本当にすいませんでした。なんだか寝入つてしまつて」

「ああ、本当に良いのよ」

鮮花さんは気にしないでねと微笑みながら、俺を紅茶の用意したテーブルへと手招きする。それに誘われるままに俺は席に着くことにした。

「ここには觀布子にある、幹也さんの仕事場である。まあ一人で調べ物をするために用意した部屋ということにつくものは書類であつたり、何かの資料をまとめたファイルであつたりで、橙子さんの仕事場に比べれば幾分かそれに近い感じではあつた。

俺は觀布子に滞在する際は決まってこの仕事場でお世話になつてゐる。正直知り合いがあまりにも少ない土地だけに、幹也さんたちの存在は本当にありがたいものがあつた。

「気が付けば幹也さんたちと出合つて五年の歳月が経とつとしていた。

この五年間、いろんな経験をした。この年齢では使えるはずもなか

つた技術すら今の俺には身に付いている。

ただ、その代償に俺が大事にしていた者たちとは疎遠になつているということは言つまでもない。

そして目線がどんどん高くなるにつれ、それがかつてのオレのモノに近付いていく。それが余計に『もつ時間がない』ということを俺に訴えかけていた。

「……で、これが今回の橙子さんからの課題になります」  
「……はい、確かに受け取りました。本当に、毎回悪いわね」

そして俺は蒼崎橙子さんと関わりを持つ対価として、彼女の……まあ小間使いをさせられていた。こんな風に運び屋だつたり、橙子さんの弟子へのメッセンジャーだつたりと、自分の負担にならない程度であるが仕事をさせられていた。

「何がありましたか？ 前に会つた時も調子悪そうでしたが」「ん~どうだうね」

言葉を濁しながら、鮮花さんは紅茶に口を付けた。  
そう。この鮮花さんも橙子さんの弟子の一人であり、一応の世間の立場上俺も同門になるわけだ。

「……まあ、理由があるとすれば、あの一人の事なんだけどね」「ああ、あの一人ですか」

自嘲気味に呟く鮮花さん。言わばもがな『あの一人』というのは、幹也さんと式さんのことだ。以前鮮花さん本人の口から聞いたことがある。『魔術を習つてるのは、式さんに対抗するため』だと。

「…………あの一人があんな感じだから、私個人としても

魔術を習う理由って無くなつてきていたるのよ。だからなんだか君のこと見ていると、悪いことしてるかなつて気持ちになるの」

あまりに弱気な発言に、何を言つていいのかは分からない。

でも、これだけははつきりと言つことが出来るというモノは一つだけある。手にしていたカップを置き、俺は鮮花さんを見据えて呟く。

「それも良いかもしない、何もなかつたように日常生活を生きていくのも……それで今まで積み上げてきたものが無くなつてしまつわけがない、嘘になるわけがないんです」

俺の言葉に納得したような表情を見せる鮮花さん。少し微笑みながらカップに残っていた紅茶を飲み干すと、一言そつだねと呟いた。

正直、俺がそんな言葉を口にしていいのか……それが正しいのか分からなかつた。

俺は自分の言葉に見合つのような生き方をしているのか。あの時、あの魔術使いが言つてくれた『間違いではない』ということを実践できていたりのか。そして、自分がかつてあの騎士と肩を並べて戦つていた時に言つたはずの『やりなおしなんか、できない』という言葉を、簡単に反故にしているのではないか。

矛盾している、今この時でさえ自分はそれを繰り返している。

そんな人間が、分かつたようなことを言つていいわけがない……そ  
うでなくてはならないはずなのに。

「土郎くん、どうしたの？」

「……あ……すいません。少し疲れているみたいです」

少し考へ込んでいたせいだろうか、鮮花さんは心配そうな顔を俺に向けっていた。

心配をかけまいと誤魔化すように俺は笑みを見せたが、腑に落ちないという表情を彼女は見せるのだった。

「鮮花ー土郎くんー、みんなでお昼でも食べに行こつか?」

不意に聞き慣れた落ち着いた声が階下から響いてくる。

俺にとつてそれは救いの音にも似た響きだつた。正直、これ以上鮮花さんと一人きりで話すのは限界だつた。別に嫌というわけではない……ただそのあまりに真つ直ぐな眼差しもはつきりとした物言いも、かつて主と呼び共に戦つた『あの少女』と重ね合わせてしまつ。

それが堪らなく辛かつたのだ。

「あ、お疲れ様、二人とも」

階下に降りるとそこには、いつもと変わらず俺たちを向かえる幹也さんの優しい笑顔。そんな幹也さんの隣には式さんが早くしろよと言いながら不貞腐れている。

相変わらずの二人に、俺はどこか安心感を覚えた。

結婚して五年目になろうというのに、一人は付き合いだしたばかりの恋人のよういういしい雰囲気である。

俺にとつては一人とも恩人であることに変わりはないのだから、そこのところは嬉しい限りである。

俺がそんな幸せなことを考えて呆けてしまつたのだろうか。三人は既に俺より少し前を歩いていた。少し進んだところから幹也さんが俺に向かつて声をかけてくれる。

「さあ、色々話したいこともあるから早く行こつか?」

俺は言葉に導かれるまま、前を歩き始めていた三人に並ぼうと少し小走り進んでいく。

今はこの時間を楽しもう。焦りを覚えながらも俺はそう思い込むこ



## 越えるべき壁

集中しろ。俺は“それ”を為すための一つの回路。魔力の流れを  
変える変速機。

集中しろ。俺の心に宿す風景を此処に具現化する。果て無きあの  
大地を。

“体は剣で出来ている”

ギシリ、ギシリと俺の身体が悲鳴をあげる。

“血潮は鉄で、心は硝子”

魔力の奔流。うねりを増し、俺の身体を食い破らんと暴走している。  
中止を訴える身体を必死に止めつつ、俺は詞を口にする。

“幾度の戦場を越えて不敗”

そう、これは儀式だ。自身の全てを世界に浸す。犯されていく、手  
の先から足の先まで。

だから、痛いのは当たり前なんだ。

“ただ一度も敗走もなく”

“ただ一度の勝利もない”

世界を開く。これは証明の為の儀式。  
俺が、アソツに迫ったことを証明する儀式。

“扱い手は此処に独り”

未練を残すな

“剣の丘で鉄を鍛つ”

後悔を残すな

“ ならば、我が生涯に意味は要らぬ ”  
そう、何故ならばこの身体は……

“ ここの体は……剣で出来ていた ”

詞を紡ぐ。語りなれた、俺のための詞を。

焼け付くような風に誘われ目を開く。そこには広がったのは、見慣れた……果て無き剣の大地。

吸い上げられていく身に宿した魔力。それをただ強引に、容赦なく、根こそぎ持つていかかる。何度経験してもこの感覚は慣れることが出来るものではない。

「 つっはあ、はあーー！」

掲げた腕がガタガタと震え始める。

しかしそれをそれすら凌駕し、この風景を自由に使えるようになつた時、俺はオレとの戦いのステージによつやく昇ることが出来る。だからこそ俺は止めることは出来ない。この行為を。自らの心象風景を形にし、世界を変容させていく行為を。

しかし既に限界を通り越していた。

自身の思いとは裏腹に徐々に世界は歪みを見せ始め、そして幕を降ろしたように、剣の大地は消え失せ普段から使用している修行部屋へと、その姿を戻していた。

「 確かな幻想、確固たる己を持たない者が、固有結界なんかを使いこなせるわけがないと教えたはずだぞ？ 士郎、つづくお前は進

歩かない奴だよ、本当に

息を切らしへたり込んでいた俺に、冷酷な言葉が投げかけられる。一体いつから見ていたんだろうか、蒼崎橙子は呆れ顔を見せながら部屋の隅に立っていた。

「何が言いたいんですか？」

「まあ今のお前に何を言つても変わらんだろうがね。自分の身体を思つ存分痛め付けて、疲れ果てればいいさ」

これは彼女なりの優しさなのだろう。決して励ますことはせず、自らの足で立つてみると言われているような気がした。しかし俺はそれを素直に受け取ることが出来ず、苦悶の表情を浮かべていると、いつことを自分ででも容易に感じることが出来た。その表情に呆れ顔を見せながら、橙子さんはタバコに火を灯し、足早に部屋から立ち去つていく。

紫煙の香りが残る中、一人部屋に取り残され何も出来ないまま上を見上げた。

何も出来ない、超えることの出来ない自分に苛立ちを覚えながら。

「どうしたら、どうしたらもう……強くなれる？」

ただその言葉だけが虚空に消え去り、俺の不甲斐なさだけが今ここに残つた。

ただ、強くなる術を得たくて橙子さんの下にやつてきた。

確かに体験するはずもなかつた経験のおかげで、この年齢では身につけることの出来なかつた力を宿すことは出来た。それは間違いない、もちろん感謝もしている。

あと一步、何かが足りない。

それが何なのかは既に理解しているはずなのに……それを明確にすることを自分自身が恐れている。いや、むしろ意識しないことが幸せであるとでも思っているのだろうか。

もはや俺は取り返しのつかないほどの大罪を抱えているところだ。

“体は剣で出来ている”

そして俺はもう一度立ち上がり、自らを表す詞をカタチにしていく。

今は闇雲に、橙子さんに言われたように自分自身を痛め付けんがため。

interlude

「あれがここに来て四年……いや五年になるか」

夜も更け月が真頂に昇る頃、一人の魔術師が独り言を呴く。彼女は自らのイスに腰掛け、あるのが当たり前になつたあの不味い煙草を口にくわえていた。

そして思い返すのは、自分を利用してやると大口をたたいた少年のこと。

「確かに、アイツは強くなつた」

そう一言、まるで皮肉のように橙子は語り始める。

最初はただの興味だつた。昔馴染みが連絡を寄越したというのも要因の一つではあるが、しかしあの少年、衛富士郎の事を知れば知るほどその興味はどんどん膨れ上がつていつたのだ。

特筆して言つべきは、その『魔術』の在り方。

どれだけ優秀な魔術師が士郎を見たところで、捺される烙印は『出来そこない』や『半人前』といつところだらう。事実、橙子も彼と最初相対した際にはそう結論付けていた。

「しかしどうだ。確かに私の見る目もまだまだだつたということではないか！」

嬉しそうに笑みをこぼしながら橙子は呴く。

そう。彼の少年はそんなものではない。使うことのできる魔術総てが、大禁忌から零れ落ちたものだとは誰も想像しえまい。彼女

自身もそれに気付いたのは、彼の固有結界を初めて目の当たりにした時だったのだから。

だからこそ彼女は考えていた。

何故年端もいかない少年がそんな大禁忌を身に宿していたのか。何故あれほどの素養を持った魔術の担い手が、わざわざ封印指定を受けた自分のような魔術師の下に来る必要があつたのか。

それら全てを鑑みて、当初彼女は彼の少年を解剖してやろうとした思考をしていた。

しかし橙子は未だにそれを実行に移してはいない。実際彼の成長を目の当たりにして、その気持ちも無くなつてはいないが、それにも増して彼の行く先を見てみたいという気持ちにかられていた。

「強くなることを、まるで義務付けられたように自らの身体を痛め付けて……ただのバカなのか、それとも本当に英雄でもなろうとしているのか」

橙子が口にした一言が、まさか衛富士郎の真実を物語つていようとは、この時の彼女には知る由もないことであつた。そうして彼女は思い出す。数年前に関わっていたあの二人の事を。今は自らの手の届かないところにはいるが、今でも身内であることは変わりないあの二人を。

「最後の仕事、やつてもううことにするかな」

くわえた煙草に火をつけ、橙子が呟く。かつて彼女は一人の少女と取引をした。

それは少女に宿つた力の使い方を自分が教えること。その代価は自分の仕事を手伝わせること。

「まあ嫌がるだらうか。……いや案外喜ぶかもしれないが」

自身でも容易に解答を見付けることの出来ない疑問に、楽しくて仕方がないと言わんばかりの表情を見せる橙子。

これが子どもの喧嘩ならば気にすることでもないが、この件については全く話が違つ。

何故なら一つの家系が作り上げた『根源』に繋がりしモノと、大禁忌を身に宿す少年の戦いなのだから。

「ああ、本当に楽しみで仕方がない」

橙子の頭には確かな確信があった。

そつ。それなくして士郎はこれ以上、これ以上強くはなれないのだと。あれが求める本当の強さを身につけることは出来ないのだと。

「……士郎が、アイツがどこまで行こうのか……それが楽しみでならないよ。全く」

その響きはあまりに冷酷に、しかしどこか優しさを帯びていた。

気が付けばくわえていた煙草はフィルター部分に火が届くかとうところまで達していた。それを田の当たりにし苦笑いを浮かべながら橙子はそつと一本田の煙草に火を灯し、ぐるりと部屋を見渡す。

「確かに、私は少し夢中になりすぎているのかもな」

紫煙を吐き出しながら、橙子はあるソファに田をやる。

それはかつて、士郎が怪我を癒すために眠つていたソファ。

あの時彼に興味を持たなければ、こんなに楽しいことは出合えなかつた。こんなに最高の暇つぶしあきつとこれから先、そう簡単に出会えるものではない。

「まあお節介になつただけかもしれないな」

一言呟き、彼女はまた紫煙を燻らせる。

それは素直ではない、彼女なりのやさしさのカタチだったのだろう。

interlude out

夜も更けた頃、ようやく俺は、自分の街に帰つてきていた。一ヶ月に何回か学校終わりに、橙子さんのところに行き仕事をこなす毎日。これでクタクタにならない訳がない。

「ふう、さすがに堪えるな……もうガタガタだ」

疲労のために重く感じる身体に鞭打ち、どうにか居間まで歩いてくると、テーブルに置かれたメモ書きが目に入つてきた。

「今日は帰っちゃったんだな。そつか……毎日迷惑かけてるんだよな、俺」

綺麗な字・几帳面さのうかがえる文章、俺はそれに軽く目を通しゆつくりとお膳の前に腰を下ろし、ぼおつと何かを考えるように目を閉じた。

俺は問題を抱えていた。実生活にではない。恵まれた環境、最高の魔術師を師事し、様々な経験を俺は積んだ。そのことについては充実していた。

しかし一步、確実に明確な一步が足りない。

あいつに、英靈であつた頃の俺に追いつくための最後の一歩が。

「まあ、大体は分かつてんだけど」

手を天井に掲げ眺める。薄っぺらで弱々しい手だ。

それがあまりに憎くて、俺は畳に拳を打ちつけた。

じわりと感じる鈍い痛み。そう、これだ。俺に足りないもの。俺があいつより劣っているもの。

決定的な違い、それは『覚悟』。

かつて俺は持っていたはずだった。幾多の戦場を戦い抜いてきた、夢を夢で終わらせなかつた強い覚悟。揺らぐことなく、疑うことなく持ち続けた理想を。

しかし今はどうだ。肉体の面では強くなりはした。だが決定的に俺は揺らぎやすくなっている。周りの影響を受けやすくなっている。

こんな俺が、今あいつと相対して勝てるのか？

「こんなこと考へている場合じゃない！ 弱音を吐いてなんになるつてんだよ」

心に過ぎる不安をかき消すよつに俺はブンブンと頭を振り、道場を目指し立ち上がった。

弱いと思うなら、かつての俺がしなかつた下積みをすれば良い。道場でかつての俺と戦うイメージで身体を動かす。

気休めでも良い。気持ちの面で追いつけないならば、戦闘技術でいつとの差を縮めれば良い。同じ知識を持っているならそれは容易なはずだ。

しかしこの後、俺は一番見られたくなかった少女にその現場を叩きされることになる。

### interlude

それは……本当に力強く、纖細で、まるで可憐な舞のようだとわたしには感じられたのです。

流れるような動き、でもしつかりとした剣捌き。まるで一つの完成された絵を見ているような、未完成のものを見ているような感覚。

彼の動き一つ一つを目に見る度、わたしは心を奪われ、彼に対する『好き』の感情を、更に強く確かなものにしていく。

それが堪らなく嬉しくもあり、悲しくもありました。

きつかけはおじい様の一言でした。年上の、ある男の子を監視するように命じられたのです。

『何をするか分からない、危険な男』。おじい様はそう言つていましたが、わたしにはそうは見えませんでした。

どうしようもなく優しくて、どうしようもなくお人よしな人。悲しそうな瞳が映すのはいつもそんな色だった。

だからわたし好きになつた。

ただ真っ直ぐに強くなろうとするその男の子に。

でも彼が魔術師として力を付けていく度、男の人として強くなる度に彼はわたしではなく、もっと遠くの『何か』を見つめているんだつて感じることが出来た。

それ以上無理しないで！　わたしのことだけを見てくださいー！  
そんなこと、言えるわけがありません。

ただ側にいたいんです。それだけで、今のわたしには十分だから。  
この好きを、大事にしていたいから。

ねえ、側にいていいですか？　あなたの近くに、いてもいいですか？

「衛宮……先輩」

不意に、彼の名前を口にする。  
するととても驚いた表情を見せ、彼が振り返り呆然と佇んでしまいました。

こんな表情もするんだ……なんだか可愛い。  
ほら、また見つけられた。わたしの知らない彼の表情。

ひつやつて、わたしはもつと知つていきたい。

彼のことを……もつと、沢山。

interlude out

「えつ……？」

呆然と、声の方に顔を向ける。

向けなくとも分かつっていた。その声の優しい響きに、俺は聞き覚えがあつたのだから。

「さく……ら？」

見られた？俺の姿を。魔術師としての俺の姿を。

この子だけには、この子だけには見られまいと思つていたのに。

否定が頭を過ぎっていく。ダメになつてしまつべりーの、破綻してしまいそなへりいの否定が。

「桜……見ちまつたんだな」

自分でもびつべりするほどに冷ややかに俺はその言葉を口にしていた。

その場を照らすのは月明りだけ。彼女の表情を読み取ることは容易ではない。しかし俺は構わずに言葉を続ける。

「なあ、桜

「　　はい、衛宮先輩」

よつやく彼女の声を聞くことが出来た。その響きは俺の放つ冷ややかさを感じ取ったのか、怯えたものになつていて。

「　　つづつ……！」

手にした夫婦剣を破棄し、俺は一步一步桜に近付く。

自分がどんどん冷酷な考えに染まつていく中、俺はそれでも足を止めない。

分からなかつた。俺はこの数年間、かつてのよつて冬木に住む人

と関わりを持つていいわけではなかつたのだ。だといつこの桜は……間桐の名を持つこの少女は俺の下にやつってきた。“慎一”といつ接点すらも俺たちにはないの。

だからこそ疑わなくてはならない、桜が俺の敵となる可能性を。

あと数歩で触れられる距離。

その数歩が途方もなく遠く感じられる。

「や、へり……」めんな

口から零れたのはその一言。自分で分からぬうちに俺は桜に謝罪の言葉を呴いていた。

その言葉が出た時、俺は理解した。この子を、桜を切り捨ててしまつことを無意識の内に容認しているところを。

そしていつもの言葉を、スイッチ代わりのあの言葉を呴いつとした時、先に響いたのは綺麗な少女の声だった。

「……なんで……なんで……めんなんです？」

それはあまりに寂しい響きで、そして彼女の表情は今にも泣き出しそうなものに変わっていた。

そんな顔を見たくは……させたくはなかつたんだ。俺をずっと支えていてくれたこの子には笑つていてもらいたかったのに。

そう。これが初めて間桐桜がどれだけ自分に大切な人間だつたかとこうことを感じさせられた瞬間だつたんだ。



## 揺れ動く思い

「 なんで……なんで『めんなんです?』

絞り出すかのような弱々しい声で、桜は俺に言葉を投げかける。目が次第に周囲の暗さに慣れていく。俺はようやく田の前の少女、間桐桜の表情を田の当たりにすることが出来た。その瞳はまるで捨てないでくれと懇願する子犬のように、深い悲しみで染め上げられている。

桜のそんな姿を田にして、俺は口を開くことが出来なかつた。いや、今さら彼女の言つたところで、先ほど俺の言葉を撤回できるわけがない。

「先、輩……わたし何か悪いことしちゃいました? 気に障る」と  
しちゃいました?」

「違う! そうじゃないんだ……違うんだよ」

桜の取り乱したような言葉に、俺はこんなことしか言えない。ただ『魔術使い』としての姿を彼女に見られたくなかったのだと、出来れば桜とは魔術を介して関わりにはなりたくないのだとこうことは、はっきりとしていた。

それだけに自分がどれだけ無責任に言葉を投げたかということを俺は身にしみて理解したのだ。

沈黙が流れる。夜の穏やかな静けさではなく、重苦しい沈黙が。全く望みもしなかったそれを、どうにかすることが出来ずにただ茫

然と立ちぬく。

それがどうしようもなく自分をイラつかせ、そして自分の弱い部分を露呈させる。

少女一人の言葉に、態度にこんなにも気持ちをうつさわせて……ただ拳を強く握つて、不甲斐なさに耐えるしかなかつた。

しかしその沈黙を破つたのも、俺の気持ちをグラつかせた桜だった。

「わたし、先輩の傍に居たいだけなんです……」

その言葉はきっと、この子にとっての眞実なんだろう。その彼女の表情以前怯えたままだが、瞳は真摯にそれを訴えていた。知らなかつた、桜がこんな瞳も出来ただなんて。

おそらく以前の俺ならばこれに気付けなかつた。それだけ俺は桜の外見しか見ていなかつた。

だが……そつだからこそ、彼女を近くに置いていいのだろうか。彼女が享受するべき幸せを奪うことになるのではないか?

そう考えただけで、このままでいいとは俺には思えなかつた。

「分かつてるだろ? 俺が何をしようとしてたか」

もう一度、突き放すように俺は桜にそう告げる。

「 それでも! 」

「 それでもじゃない! 俺は……俺には」

その後の言葉が続かなかつた。つい先ほどまで抱いていた感情を、口にすることが出来ない。

“‘守る’こととは、出来ない”

その一言が恐ろしく重い。簡単に言えるはずなのに、それを言葉には出来ない。きっとそれは俺がまだ決意を固め切れていない証拠なのだろう。

何故なら、目の前にいる今にも泣き出しそうな女の子はかつて俺が救おうと、守ろうとしていた『多くの人』中の一人だったから。そう。俺は未だにかつてのオレの夢の残滓に囚われ続けている。いや、それを言い訳にしようと結論を先延ばしにしていに過ぎない。

「わたしを迷惑だと言わない限り、先輩の傍に居続けたいんです」  
桜はそう言葉にしてから、俯いたまま顔を上げようとはしなかった。

それはおそらく俺のためだ。泣き顔を見せまといと氣丈にふるまおつとしているだけなのだ。

俺は再び桜に歩み寄り、その肩にそっと触れる。ビクッと身体を震わせるが彼女は顔を伏せたまま、俺の方を見ることはない。しかし俺は構わずに言葉を紡ぐ。

「桜……俺、きつとお前のこと  
分かつてます。だから……」

桜は俺の言葉を最後まで聞くことなく、肩に置かれていた俺の手をその掌で優しく包み込み、笑顔を見せた。でもその笑顔は今にも崩れ落ちそうで、今にも泣き顔に変わってしまうかのように儚いものであった。

「今は、このままにさせてくだけ」

俺はそのまま桜の言葉に従うことになった。

この時はそれでいいと思った。桜が敵になつたとしても、それを脅威と感じないほどに力を付ければいい。そんなことを思つていた。

しかしこの時桜を突き放していれば……いや、突き放さなかつたとしても結果は変わらなかつただろう。

俺はこの時の選択を後悔することになる。それはきっと、俺が何をしようとも回避することの出来なかつたモノだつたのだ。

### interlude

わたしは怖い。この世のすべてはきっと、わたしの事を嫌いなのだと思つていたから。

だから人の顔色を窺つて、問題など起らさないようにしていた。

ただ人に何かを言われれば、素直に従えればいい。

どんなに嫌なことだつて、我慢していればいつか終わつてくれるもの。

でも何故なんだろう。今回は違つた。

先輩が、彼が言おうとしている一言が何か分かつてしまつたから……いつも通り自分が我慢すればという感情よりも、全く違う考えが

わたしの頭をグルグルと駆け巡っていた。

“わたしは、彼の一番ではない。でもきっと、彼はわたしを見捨てるなんて出来ない”

それが分かつていてるから、だからわたしは傍に居続ける。一番じやなくともいい。少しでもわたしの事を考えてくれるなら、きっと今はそれで満足だから。

一人帰りたくない家への道を歩きながら、自然と口元がつり上がりつているのに気が付く。普段よりも帰りを急ぐ足が軽く思えた。

いつものわたしはこんな風ではないのに……。  
何か心の奥に押し込めていたはずの、仄暗い何かがわたしを覆わんとしている。

そんな感覚が、わたしを支配しようとしていたのです。

interlude out

## 最後の要因

“ああ、なんでこんなにも頭だけは冷静でいられるのか?”

田の前の敵と対峙しながら、俺はそんなことを考えていた。

その人間離れした動きも、非情なまでの攻撃も、それら全てを俺を倒すために駆使しながら、その死に神は俺の田の前で酷く嬉しそうに笑っていた。

「おい、そんなもんじゃないだろ？ 少しは本気を出せよ、衛宮？」

死に神は告げる。それは最初の出会いの時に聽かされたあの冷ややかな響き。

死に神は見据える。それはずっと感じていた、あまりに大きな殺気を孕んだ視線。

奴の総てが語りかけてくる。それは明らかな俺への嫌悪だ。そう。初めて出会った時、こうなることは予想していた。それが時間経て、今ここに再現されている。ただそれだけのことなのだ。

「ああ、殺し合おうぜ」「やられればつかりではいない！…」

言葉を交わした刹那、甲高い音をたて互いの得物がぶつかり合つ。互いに容赦なく、己の力を籠めて結び交わされる。それはさながら

ただの殺し合いでなく、卓越した舞のようだ。

俺は自分自身が命の危険にさらわれてこるはずなのに、あまりの楽しさに身がふるこすらしていたのだ。

さつかけは些細なことだつた。

橙子さんからの依頼で觀布子の鮮花さんのところを訪れた時、不思議な違和感があつたのだ。

鮮花さん自身はその違和感には気付いていなかつたようであつたが、確かに何かに『視られている』感覚が俺を支配していた。

「あ、そう言えば式が久しぶりに会いたいって言つていたわよ」

報告が終わつた後、世間話ついでに鮮花さんがそんなことを話してくれた。珍しいこともあるんだねと彼女は笑いながら話していたが、それを聞いたときに俺は違和感の正体に気が付いた。

「そうですか……式さんが

それ以上は言葉にせず、俺は鮮花さんに別れを告げてその場を離れ、違和感の正体に確証を持つため俺は足早に式さんのところへ急いだ。

“式さん、俺に会いたがつている”

わざわざと確信を持つて言える。そんなことは絶対にあるわけがない。

例外があるとすれば、俺にとつては良くない意図を持つているということに他ならないはず。だからこんな場合は色々考えてしまうよりも、シンプルに式さんと幹也さんとのじりに赴くのが一番なのだ。しかし俺にはその『自分にとって良くない意図』というものが推理出来なかつた。それだけがどうしても気がかりで、自然と歩を進める足もその速度を上げていつたのだった。

少し街はずれにある竹林を抜けていった先に両儀の屋敷はある。数回しか来たことはなかつたが、どうにかここまで迷わずにくることが出来て少しホッとする。

おそらくホッとしたそれだけではなく、両儀の屋敷の門前で見覚えのある顔を見付けたからだ。

「やあ士郎くん、久しぶりだね」

「お元気そうでなによりです、幹也さん」

幹也さんは相変わらずの笑顔で俺を迎えてくれた。俺は軽く会釈しながら彼と合流し、式さんの待つ道場へと歩を進めた。その間、俺は鮮花さんから聞いたことが本当なのかを尋ねることにした。

「幹也さん、式さんが俺を呼んでいるって本当ですか？」

それは少し怯えを孕んだ響きだつた。しかしそれに笑顔で幹也さ

んはその言葉に返してくれる。

「そりなんだよ。久しぶりに橙子さんから連絡が来たんだけどね……」

「それからなんだよ」

不思議そうに小首を傾げる幹也さん。俺は彼のその後この言葉が  
ビリしても氣になつてしかたがなかつた。

「それからってどうしたんです?」

「ソワソワしながらよく言つてたんだよ。早く士郎くんに会いたい  
つてね」

自分の中でもそんなことがあり得るわけがないと思っていた答えを  
あつさりと口にする幹也さん。それは道場まであと僅かという距離  
まで来た時のことだつた。

もうここからは引き返すことは出来ない。大変なことが起らな  
ことを祈りながら佇まいを正し、ゆっくりと道場の中へと足を踏み  
入れた。

「 よお、来たか。衛宮」

響く。それはいつか聽かされたあまりに美しい響き。冷ややかで、  
俺の存在を否定していることをハッキリと分からせているようだ。  
一步、そしてまた一步と近づく彼女に少なからず恐怖を感じていた。  
いや、そんなことはどうでもいい。俺は確かめるためだけにここに  
居る。橙子さんから連絡を受けてからの式さんの変わつよう……俺  
にとつての最悪の状況が本当に起つてているのか。

「式さん、一体どんな要件で……」

「そんなことはどうでもいい」

彼女の言葉が届いた刹那であった。視界の隅の方から自身に迫る  
鋭い光。

式さんは俺に肉薄し、隠していたナイフを振り下ろさんとしていた。

「 つづー！」

その動きがあまりに自然で、俺は身を翻しながらも彼女から田を離すことが出来なかつた。故に何が起こつたか、田の前の死に神：両儀式という女性が何をせんがために俺に刃を振るつたかは容易に理解出来た。

しかし、その動機は一体何だ。互いに害を及ぼさなければぶつかり合つはずもないのに。

「ふうん、やつぱり…… アイツの言つた通りだ。楽しくなりそうじやないか」

姿勢を正しながら、死に神は呟く。その言葉には嘘偽りは感じられず、その瞳から感じる剥き出しの感情は恐ろしいものだった。だが、それも以前までの話。俺はこの死に神と出会つた時のような臆病さを今も持ち合わせているわけではない。たとえ式さんの行動が理解しがたいものであつたとしても、俺は田の前の障害を排除する。ただそれだけなのだ。

「 こんなところで、躓いていられない

ガチリと頭の中の撃鉄を落とす。自分の中の機能を変質させていく。

次の瞬間、衛富士郎の……俺の身体は田の前の死に神に向けて疾走を始めていた。

## 最後の要因、覚悟の差

気が付けば窓からは赤々とした陽の光が差し込み、闇が近付いていることを告げている。

しかし俺の頭を占めていたのは鳴りやむことのない、甲高い鉄の衝突音。

自分自身が直面している状況であるはずなのに、どこか画面の向こう側から観ているような錯覚に襲われる。そして徐々に思考がおぼつかなくなる。

一体どれくらいの間、俺は目の前の殺意と相対していだらう？ 一体どれだけ、この美しい姿をした死に神に命を奪われかけただろう？

そして、一体この戦いの意味はどうあるんだろ？

「 ッー！ ハア、ハア」

胸が大きく上下する。それほどまでに緊迫した、油断の出来ない戦いに俺は身を投じている。相対した敵、両儀式さんの前で一瞬でも油断を見せてしまえば、その時点で勝敗は決ってしまう。

対照的に式さんは、余裕すら感じられる表情で冷やかに俺に言い放つ。

「 なんだよ、もつお終いなのか。そんなもんじゃないだろ！」

手にしたナイフの切つ先を今一度俺に向けながら、流れるような動きで再び俺の懷に飛び込む。

その切つ先の進撃を防ぐよつて、手にしていた馴染みの夫婦剣を構え迎え撃つ。

再び甲高い音と共に打ち付け合われる互いの得物。

しかしその次の光景を誰が予想できるだらう。

俺が手にしていた一対の剣は、重低音をたててその場に砕け散った。あまりに作りの違う刃物ごとに、自身が投影した剣が破れてしまうなど……。唖然として声も出ない。

「こんなもんじゃないだろ?！」

式さんは再びナイフの切つ先を向ける。直線だけでなく、式さんの軽やかなフェイントから繰り出される幾多の攻撃。

俺たちを取り囲む重々しい空気を引き裂きながらナイフを振る続ける。

しかしその度、彼女がナイフを振るう度に俺が創り上げた幻想は簡単に壊される。寸でのところで彼女の繰り出す凶器を避け探し続けた。

“何故こんなにも簡単に、俺の幻想が……俺の總てが壊されるのか？”

いや、もう分かつているはずだ。

俺は知つてゐる……以前、俺は『ソレ』を目にしたことがあるから。その『禍々しく光るその眼』と同質のモノを。

「……つてんだよ……」

不用意に近付き過ぎてしまえば、完全に式さんの間合いで踏み込む。それではこの状況は打開出来ない。

彼女の攻撃の手が休まつた瞬間手に再び干将・莫耶を投影し、彼女の間合いから後退する。

「 何でモノと戦つてたんだよ。俺は「  
距離をとつてようやく理解した。俺が戦つているモノの正体……。  
あながち俺が式さんに感じていた『死に神』というイメージは全く  
間違いではなかつたのだ。

「ああ、気が付いたか？ オレのは特別みたいでね」

さらりと揺れる髪をかき上げながら呟く。  
激しい動きによつて肌蹴た着物を直しながら、決して瞳だけは俺から逸らさない。

「IJの眼のおかげで、色々なモノを失くしてきたんだ」  
言葉以上にその瞳の輝きが訴えていた。

式さんがこれまで生きてきた人生の痛切さ、厳しさを。

「 オレは、自分のモノは絶対に手放さない。お前はどうだ、  
衛宮？」

「お、俺は……」

何も答えなかつた。いや、答えることが出来なかつたんだ。

俺は、この人のように自分の気持ちに真っ直ぐにはいられない。覚悟が揺らぎ、まだフラフラと考えている。結局タイムオーバーになるまで答えを先送りにしているのも、桜のことも……俺は覚悟を固められていない。

気が付くと日の光はなく、幕を下ろしたような真っ黒な闇が辺りを染めていた。

そして再び死に神が、両儀式が呟く。

「 ああ、じゃあもういいよ」

それはこれまでにないほど冷ややかな響きで。

「 今のお前は、オレの敵にはなれない」

その言葉が耳に届いた瞬間俺の、Hミヤシロウの身体は宙に浮いていた。

「 あぐ……」

声にならない呻き声が、静かだつた道場に響く。

間合いを一気に詰められたところからの鳩尾への前蹴り。俺の身体は問答無用に後方へと押し流され、狙いすましたように一撃目の回し蹴りが頭部へと見舞われた。

ここまでハツキリと式さんの動きを見れていたはずなのに、この戦いの中で疲弊しきつた俺の身体は動こうとはしなかった。

「 そんなんじゃダメだ。お前はそんなんじゃなかつたはずだ  
る。」

薄れゆく意識の中、再び言葉を投げかけられる。今度は本当に答  
えられない、頭が働かない。

「 最初に会つた時のお前はもつと鋭利な刃物、刀みたいだつた……  
そんなんじゃただのガキだぞ、衛宮？」

そして、俺の意識は途絶えた。

最後の言葉の意味するところも聞けず、ただ俺に残つたのは悔しさ  
だけだった。

## interlude

少し昔の話をしよう。

これはそうだな……オレがアイツに会つた時の話だ。

ハツキリ言おひ。初めて、初めてアイツを見た時“化け物”だと  
思った。

これまで沢山のおかしな奴らを見てきた。  
それにおれだつて……おおよそ『普通』とは程遠い人種なのかもし  
れない。

でも、それ以上だつた。アイツから感じたモノ總てが、オレに見せつけていたみたいだつた。

『自分はこれまでお前が相対してきた者たちとは比べ物にならない、どひじょひもない化け物』だつて。

眼は口ほどにモノを語るなんていうが、まさにその通りなんだろうな。

アイツの眼は、どんな修羅場を乗り越えてきた人間でも簡単には真似できない。そんな眼をしていたんだ。

だから期待してたんだけどな……日を経るごとにアイツの眼はある時持っていた鋭さを失つていった。いや、何かに迷つてるって言う方が正しいのかもな。

「 本当お前は、一体何がしたいんだよ?」

「 オレの田の前に横たわる男、衛富士郎を見ながら思つ。

氣にくわないのに。」

幹也の近くに来てほしくはないのに。

オレの日常を壊すかもしれない男なのに。

一体何を選ぶのか、そしてそれを決めるための踏ん切りを付ける手伝いくらいならしてやってもいい。

何故だらう、オレはそう思つてしまつたんだ。

「派手にやつたね」

「……まあすぐ田も覚めるだろ」

声をかけてくれたのは幹也だった。

黙つてオレと衛宮の戦いをずっと見ててくれた。それがあつたからこそ、オレは気兼ねせずに戦えたんだろ?と思つ。

「でも……」

「なんだよ?」

幹也らしくない不安そうな声、オレは思わず聞き返してしまつ。

返ってきたのはもちろん、幹也らしい言葉だったが。

「式、君は大丈夫なのかい?」

「ああ、オレは問題ないよ」

嬉しかつた、彼の言葉が。

思えばこの言葉が聞きたくて、この優しい笑顔が見たくて、オレは幹也の傍に居る。

だからせ、オレはオレでいられるんだ。幹也がずっと、幹也らしくしてくれるから。

なあ、衛宮。お前はどうなんだ……一体、何を迷つてんだよ?

interlude out

吹き抜けていったのは風。

あまりに重々しく、焼けつくように熱いそれを田で追いながら、ただ茫然と立ち尽くす影が一つ。

“ああ、一体こんなところで何をしているのか”

彼はそう考へながら、砂埃の舞う何もないこの場所でただ佇むだけ。

これが、この人物の生きてきた総てを象徴する風景なのだとしたら、こんなにも悲しいことはないだろう。なんてどうしようもなく、報われない人生だったのだろう。

しかし、彼はまたゆっくりと歩き始めていた。

一歩ずつだが確実に、その足はシックカリとした歩みを見せていたのだ。

それは間違いでないと教えてくれた人たちがいたから。

それまでの生き方に、何も間違いはないと教えてくれた人たちがいたから、また進み始めることが出来たのだ。

ただ、正義の味方でありたかった。

ただ、歩いてきた道に間違いでないと思いたかった。

その思いを胸に歩み続ければよかつたのに……。

しかし、望んでしまったのだ。

あの少女と、自身が愛してやまないあの少女を自分の手で守りたいと。

もう一度、彼女と……彼女と共に戦いたいと。

だがこの望みはおかしなものだと、矛盾しているものだと、とつぐの昔に気が付いていた。

“やりなおしなんか、できない。死者は蘇らない。起きた事は戻せない。そんなおかしな望みなんて、持てない”

かつて、自分で口にした言葉。

おそらくここに居る彼よりも、強い信念を持って口にされたモノ。それが分かっているのに、それを見て見ぬ振りをしてただ歩いている。

最早それは理想への歩みではなく、『逃げ』に他ならないのかもしれない。

“きつとみんなを救うより、大事な人をずっと守り続けていくことの方が辛いかもしれない”

かつて彼に理想を与えた人が、そして今ここに居る彼の願いを肯定してくれた人が言つてくれた言葉。

それは重圧となつて心を大きく揺さぶる。

“確かに幻想を持たないものが、自身の力を使いこなすことなど…  
出來るはずがないだろう?”

彼が、かつてよりも力を付けるきっかけをくれた人物の言葉。  
それは的確に彼の矛盾を指摘する。

“オレは、自分のモノは絶対に手放さない。お前はどうだ?”  
彼の前に現れた、今の彼に最も影響を及ぼしたであろう死に神の  
言葉。

それは彼の決心が鈍っていることを露呈させ、弱さを見透かす。

これまで彼をこんなにも苦悩させたものがあつただろうか。  
これまで盲目的に、一つの目的のために様々なものを犠牲にしてきた。

そして今、心にあるのは、無謀なまでの一つの理想と誰もが思い描く一つの願い。

大衆の正義の味方であろうとする理想。

大事な一人を守つていきたいという願い。

そう、彼の影響を与えた者たちは理解していたのだ。

この一つの想いの狭間で迷い戸惑うことを。

その迷いが徐々にそれまでの彼を、少しづつではあるが変質させていく要因になつた。

それが正解なのか、間違っているのか、決めることが出来るのは彼のみ。

この地平を歩いている彼にしか出来ないこと。

彼は歩き続ける。  
終わりも見えないであろうこの地平を。  
剣戟の音が木霊するその先へと向かって。  
せめて、動き始めたこの足だけは力強くあるつ。  
そう胸に決意しながら。

## 強烈の意味

腹部に感じる鈍痛で俺は目を覚ました。

どうにも今日は痛みのせいで深く眠りにつけなかつたようだつた。寝かされていた部屋の障子を開け、縁側に出て空を眺めてみる。そこにはまだ月があり、今晚もその光を惜しげもなく夜の世界に降り注いでいた。

「 そつか俺は……」

それ以上に言葉は出なかつた。  
いや。それ以上に言葉にしてしまえば、あまりの悔しさばかりが後を絶たないと理解していたから。

あの式さんとの戦い……正直に言つならば、俺は楽しんでいたのかもしれない。自分がこれだけ戦えるようになつたといつことに酔つていたのかもしれない。

しかしそんな考えを文字通り一蹴されてしまい、俺は改めて自分自身の甘さに打ちひしがれていた。

縁側に出てゆっくりと腰を下ろす。

もう一度あの戦いを、そして『ヒミツヤシロウ』を繰り返すことになつてからの今までを思い出すと、何故か笑みがこぼれた。

手元を見る。昔の自分にはなかつた傷が多くあることに気付いた。

ああ、思えばなんて贅沢な男なんだろう。

多くの人に関わつてもらつて、沢山の経験をさせてもらつた。今の

『HIIヤシロウ』があるのはそれのおかげだ。

「やあ、大丈夫だった？」

「すいません、今日は迷惑をかけてしまって」

自分の背後からかけられた声に俺は会釈しながら振り返った。そこに居たのは左耳を前髪で隠した青年、幹也さんだった。彼は“よかつた”と微笑みながら、俺のすぐ左隣に腰かける。

それから少しの間、どちらも口を開けようとはしなかった。ただ星を見つめ月を見つめ、少しずつではあるが景色をえていく空の変化を眺め続ける。特に何かをするわけでもなく、ゆっくりと時間が流れれるのを楽しんでいるかのようだ。

「　士郎くんは？」

先に沈黙を破ったのは幹也さんだった。

「『『強さ』』って、どういふことだと想ひ？』」

ゆっくりと語りかけるように言葉が響く。

俺は幹也さんに視線を向け一度瞳を閉じた後、思いを吐き出すように言葉にした。

「譲らないこと……ですか？」

それは全く嘘のない、心からの本音だった。

今までも俺はそうして“強さ”を手に入れてきたように思つ。

“親父のようなヒーローになる”

“みんなを守ることのできる人になりたい”

かつての俺が目指した搖るぎない決意。

この願いがあつたから俺は走り続けてこられた。

守れるならば總てを守りたい。親父が為し得なかつたことをやり遂げたい。

どれだけ傷付こうが裏切られよつが、その思いだけは失くさずにきた。

その結果俺は……オレは英靈となり、ある意味その信念に報いることが出来たのだ。

だから俺の中でそれは自信をもつていうことが出来る。

「そうだね。うん、それも正解だね」

幹也さんは変わらない笑顔で俺に答えてくれた。スッと立ち上がり伸びをしながら彼は空を見上げながらもう一言呟く。

「強さつてさ、『自分らしくあること』だと思つんだよ」

彼は俺だけにではなく、自分にも語りかけるよつに大事に言葉を紡いだ。その言葉にはなぜかすごく説得力がある。

それは最初の出会いからずっと、幹也さんがずっと俺と本音で付き合つてくれていたからだろう。だからこそ幹也さんの言葉は信じるに値する、俺には素直にそう思えた。

「幸いなことにさ、僕の傍にはそういう人が沢山いたんだ。そういう意味での『強い』人たちがさ」

幹也さんは嘆へ、自分自身がした選択を大事にしたほうが良いと。そつでないと後悔ばかりしか残らないからと。

「わっくり落ち着いて、焦つてばかりじゃ何も見えてこないからさ」  
そつ一言呟き、幹也さんはまた笑つて見せた。その言葉がそれだけ重い言葉だつたかといつことを俺はこれからこやとこつほじ思い知ることとなる。

ただこの時の俺には、その言葉はただの励ましの一言にしか思えなかつた。

「 まつたく……何 つてゐるんだよ」

廊下の暗がりの方から声が聞こえてくる。

その声は聞き取りづらかったが一定のリズムで近づいてくる足音を聞けば、それが誰かは容易に分かることが出来た。

「 やあ、式。起しちやつたかな?」

「起きたら幹也がいなかつたからな。多分衛宮のところに倒れるんだどうと思つて来ただけだ」

式さんは幹也さんのすぐ隣に立ちながら俺を見下ろしていた。  
その瞳は先刻戦つていた時のよつな冷えたものではなく、どこか温かみのある様な色をしていた。

そして幹也さんの方を窺つてから一言、俺に呟いた。

「衛宮、オレは幹也みたいに回つてどことせ言えない。だからハ

ツ キリ聞くぞ？」

式さんの真剣な声に、俺は一言“はい”と答えた。ただ言葉が浮かばなかつたからではなく、素直にこの人の言葉に耳を傾けようと思つたからだ。

「お前、あるだろ？」「何をですか？」

「お前、人を殺したこと……あるだろ？」

それはあまりに予想もしない問いかけだつた。言わずもがな、隣に立つっていた幹也さんも驚いた表情で式さんを見つめている。

彼女の問いかけに、本当になんと返せば良いかも分からないまに、ただ首を縦に振るしか出来なかつた。

ただ月の明かりだけが冴えわたり、地を照らしている。

そして俺の目の前に居る死に神の瞳がその色を変えていく。それは戦いのときにも見せたことのない、形容しがたい色をしていた。

「」の眼は一体何を俺に語りかけようとしているのだらうか。

先の言葉に素直に答えることが正解ならば、これからどんな展開が訪れるのか……予想することさえ出来ない。

ただ一つ分かること、それは『人を殺す』というキーワードが、それが両儀式という人物にとつては何よりも大事なことだということだつた。

だからきっと、その回答にそれは慎重にならざるを得なかつたのだ。

しかし俺が考えを巡らしていた最中、式さんはため息を吐きながら咳く。

「……まあいいや。とりあえず、オレが勝手に話したいことから話すか」

式さんの言葉に、俺は何が起こっているのか全く理解できなかつた。ただ彼女は総てを確信したような表情を見せながら、言葉を続けた。

「…………さつとお前は、シンプルに考えた方が良いんだよ」

「な、何のことですか？」

さつと俺は呆気にとられた顔をしている。しかし彼女は話すのをやめようとはしない。それは最初に言つた通り、ただ『勝手に』話しているからだらう。

「何がしたいのか、そのためにどうするのか、それだけを考えろつてことだ」

それは俺自身に気付かせようとしていたのだろうか。式さんは具体的なことを語つことは避けながらも、俺の弱い部分を的確に指摘していた。

そう、今の俺は目的の実行するための行為がチグハグになっている。自分でも分かっているはずなのに軸がぶれている……今までほんなことはなかつたはずなのに。

「いいか？二ングンなんてモノは器用じゃない。自分の領分でしか生きていけないんだよ」

そう咳きながら、月の光の降り注ぐ庭に足を踏み出す。

俺はそれを目で追いながら、式さんの言葉の意味を考えていた。むしろ彼女がわざわざ俺にこんな風に話してくれている意味を見出さなければならぬ」と思つたのだ。

「……オレはね衛宮」

これまでにない重たい響き。

きっとここからが核心部分なのだろう。それを示すよつこ式さんの表情は普段の気だるそうなモノから、真剣なモノに変わつていた。チラリと横目で幹也さんを見る。彼の表情は言わずもがな、少し緊張したモノになつてゐる。

俺も幹也さんと違わず、そこついた表情になつてゐるのだろう。掌にジワリと汗の感触が広がつていくを感じた。

「自分のこの日常が大事なんだよ。それこそ壊れるのを見たくないから、自分で壊してしまおうと思つたくない」

それはどこか、必死に訴えかける少女の叫びのようで。きつとこれは俺だけに言い聞かせているモノではない。……もしかすると式さん自身の『大切なモノ』に対する贖罪だったのかもしれない。

「 失くしそうになつて、失くしちまつて初めてそれが大事だつて思えるんだ。お前はどうだ?」

「俺、には……」

そう。それはきつと誰もが持つてゐるモノだ。かつての俺にとつて、それは『正義の味方になる』といつ思ひだつた。

そして今は……。

「オレはこの日常を守りたいんだ。お前にだつてあるんだろ? どうしても守りたいモノがさ」

ああ、あるや。俺がどうしても守りたいモノ、どうしても手に入れたいモノ。

でも恐れもある、迷いもある。それを成し遂げるといつことは、これまでの総てを裏切るといつことだから。選ぶはずだつた総てのモノを切り捨てることだから。

「何を迷つてんだ?」

一步近付きながら、式さんは真つ直ぐに俺を見据えて呟く。きつと俺の態度に嫌気がさしたのだろう。その表情にははつきりとした苛立ちがにじみ出て、ハッキリと答えることを強要されているようだつた。

「どうしたいかは……分かつてゐるんです」

でもその返答はやはり煮え切らないもので、俺は式さんの視線に耐えきれずに顔を背けてしまった。ただ拳に力を強く握りこんで自身の不甲斐なさに耐えるだけ。こんな態度が、こんな行動が一番嫌いだったのは、俺自身だったはずなのに。

しかし俺のそんな態度に耐えきれなかつたのは、式さんも同じだつた。

「 甘えるなよ」

静かな、しかし大きな怒りを孕んだ声。間違いなくその矛先は俺に向いている。

「お前はさ、ただ傷付きたくないだけだ」

最早その言葉は先程までの遠回しな言い方などではなく、俺の恐れていたモノの確信を突いてくる。

これ以上は、もう言つてほしくはなかつた。自分でも手を背けてしまつている『甘え』を露見されてしまつ。そつ思えたから。

「お前の選択のために苦しむ人たちを、その光景を見たくないだけだ！」

「 そんなことは…」

ないとは、そろは言えなかつた。

桜の事がそつではないか。彼女を遠ざけてしまえば、悲しむことが分かつてゐるから…。それを出来ない時点で俺は、式さんの言葉に何かを言つ資格はない。

思わず立ち上がり反論しようとした自分があまりに情けない。ただ立ち尽くすしか出来ないと、そう決めつけてしまつて、自分のあまりに情けなかつた。

「 ……そんなんじや何も出来ない。守れないぞ？ それこそ、お前が大事に思つモノすらな」

追い打ちをかけるよつて、再び言葉をかけられる。それに思わず子どものように躍起になつて顔を上げる。

しかしそこにあつたのは嘲りでもなく悔穢でもなく、優しさをにじませた色。式さんの瞳はそんな色を湛えながら、俺を見つめていた。

「俺、は…出来るなら全部守りたい」

先程まで弱音しか出なかつた口から出たのはその言葉。

何を犠牲にしてでも守るべきと思ったモノのために、俺は今まで鍛え上げてきた。

一体どうしていたんだろつ。なまじ力を付け過ぎたからこそ、色んな事を決めかねて、後回しにしてしまつて。

「こんなことでは、本当に式さんの言葉通りになってしまつ。だが  
ら……」

「ケジメをつけなくちゃ……」

握つた拳をほどきながら、俺は努めて冷静に式さんに向き直る。  
この機会を作つてくれたこの人に報いなければ、俺は前には進めな  
い。それにまだこの人には聞いていないことが沢山ある。

イメージする。

それは俺が、エミヤシロウたる由縁を示すモノ。俺と共にずっと戦  
つてくれた得物をこの手に現す。  
そう、昔から分かっていたではないか。  
俺に出来ること、それは考えること。そしてそれをカタチにすること  
だと。

思考をシンプルに。

どれだけ色々考えようとも、その瞬間は一度きりしか訪れない。な  
らば出来る限り自分が最大限の力を奮えるようにするまで。

両の手に感じる、馴染みの感触。

そしてその切つ先を俺は自身の恩師に向ける。そこに以前戦つた時  
のような感情はない。

そう。今から起るこの戦いにおいて、迷いなどありはしない。

俺はこの人に、両儀式という人物に自分の在り方を認めてもらいた  
い。

ただ、  
それだけなのだ。

## 貫き通す思い、犠牲になるモノ

「 よつやくマシな田に戻つたな。…… それだよ、オレがお前に求めていたモノはや」

その表情は語る。『 』の時を待つていた』と。

言つまでもなく、式さんの瞳は俺の得物の『 死』を既に捉えている。『 の人の中では戦いはもう始まつてているのだ。

「 じゃあ、式さんも本気を見せてくれださこ」

「 生意氣なこと言つてるんじやなこよ、やつぱりお前はまだまだ子

どもだ」

皮肉を口にしながらも、式さんのその表情は変わらない。

『 』の身に彼女の刃が訪れようとも、不思議ではないのだ。

「 ああ、オレの得物がないや…… すまない幹也、アレを取つてきてくれ」

不意に式さんはとぼけたような一言を幹也さんに投げかけた。そう。幹也さんは俺と式さんが話している間、言葉を口にはせず、ただずっと俺たちの傍に居てくれたのだ。

おやじやこには式さんに対する憂慮の念があつたのだろう。

「 うん、でもぜ……僕は、許してないんだぞ？」

「 ああ、分かってるよ。オレはお前がいるから大丈夫だ」

きっと戦わせたくないはずだ。これ以上式さんを非日常には置いては置きたくないんだろう。

だが次の瞬間、幹也さんの見せたは変わらずの笑顔だった。一言“うん”と口にして自身の部屋に引き返していく。それは幹也さんが式さんを心の底から信用している証明なのだろう。

「……衛宮、最初に聞いたよな？」

“幹也が得物を取つてくる暇つぶしだ”と言いながら式さんは話し始める。

「ハツキリとは言えません。ただ……それに似た経験をした記憶はあります」

この身でなくとも覚えているあの感覚を、好きになれないあの感覚を忘れることは出来ない。自らの手で、人の命を刈り取つていく。犯していく。生き者にしていく。

より大勢を救うためという理由があろうとも、それが『人を殺す』という行為を俺は行つてきた。それは何が変わつても搖るがないだらう。

だからこそ、俺はこの人の問いに素直に答えよう。この人の想いを、しっかりと受け止めるために。

「でも俺は自分を全うするために、もつ決して自分の大事なもののは落とさない」

「ああ、本当にお前らしく」

式さんは笑う。

俺という人間を本当に理解する」ことが出来たと。その上で、やはり自分たちは相容れない者同士なのだと。

「昔教えてもらつたんだよ。『人は、一生のうちに一度しか人を殺せない』ってわ」

そう、きつとこれが式さんの語りたかつた一番の言葉。スラスラと淀みなく話す姿から、いつもそのことを心に留めているんだろうということは、想像に容易い。

しかし、正直彼女からこんな言葉が出るとせ、俺は考えもしていかつたということも事実だ。

「笑つちやうだろ？ オレがこんなこと言つなんてさ。でもね、それって本当に事なんだよ」

「 ホントの、こと？」

「オレは自分が不確かでしうがなかつたんだよ。だから生きている確証が欲しかつた……」

だから大事なモノを殺そうとした。

大事なモノを奪つたモノを殺すしかなかつた。

でもそれはあまりに悲しすぎる決意と諦め。

しかし、それを言葉にしながらもその表情に後悔は見えない。どこか健やかで、大きな支えを持っているようだった。

彼女は身を翻し、庭の中心に歩き始る。

流れるよつた歩みはどこか虚ろで、しかし彼女の纏つた空気はそこそこ確かに在ることを印象付ける。

「オレはまきつともつ、誰も殺せない……」

言葉から感じる強い意志。最早それ以上何を言わなくとも分かる。もうすぐこの時間が終わってしまうのだと。

それを指示するように、彼女が一番大事にしている人物が朱塗りの鞘に収められた刀を

手に再び俺たちの前に姿を現す。

それを笑顔で受け取りながら、何度も言葉を交わすと幹也さんが式さんから離れていった。それと同時に式さんは次第に纏つた空気をより、『ヒトからかけ離れたモノ』へ変質させていく。

「……衛宮、お前は不確かでも何でもない。ただ、前だけを見て歩いていくだけのヤツなんだな！」

それはきっと、俺たちの『人を殺すこと、生かすこと』への考え方の相違を指示していた。

お互いを理解することは出来る。しかし、その生き方を自身の中で許容することは絶対に不可能なのだ。

「なんだかさ、酷くお前が憎らしくて羨ましい」

「俺だって、式さんみたいな生き方……羨ましいけど、しようとは思わない」

手にした自らの得物の切つ先を、俺は再び目の前に立つ者に向ける。立ち居姿ですぐに分かる。きっと式さんは刀を持った状態の時、一番の力を出すことが出来るのだと。

正眼に構えられた刀からは何も感じられない。ただあるのは『斬る』という明確な意思のみ。

「さあ、やるつぜ。見せてみろよ。」

「ああ、そつちこそ……もう後には引けないー。」

刹那、風が流れた。

ただ音もなく、頬を撫でる優しい風が。

そんな優しい光景があつさつと違うものへと変わっていく。

その合図は言わずもがな、あまりに甲高い剣と刀の鳴り響く音。

「 ハアアアーーー！」

「 つ！」

それは互いの存在意義を証明するための戦い。

決して触れあえぬ二人が、唯一共有できるたつた一瞬の出来事であった。

ぶつかり合う。それは火花をあげながら踊る、まるで演武のよう  
に軽やかに、そして豪快に。

一方は一刀を駆使する使い手、両儀式。もはやそこには姿から感じ  
られる女性的な雰囲気は皆無。

そこには、目の前の敵をその刃にて斬り捨てんとする、それ  
以外のモノを総て排除してしまった者。片や一対の夫婦剣を操る者、衛宮士郎。知識に裏付けされた鍛練の  
もと、繰り出されるは変幻自在の動き。それを駆使しこの戦いに臨  
む。

歩数にしておよそ、十余の距離。

その距離を瞬きの間に詰め寄られる。これまで士郎が戦ってきた者  
たちとも段違いの、稲光を思い起こさせる速度。

しかし、真に特筆すべきはそこではない。その速度より恐怖せねば  
ならないモノ、それは『刀』。やや中段に構えられたそれは、士郎  
の想像などよりより早く横薙ぎに振るわれる。

ぶつかり合う刃と刃。

しかし式の刃はあっさりと、士郎の手にしていた夫婦剣を粉碎し、  
より一步を詰めていく。

「 投影・開始 (トレース、オン) ! ! 」

士郎の、一人の魔術使いから発せられる言葉。

それは自らの手に再び、壊されたはずの夫婦剣を現し、その一步の  
侵入を拒む。

「 つ！」

「やあ。常に攻めを繰り返しているはずの両儀式の、詰めの一一手が  
どうしても繰り出すことが出来ずにいる。」

確かに彼女は彼の持つ得物を『殺している』はずだった。  
しかし先の戦いと同様に、幾ら殺してもまた新たなモノが現れる。

死を見る者と、  
造り出し続ける者。

まるで背中合わせの性質を持つ者同士の戦い。

故に、決まり手があるとするならばそれは一瞬、どちらかの気が緩  
んだ瞬間。

再度疾走する式の身体、それに応ずるよう手にもつ干将を振り  
下ろす士郎。  
しかし、振り下ろすそれは式の速さの前ではまるで無意味。  
再び鈍い音をたてて殺された干将。それを皿にしてさりに襷へと突  
入する式。

ついに勝敗を決する一刀が振るわれるかと、その戦いを見守る幹也  
が想像し、式さえも確信した。

「 本当に、なんてテタラメ！」

しかしその瞬間、発せられたのは戦いを告げる音ではなく、一步を踏み出そうとした式の皮肉にも似た一言であった。

彼女の突入はそれを行おうとした刹那に、それを阻まんと現れたのは剣の壁。

これまでに経てきた戦いの知識の中で得た魔術の運用方法、それはどの場面にも応用が利くほどに昇華されている。

そう。彼が式の前では『手のひら』にのみ限定して投影を行つていた理由はそこである。

あくまで『造り出す』のだから、その座標を自身が把握していればそれは何処でもいい。

かつての自分自身も、英雄王と対峙した際にそれを実践していた。言つなればこれは、初見の者にとってはまさに“避けることの出来ない”技の一つ。

式は咄嗟の判断で、後方に飛び退く。

しかし、その先には創造主からの射出命令を待つ無数の切っ先。士郎は今まで無意味に後退していく訳ではない。式が必殺の一撃をもって自分に止めを刺しに来る。この瞬間を待つていたのだ。

「  
停止解凍、全投影連続層写！－！－！」

フリースアウト・ソードバレルフルオープン

響く宣誓と共に、標的に向け打ちだされる無数の剣戟の群れ。それと同時に攻めに転じようと疾走を始める士郎の姿。それらを目にしながら、式ははつきりと逃げられないことを悟った。どのように身を翻そうが、おそらく致命傷は避けられない。当然士郎に勝つことも出来ない。

だが式は、それでも目の前の少年に跪くことだけはしたくなかった。

カツと見開かれる式の目。

その目は自身に飛来する無数の凶器を直死する。

この光景はあまりに異様であった。

既に疾走を開始していたはずの士郎ですら、それを目の当たりにして、両儀式という人物はやはり化け物めいでいると感じたほどであった。

徹底的に退路を絶たれ、手詰まりの状態のはずの、自分より遅く動作を始めたはずの式の刀は既に迫りくる刃を撃ち落としていたのだ。その確信をもって、手にした夫婦剣を振りかざす士郎。どれだけ相手が神速の域を越えようと、自らの勝利のみを信じ、地を蹴る。

「これでツツ……」  
「つ！」

剣戟の残骸たちによって舞い上がる砂埃の中、より一層強く、甲高い音をたてて打ち交

わされる刃と刃。

どちらにとつても必殺の一撃。そしてその音が終わりの合図、この一人の一瞬とも思える攻防の終わりの印であった。

「 ああ……なんて、デタラメな力だ」  
砂塵の舞う中、ゆっくりと立ち上がる影が一つ。  
それは手にしていた得物を見据えながら、嬉々とした表情をしていた。

「 なんで最後の最後で躊躇したんだよ？」

彼女、両儀式が手にしていた刀は半ばから折れてしまい、最早使えない状態。

しかしそれでも彼女は無傷のまま、その場に立ちあがっていたのだ。

そう。傷を負い地に膝をついていたのは、衛宮士郎の方であった。

interlude out

ジワリと嫌な感触が肩口から広がる。

そこに目をやると、夥しい量の血があふれ痛々しく赤に染め上げていた。

勝敗は決した。

俺の、衛宮士郎の負けだ。

「次の手も用意してたんだろ？でももう……やる気なもそつだな」

式さんは俺を見ずにそつなく。

確かにその通りだった。もし自分の一太刀が式さんに致命傷を負わせられないならば、式さんの背後に展開していた投影を射出する、そう考えていた。しかしそれは諸刃の剣。自分自身もただでは済まない。

だがそれ以上に、式さんの速度は俺の想像を上回る速さだった。俺が莫耶を振り下ろすより先に、彼女の刀は俺の肩口を捉え、一刀に伏していた。結果俺は次の一手を繰り出すことも出来ず、地に膝をついてしまった。結局のところ式さんのポテンシャルを読み切れたかった、それが一番の敗因だらう。

しかし俺の投影した宝具を撃ち落とすためにボロボロなるまで酷使した刀では俺を両断することは出来ず、ただ軽傷を負わせた程度であった。

つまり式さん自身も得物を失い、俺と同様にこれ以上は戦うことはできない状態だったのだ。

「　　はい、俺の負けです」

いかに軽傷とはいえ、これ以上戦うことは出来ない。

俺は流れる血を押さえながら、式さんに手を向けてそう返した。

俺の返答に“つまらない”と皮肉を口にしながら、式さんはゆっくりと縁側の方に歩いて行つた。

俺は彼女の後姿を目で追いながら立ち上がる。少しよろける足に不安を覚えながら、どうにか一人で立つことが出来た。

きつとこの勝負に負けてしまえば、悔しくてやりきれないのだろうと考えていたが、不思議と心を占めていたのは『爽快感』であった。栓をしていた気持を一気に吐き出すことが出来たかのような感覚。それだけでこの戦いに臨んだ意味があったと心の底から思つことが出来たのだ。

“これで何かが変わったとは言えない。でも……”

「おい、士郎！」

声の先に視線を向ける。そこには並んで立つ幹也さん、そして式さんの姿があった。

式さんは恥ずかしそうに髪を搔き乱し、そして笑顔を見せながら最後に一言、俺に告げた。

「また今度……気が向いたら手合させしてやるよ

「ええ、色々片付いたら……お願いします」

その一言は、俺の存在を認めるモノ。

これまで冬木における様々な関係性をないものにしてきた俺が、作ることの出来た人との繋がり。何故かそれがひどく嬉しくて、自然と頬を涙が伝つていた。

時は刻一刻と過ぎていく。

間近に迫る季節に焦りを覚えながら、俺は歩みを止めじみしない。

ただ、この笑顔に報いるために。  
ただ、己の中に後悔を残さないために。

東の空が白み始め、新しい朝を告げようとしている。  
季節は冬、ついに俺の待ち望んだ季節は田の前に迫っていた。

「 投影……開始 」  
トース・オン

俺の中の總てが変わる、魔術を使う、"魔術師"としての自分へ  
変質していく。

言葉など、切り替えるための言葉など正直どのようなものでも構わ  
ない。

ただその言葉が俺にとって "魔術師としてのヒミヤシロウ" を容  
易にイメージすることが出来る一番しつくらぐる言葉だったということ  
だけだ。

立ち上がりながら俺は両手に夫婦剣を投影し、誰に向けるでもなく  
正面を見据えた。

そうして干将を縦一線、躊躇うことなく振り下ろす。

剣術の型だとそんなことは考えない、ただ身体が赴くままに干将  
を、莫耶を振るい続ける。ただ足搔くよつこ、ただ贖罪するかのよ  
う。

そつ。俺は、ヒミヤシロウは理解して、覚悟しておかないといけな  
いのだ。

自分はまた、間違った道を歩んでいるのかもしけないと。

自分はあの魔術使いに教えられたはずだった。

正義の味方として生きてきた道に間違いはなかつたと。胸を張つていいものなのだと。

それなのに、今の自分はどうだ？なんのために強くならうとしている？他にやるべきことがあるのではないのか？オレがあの時にあの少女にいった言葉を偽りのモノにするつもりなのか？オレには、オレにはもっと大事にするべきことがあるはずだろう？もつと多くの命を救うこと、より強固な正義の味方を目指すこと。それがオレのするべきことではなかつたのか？

「分かつていい！ そんなことは分かつていい！」  
声を荒げ、繰り出す剣撃を止めることなく叫ぶ。

はつきりとしていた。俺は相反する思いを抱えていると。

“成れるなら、再び正義の味方になりたい”

正義の味方になるならば……やるべきことは一つだ。  
これから起こりえること、自分が知っている限りの戦いを止めるために奔走し戦いに身を投じればいい。それこそエミヤシロウが貫いてきた生き方、“正義の味方”的生き方だ。

“大事な人を守りたい、その人一人を守れる確かな力を持ちたい”  
だが今の自分はどうだ？ 再び士郎になつた時、何を思った？  
いつたい何を望んだ？

ただ、再び彼女に会えるであろうことを喜んでしまつた。出来る

ならば自分は彼女を守る存在でありたい。俺はそう考へてしまったのだ。

正義の味方として恥ずべき思いを、自分は持つてしまつたのだ。

「 ッ ハア！ ハア、 ッッ！」

もう一度力強く、自分の中に在る曇りを断ち切るように横一線、  
莫耶を振るつ。徐々に身体は限界に近付いていく。  
それでももう少し、今一度と俺は夫婦剣を、自らが描き続けてきた  
馴染みの剣を振るい続ける。

断ち切ろうとしたのは自分の甘心。

俺はこの境遇に立つてもなお、成し得ていないことがあつた。

強くなると、覚悟を揺るがさないと決めていたのに、俺は常に揺れ  
ている。

桜の、この街で出会ははずだつた人たち事、これから戦いでき  
つと危険に晒されるであろうことを分かつていて、俺は考へてしま  
うのだ。

どうしてもこの人たちを救いたいと、危険な目にあわせたくない  
と。彼女を選んでしまつた俺が、そんなことは出来ないと一番分か  
つてゐるはずなのに……。

切嗣が最期に見せた笑顔が、幹也さんと式さんが言つた言葉が胸に  
突き刺さり、俺を苦しめる。それはきっと、俺があまりに無謀で自  
分勝手な思いを抱え込んでしまつてはハッキリ理解させられて  
しまうからだらう。

それでも、それでも俺は守り抜きたいんだ。

大事だと思えたモノを、絶対にこの手からは落とさないと誓いたい  
んだ。

それが、かつての俺に出来るる唯一の贖罪だと思つから。

震える手に力が入らず、ついに干将、そして莫耶を床に手放し、膝を付き倒れこんでしまつ。

きっと今の俺の姿はあまりに情けないだらつ。きっと笑われるかもしれない。

それでも、こんな生き方しか出来ないから……俺は這いずつても前に進むしかない。

もう引き返すことが出来ない。俺が気付かぬふりをしていた間にも刻一刻と時間は迫る。

俺の、Hミヤシロウの矛盾を孕んだまま、物語はその重い幕を開こうとしていた。

それは回避できるはずだつた戦争……俺が招いてしまつた災厄だつた。

### interlude

「それで結局、橙子さんから何を言われてたの？」

「ん? そんなに大したことじゃないさ」

「でも、あんなに必死だったじゃないか?」

「……はあ、幹也には隠し事つて出来ないな」

「まあ、君の事ずっと見てるかな……分かつたやつなんだよ」

「……言われたんだよ、『お前に足りない最後の部分』を埋めてくれるってさ」

「足りない部分?」

「ああ、何ていうのかな……説明しづらいんだけど、結局オレは不確かだつたんだよ。いくら幹也と一緒に居ても、どれだけ日常の中で生きてても」

「え……」

「アイツは、士郎はそこを埋めてくれるって、トウコトウ言つてた。……まあ実際、トウコトウに良じよに使われただけなんだろ?けどね」

「士郎くんを、強くするため?」

「ああな……まあ良こきつかけにはなつただろ」

「確かに。橙子さん凄く士郎くんに『執心みたいだからね』

「どつあえず、これからは士郎血脉がどつかぬかつてと」だらうな

「

「やうだね。士郎くんなら大丈夫だよ……それで、君は大丈夫なの

かい？」

「大丈夫に決まってるじゃないか。だつて……」

「うん。僕は君を一生、離さないからな」

「当たり前だろ？ 離れてやらないよ、オレも」

interlude out

## 始まりの季節へ

差し込む陽が今日の始まりを告げる。一日は始まり、いつものようには様々な人がお互いに自分の役割をこなしていく。うつすらと目を開け周りを見渡す。見慣れた風景がそこにはある。もう何年も使っている魔術を鍛練する場、俺の秘密基地だった場所だ。

「朝、か……」

一言呟き、俺は少し身ぶるいをしながら身体を起こした。さすがにここで寝るべきではなかつたかもしれない。まだ風を引くほどではないかもしねいが、空気は冷氣を帶びてきいていた。

「先輩？ またこんなところで寝ていたんですか？」

不意に声が掛けられる。土蔵の入口に田をやるとそこには家族当然に接していいる少女の姿があった。

「ああごめん。またやつちまつたみたいだ」

俺はその少女、間桐桜に謝罪をしながら立ち上がりつて彼女が待つ入口へと歩を進める。

すると桜はいきなり顔を真っ赤にし、俺が追いつくよりも早くその場から駆け出していく。

手には俺にかけようとしていたのであろう毛布がチラリと見えた。

「ああ、なるほどな……悪いことしちゃったかな」

桜に好意を向けられていることはだいぶ前から気が付いていた。まあ昔の俺ならば氣付かないだろうが、さすがに今の俺はかつてほど鈍感でもない。

素直に彼女の気持ちが俺にとつては嬉しかった。いつの俺の記憶の

中でも、彼女だけは俺の『日常』の中の存在でいてくれたから。

そんなことを考えているから少しうつたりと歩いてしまったんだろ？。俺が土蔵を出るころにはすでに桜は家の方から、早く来てくださいねとこちらに声をかけてくれていた。

俺は片手をあげて彼女の声にこたえ、視界を空へと移す。

そうする度に思い出すのは、知らず知らずの内に恩師と呼ぶよつになつていたあの三人の事だった。

橙子さんからよく言われていたのは、『確固たる意志』を持つこと。

実際に彼女から何かを学んだというわけではない。ただ色々な場所に行き、様々な経験を積んだ。その中で自分にプラスとなる魔術的な鍛練をしてきたわけなのだが、結局のところ、橙子さんの言葉が『魔術を使う者』として、一番大きなキーワードだったよつに思う。

そして一人の、幹也さんと式さんから言られた言葉。

強くあるために、『自分らしく在る』こと。

自分らしい選択をするために、『シンプルな思考を持つ』こと。

どれだけ鍛練を積み、技術面・肉体面が向上していくにせよ、結局のところそれをどのように發揮するのかは自分の心の強さ次第なのだ。

ようやく最低のランクはクリアした。あとは本当に、自分自身の決意の固さにかかっていると言つても過言ではない。

「 あいつが思い描かないようなエミヤシロウになる……それがまず俺がするべき事なんだから……」

一言呟いて、俺は家に向かって歩き始めた。もうそんなに時間はない。ならば今自分が出来ることをどうにかしてするしかない。本

当に、時は止まつてくれないのだから。

制服へと身を包み居間の戸を開ける。暖かな空氣と共に香り立つのは、どこかホツとする朝食の香り。

今日は和食なんだと思いながら、俺は静かに戸を閉め自分の席を田指す。

居間に置かれた広めのお膳の上には、もう既に三人分の朝食が用意されていて、後は俺の到着を待つばかりという状態であった。そしてそこに鎮座するは言わずもがな、姉のような存在であり、虎と呼ばれる女性が一人。彼女はどこか落ち着きのない俺に言葉を投げかけてきた。

「もひ、遅いよ士郎～！ 『はん冷めちゃうじゃない！？』

全く、この人は相変わらずだなと心の中で苦笑しながら、俺も自分の席へと腰かけながら田の前の虎に一言呟く。

「ごめん、ちょっと寝坊しちゃったみたいでさ」

「もひ。最近本当にお寝坊さんだねえ。士郎が夜更かしして一体何をしてるのかつ！ お姉ちゃん、すーつ『はん心配だよー！？』

にやりと嬉しそうな笑顔を浮かべる藤ねえ。きっとなにか俺をからかうネタでも思いついたのだろうなと考えながら、俺はとりあえず

ず無視する」とした。

こんな日常を肌で感じながら、今日も平和だなと思つ。うふ、やつぱつこの空氣感が俺は好きなかもしれない。

「お待たせしました」

藤ねえの騒いでいる中、台所から桜がようやく出てきて席に座る。にこりと笑いながら、慣れた手つきで藤ねえと俺にお茶碗を渡すと、ようやく藤ねえも静かになつて食事のあいせつを待つてゐる。これが衛宮家の朝の何げない風景の完成だ。

「さて、それでは……」

「いただきます」  
「いただきます」  
「いただきますっーー！」

食卓に響くそれぞれの声。一ひとつと桜の作った朝食を食べる藤ねえ、それを笑顔で見つめる桜。うん、やはり朝はこうでなくては。この光景を見るのがあまりに嬉しくて、しかしどこか懐かしくて……。

複雑な顔をしているであらう表情を悟られまいと、味噌汁のお椀を手に取りゆっくりと、ただゆっくりとその味を楽しむことにした。きっともうすぐ、こんな日々が遠いものになつていくのだろうと確信しながら。

朝食を終え、会議だと慌てる藤ねえと部活に向かう桜を見届けてから俺は自宅を出た。いつもより少し早目の時間になつたせいだろうか、通学路にいる学生の数も疎らだった。

その学生たちの中に友人の姿を見つけ、俺は一声かける。

「よお、一成。今日も生徒会か？」

「ああ、衛宮か。今日も早いのだな」

柳洞一成、彼も桜と同様に俺の『日常』としての存在だった。

冬木の人たちとの関係が幾ら希薄になつていつたと言つても、一成とは変わらない関係を築くことが出来た。ただ、常に生徒会の手伝いをするということはもちろんなかつた。自分に時間がある時だけ、一成に手を貸す程度である。

そんな風にしてでも俺が一成との関係を築こうとしていたのは、おそらく彼とは友達でいたいという俺の我が儘があつたからだらう。

かつて、魔術を使う者として生き始めてから、どの記憶の中にも彼と再会した記憶はない。今の俺になつて初めて一成と対面した時の何とも言えない気持ちを俺は忘れるこつは出来ない。いわゆる郷愁の念というやつだらうか、上手に言葉には出来なかつたが、すごく嬉しいと思えた。

「最近忙しそうだな、放課後も遅くまで残つてるみたいだし」「そつなのだ、少し立て込んでいてな。また手伝いをしてくれると

助かる」

そんな他愛もない話をしながら、俺たちは学校への道を歩いていく。「いつの誠実な性格からして他の人間に頼みにくいのだろうと考えながら、ふとある疑問にぶち当たった。

「そう言えばさ、他の生徒会の役員はどうしたんだよ？」

「そ……それはだなあ」

「最近一成以外の役員の子つて数人しか生徒会室で見ないけど……」  
「ううたえながら返答に困る一成。どうにもはつきりしないと思いつながら、別の話題を振るうと時、一成がいきなり大声をあげた。

「き、貴様！　こんな早くにまた何か善からぬことでも考えているのかー？」

いきなりの大声にもびっくりしたが、普段の言葉遣いと大分違うことを考えると怒らせてしまったかと反省し、俺は「ごめんと言いながら彼の方に視線を移す。だが一成は俺の方ではなくもつと道の先、校門の方を見て声を荒げていたようだ。

無論俺の声に反応もせず、一成は猛ダッシュで校門に近付き相手と口論を始めた。

「まつたく、何やつてん……だ」

俺が一成を落ち着かせようと駆け寄つて声をかけようとした時、俺は思わず声を失つてしまつた。そう彼女が、あの“黒髪の少女”がいたからだ。

「ん？　ああ、すまん衛宮。この女を見た途端に我を失つてしまつた。まだまだ修行が足りん」

一成の声が遠くに聞こえたような気がした。

「IJの女呼ばわりは失礼ね、柳洞くん？」

「この声、はつきりと覚えてる。俺がオレであつたこのパートナーの声。

「このたわけが！ 生徒会役員への横暴、謝罪もせずによく呟つたものだ」

「この間お互に納得したと思っていたけど、IJ希望ならまた後日じっくりお話をさせていただくな」

このハツキリとした物言いも、その実直な眼差しも、記憶の  
ままだ。

「どうしたのだ？ 衛宮よ」

「ああ、すまない。少し呆けてた」

あの朝口の輝く中で、忘れることのない笑顔を残してくれた  
少女、だから親愛を籠めて俺は言葉こしよつ。普段と変わらない、  
いつもの言葉だ。

「よお、遠坂つて朝早いんだな」

## 変わらない風景、変わっていくモノ

### interlude

「よお、遠坂つて朝早いんだな」

「くつたらしい生徒会長と口論……とまではいかないが会話している最中、不意に遠くから駆け寄ってきた男子が声をかけてきた。

そう、私はこの男子を知っている。私がこの学校で知るなかで一番危険で……一体何なのか分からない男。

そしてあの子を、桜を眺めていると度々姿を現す、桜が一番良い笑顔を見せる男子だ。

いや、違うか。むしろこの男子の前でしか桜は笑顔を見せることがないのだ。

「貴方は……」

「衛宮……」のよつゝな女と会話する必要はないぞ!」

私が衛宮くんに返答しようとするが、またまた生徒会長の邪魔に入る。全く、なんでこんなに田の敵にされるのかも正直分からないが、まあここは身を引くのが良策だらう。

「衛宮くん? あまり柳洞くんと仲良くしていると便利にこき使われるだけよ」

とりあえず嫌味を一言呴いて、踵を返して再び私は校舎の方へと歩を進める。

「ありがとうな、遠坂」

不意に予想外の声が返ってきて、思わず私は立ち止まってしまう。何故？ 嫌味を言つただけなのになんで？ 訳が分からぬ。衛宮くん……一体どんな神経しているの？

上手に言葉にすることは出来ない……でも私の勘が、魔術師としての勘がじつ告げている

“この男は危険すぎる”と。

そう、彼から発せられるあの独特の雰囲気。それは間違いなく『魔術を使う者』が発するモノのそれ。いや、それだけで言い表すこの出来ないモノをあの衛宮士郎という男は秘めている。私にはそう思えて仕方がなかつたのだ。

「 あいつも、関わつてくるんだとしたら……」

教室までの階段を足早に歩きながら、私は考えていた。

衛宮士郎という男を野放しにはできない。冬木の管理者として、何をするためにこの地に留まっているのか、何が目的なのかをハッキリさせなくてはならないと。

「もし、聖杯戦争が目的だつたら……叩くしかない」

そう、もう既に時は満ちている。聖杯戦争に関わる者がこの地に集結し始めている今、決断を急がなければならぬのだ。

私は逸る気持ちを抑えながら、階上へと急いだ。まずは落ち着く

こと、優雅に振舞わなくてはならない。それが私のポリシーなのだから。

## interlude out

「遠坂か……」

自分で呟いた、あまりに懐かしい響きに、少しだけかつて彼女と共に戦いの夜を駆け抜けっていた時のことを思い出し、思わず笑みが

出た。

そんな俺を不思議に思つたんだろうか一成は俺の顔を、眼を白黒させながら心配そうに見ていた。

「ああ、すまん一成。早く行こうぜ」

「今日は本当にどうしたのだ衛宮。体調でも悪いのか？ もしや、あの女狐にあてられたか！？」

あまりに突飛のないセリフを吐きだす一成。それもあながち間違いでないが、とりあえず俺は笑つて誤魔化すことにした。一成はどうにも納得のいかない様子だったが、足早に俺たちは校内へと急ぐことにした。

「すまなかつたな、衛宮」

「ああ、じゃあ教室に鞄取りに行って、そのまま帰る」とするよ

時間は流れ、既に日も暮れ始める時間帯。

俺は一成の手伝いで、壊れかけだというストーブの点検をしていた。数としてはそんなに多くはないものの、やはり一人での作業となると時間がかかる。

おそらく予想より一時間近くは時間をかけてしまったのであろう。他の仕事で外に出ていた一成が帰ってきたころに俺のようやく作業を終えることが出来た。

「最近物騒だからな。気を付けるの帰るのだぞ」

「それは一成もだろ？ 早めに帰れよ」

別れの挨拶も済ませ、俺は一路自分の教室へ急いだ。こんな時間だ。窓から見える校庭にも部活動している生徒は疎らにしか見られず、廊下には誰一人としていない。

「まあこんな時間だしな……」

独り言を呟きながら、オレンジに染まつた廊下を急ぐ。

この景色を見ていると、どこか家路を急ぎたくなるのは何故だろう。きっと誰もがそうだろう。それに持つ、『本当に帰りたい場所』。俺にとってはそれが、あの切嗣と暮らした……そして今、藤ねえや桜と食卓を囲むあの家。彼女と初めて出会ったあの場所なのだ。

ようやく教室の前にたどり着く。

おそれくもう誰も居残ってはいないだろうと胸につつも、ゆっくり

と扉を開く。

真っ先に目に入ってきたのは、その美しい横顔だった。  
もう誰もいない教室で一人、ただ外の風景を眺めている影が一つ。  
ああ、いつかこんな光景を見たことがあったような気がする。  
その影は俺の存在に気がついたのか、少しだけ微笑みながら俺へと  
声をかける。

「遅かったのね、衛富くん」

「遠坂、まだ残つてたんだな」

互いに視線を交わらせながら、それ以上には何も言わない。ただ直感する。彼女が一体何をするために、この教室に一人残つていたのか。

答えは、簡単なことなのだ。

「じゃあな、遠坂も早く帰れよ」

自分の席に掛けておいた鞄を手に取り、踵を返し片手をあげて別れを告げながら廊下へ出るべく歩き始める。

「…………ねえ。貴方……いつまで惚けた顔してるともりなのよ?」「ん? 何言つてるんだ、遠坂?」

背後からかけられた声に、俺は振り向かずに返答する。

綺麗な声から感じられたのは警戒。おそらく既に気が付いていたの

だろう、俺が魔術を使う者だということを。

背中に向けられる殺気が重い。しかしどうとこうことはなかった。  
これくらいのモノなら、逆に心地良いほどなのだから。

「それが惚けてるって！……いいわ。聞きたいことは一つよ」

棘のある響きを投げかけられる。その言葉に応じるよつて、俺は  
彼女の方へと顔を向ける。

言うまでもなく、遠坂はするどい目つきで俺を睨みつけていた。そ  
れは明らかに敵意を持った視線。魔術師に向けられるべきモノ。

「衛宮くん。貴方、この街で一体何をするつもり？」

「何をする？ 俺はただこの街で生活してるだけだぞ。それ以上に  
何もない」

俺の言葉に顔をしかめる遠坂。バカにしているよつて聞こえたか  
もしれない。しかしそれ以上の目的は俺にはない。

「 ハア」

彼女は呆れたように溜息をついてからブツブツと“嘘ではないみ  
たいね”と呟き、俺に視線を戻した。表情からほんの少く彼女らし  
い、落ち着いた様子が見て取れた。

「聞き方が間違つてたわ。魔術師がこの土地に来て、やるひとは一  
つしかないのよ。」

一呼吸、ゆっくりと深呼吸した後で遠坂は呟く。

これは俺が、そして彼女が戦う意味を示すための言葉。確認するた  
めの言葉。

俺だけが一方的に考える、彼女との誓いのよつたモノだ。

「 貴方、聖杯戦争に参加するつもりなの？」

「 それは言えない。でも、一つ言えることがある

「俺は、衛宮士郎は聖杯なんかに興味はない」

ただ、聖杯の導きによつて現れる……彼女と一回会いたい、ただそれだけ。

そう言つた点では、俺は聖杯を欲しているのかも知れない。

しかし叶えたい望みなど、そんなモノ俺にはもうない。いや。俺はずつとその道の上を歩いているのだから、今さら望みをかなえてもらひう必要などないのだ。

「 うう。なら良いわ。でもね、もし貴方が私の邪魔をするようなら……」

「ああ、その時はじつに自由に

俺は手をヒラヒラと振りながら、再び教室の扉を開け、足早にその場から立ち去ることにした。

「ちょっと、まだ話は……！」

その後、遠坂が何かを言つていたようだが、ちゃんと聞きとることは出来ない。むしろ聞きたくないという方が正しいのかもしれない

い。これ以上の遠坂との接触は、俺にとっては決意を鈍らせるモノ以外の何物でもなかつたのだ。

### interlude

「ひょっと、まだ話は………」

その呼びかけに応えようとせず、衛宮くんは教室の外へと去つて行つてしまつた。

無論止めるこゝも出来た。強引に話を続けることだつて。

でも何故なのだつ。言葉は出ても、身体が動こゝとまじない。ふと視線を自らの手に移すと、両の手が小刻みに何かに怯えているように震えていた。

「…」

恐れてしまつたのだ。彼を……衛宮士郎という魔術師を。彼と話している時には気付いていなかつた。それだけ衛宮士郎と対峙している間、気をはつていたといふことだつ。

しかしそうだつたとしても、私がこんなにも誰かに怯えるなんてこれまであの神父にさえ嫌悪はしても、怯えることなんてなかつた。それが彼が相手と言つだけでこんなにも違うだなんて……。

「どうりで、このままにしておけない」

衛宮士郎……あの男だけは聖杯戦争など関係なく、危険すぎる。

頭に浮かぶマイナスの感情を破棄しながら、ただ私は考える。  
彼の思惑とは一体何なのか。彼がこの冬木で本当にしようとしていることは一体何なのか。

しかし答えの出ないままに、周囲は闇に染まっていく。

そして夜が、魔術師たちの駆ける時間が刻一刻と迫りつつあった。

interlude out

夜、季節も移り変わって陽が落ちるのも早くなっている。いくらあたりが闇に沈んでいるといつても、遅いとは言えない時間帯にも関わらず街路に人の影はない。

ここ最近冬木でおかしな事件が頻発していた。おそらくそのせいだろう。

何の手がかりもない強盗殺人事件、新都で頻発しているガス漏れ事故…それらの原因は大体見当は付いている。そしてそれを行うであろう、あのサー・ヴァントたちの顔を思い出しながら、俺は苦笑いを浮かべる。

「もう召喚されてるんだろう？」

一言呟き、俺は急ぎ足で家を出指した。まだ俺が関わってはいけない、勝手にそう思い込むことにして。それが自分の身勝手な考え方だと、あの理想をもつ者としては恥ずべき行為であると分かりながら。

「何故見過ぎせる…分かつてゐるのに……」

ただ言い訳をしていた。自分が関わっていいのはあの夜からだと。何も知らなかつた俺が一度、 “殺されてしまった”あの夜からだと。拳に力を込める。それは掌に痛みを生むだけの不毛なこと。自分が変わつたことへの後悔なのか報いなのか、ただ自分があまりにも不安定でどうしようもない奴ということはハッキリしていた。

「 ッ！」

刹那、どこからともなく殺氣を孕んだ視線を感じ、俺は思考を魔術師のモノへと切り替える。

間違はずもない。俺のことを見ている“誰か”がいる。

それとともに響いてくる靴音が一つ。ゆっくりとした歩みでこちらに向かって走ってきた。

「 ……なんでだ？ なんで何もしてこない？」

相手も魔術師ならば、姿を見せる前に攻撃してくるのが必定。しかし靴音の主は最初に俺に殺氣を向けて以降、ただこちらに歩いてくるだけだった。

点在する街灯の下、その少女は姿を見せた。

忘れるはずもない。その容姿、その銀の髪、意地悪に笑う可愛らしい笑顔…小さな少女が俺に笑いかけながらそこにいた。

その姿に俺は立ち竦くことしか出来なかつた。

俺はこの子を知つてゐる。雪のような真白がよく似合ひこの子を。俺が救つことが出来なかつたこの子を。

「 イ……」

彼女の名前を口にしようとして、すぐに口元を押しつぶさる。何故

かは分からなかつた。ただ彼女に視線を送り続けるしか出来ない。そして一步、もう一步と少女は歩みを進め、ついに俺の横を通り過ぎていく。そして一言、鈴の鳴る様な響きで俺に呟いた。

「早く呼び出せないと死んじゃうよ、お兄ちゃん」

その言葉をようやく俺は理解した。この少女はこの瞬間、俺を殺すつもりだったのだろう。本当はそういうつもりだったのに、こいつして警告だけしかしなかった。

これは同じ人を親に持つ俺への憐れみ……いやせつとここれはこの子なりの優しさだったのだろう。

「ああ、でも俺は殺されない」

俺は少女の後ろ姿を見送りながら、そう呟いた。きっと彼女には届いていないだろう。届いていたとしても戯言にしか聞こえない。だから今はこのままでいい。次に対峙した時、俺はこの子には殺されない。

自分のためにも……彼女のためにも。

## interlude

「なんで？なんで！？」

足早に駆けていく少女の表情は完全に困惑の色を見せていた。

今すれ違った男。自らの耳に入ってきた情報では、そこまで力も強くない、一般人とほとんど変わらない半人前の魔術師ということだった。

しかし、少女が行使していたはずの魔術は彼には通じず、こんな結果を彼女にもたらしただけだったのだ。

少女の目的は一つ。ただ男がどんな顔をしているのか、それを確認したいだけだった。自分から親を奪った男、自分を見捨てた人間が育てた男の顔を。

だから少女は、自分の従者も連れてこずにやってきた。

仮につまらない人間ならば聖杯戦争を前に殺す。

気に入ればそれが始まつてからじっくりと痛め付けてから殺してしまおう。

どちらにしても結果は変わらないが、そうしようと少女は心に決めていた。

しかし実際、今は少女の方が男に困惑させられていた。魔術が効かなかつた、それはどうでもいい。

あの言葉だ……あの言葉がいけなかつた

『ああ、でも俺は殺されない』

「」の言葉を聞いた時、脳裏に浮かんだのは自分に優しく語りかかる父親の姿。

ただそれだけが彼女を、イリヤスフイール・フォン・アインツベルンをこんなにも苦しめていた。

「 何なの？ なんでな！？」

言葉の端々、そしてその表情から滲みでる少女の心の揺らぎ。  
殺すと決めたはずの相手に、どこか懐かしさすら感じられる。そんなおかしな感覚に彼女はどこか嬉しさと悲しみを抑えきれずにいた。イリヤはその小さな手のひらをギュッと握りしめながら、静かに溜息をつく。

「 もうダメ…… 今度会つたら殺しちゃうよ、お兄ちゃん」

もう考え疲れたのか、イリヤは自分が一番はっきりとさせねシンブルな結論を出す。

そうすれば思考がきれいに整つ、そうすればおかしくなる」とはない、そうすれば何にもどうわれずにアインツベルンの悲願を果たせる。

イリヤは自分にそう言って聞かせ、血のに用意された城へと帰つていく。

もう開幕まで残り少ない時間を、彼がどう過ごすのかを楽しみにしながら。



イリヤとの遭遇から数日、俺は普段通りの生活を送っていた。相変わらず学生としての生活においては、一成からの頼まれごとも多く、遅くまでかかることも少なくない。

事実、今日も部活動をしていてあらう生徒たちと同じくらいの時間まで、校舎に残ることになってしまった。

「さて、さつさと帰るかな……」

俺は鞄を手に、校外に向かつて校庭を歩く。

ふと視線の先に、よく知る少女の顔を見付ける。少女は部活動の帰りだといつのに一人、足早に学校の外に出ようとしていた。

「おーい、さく……」

「おい！何僕の事無視してるんだよ！？」

前を歩く少女、桜に声をかけようとした時、~~ほぼ同じタイミング~~で響く怒鳴り声。

その声の主は桜に走り寄り、彼女の腕を乱暴に掴む。

「やめて下さー、兄さん」

「ひめこいんだよ、おまえは僕の言つことを聞いてりやいいんだ！」

二人のやり取りを見て見ぬ振りをしながら脇をすり抜けていく者や、ヒソヒソと遠巻きにそれを眺めている者たちもいる。そんな中で、桜の手を掴んだ男子は強引に桜を引っぱりながら、校門の外へ

と連れて行こうとする。

そう、こいつは昔からそうだった。平氣で人を……桜を傷つける。そんな風にしか自分を表現できないやつだと分かりつつも、だが俺はその男子の、間桐慎一の行動を許すことが出来なかつたのだ。

「 何してんだよ、間桐……！」

俺は、自分でも驚くほどに大きな怒鳴り声を上げていた。周囲に居た生徒たちも、その声にビクリと身を振るわせる。俺は一人の間に割つて入りながら、鋭い視線を慎一に送つた。

「 ……な、何だよ？ また、またお前かよ衛宮！…？」  
「 ああ、だからなんだよ？」

俺の顔を見た途端に先程までの強氣の表情が一変、オドオドとしたものになつてしまふ慎一。

コイツとだけは何故か一成のようすに仲良くすることは出来なかつた。むしろ桜への態度の事もあり、俺はかなり冷たい態度で慎一に接していた。

「 そもそもね！」  
勢いよく俺の胸倉をつかみ上げながら詰め寄る慎一。

「 僕たちがこんな風になつてるのは衛宮、おまえのせいなんだつて前にも言つたよな？」

グッと力を込めながら挑発的な瞳を見せる。

確かに以前にそう言われたことがあった。そもそも桜が俺のところに手伝いに来る必要も正直に言えがない。しかし俺は桜の好意を無下には出来ず、桜の好きなよつとせでやつているだけだ。何を選ぶのも、それは桜の自由とさせてやりたいと思つから。

「ああ、そうだったな……でもな、それで妹に暴力を振るつてもいいのか!？」

「そ、それは……」

俺が「こままで怒ると思わなかつたんだら、慎一の手の力が弱々しくなつていく。

それを確認しもつ一言、慎一に対して言葉をかけた。

「なあ間桐、俺が悪いのは分かつて。お前の言つことだつて理解しているつもりさ。でもさ、頼むから兄が妹に暴力を振るつなんて事だけはしないでくれよ」

俺の言葉に何かを感じたのだろう、慎一は手を退けて桜に向き直つて一言呟く。

「分かったよ、とつあえず衛宮との話はまた後でだ。でもね、衛宮の家に行くのも程々にするんだ!」

そう言葉を残し、慎一は足早にその場から去つていった。何といふか、本当に去り際の手際に良さと、捨て台詞には相変わらずビックリさせられる。

「先輩……本当にすいませんでした」

慎一の逃げ様に感心させられていた俺に、桜は謝罪の言葉を述べる。

まあ、元々は俺が桜に甘えているせいでいるのだから、しょうがないのだが……。

「まあ、自分でちゃんと選んでな。間桐の『ひじり』もつともだから、気を付けるんだぞ?」

桜にそう笑いかけながら、俺たちは校門の外を目指した。周囲は落ち着き、普段の下校の風景にその姿を戻していた。何事もなかつたように、そして今からも何も起こらないことを示すように。

そう。思えば今日こそ、俺が一度死ぬはずだった日。

俺が慎一を『間桐』と呼ぶ関係になつたせいで。

俺が今日、学校に残らなかつたせいだ。

この戦争で起こつえたはずの事象は、その様相を変えていくことになった。

周囲にはそれぞれの螢みの光が見え始めて久しい時間帯、俺は桜を家まで送りに出ていた。夕飯の片づけを終えて、少しばかり休憩

をしていた時のことだった。普段ならば藤ねえが桜の事を送つてくれる。しかし今日に限つて藤ねえは“お姉ちゃんは色々と忙しいのだ！”などと言い、そそくさと自分の家に帰つてしまつた。

確かに俺個人としても普段から桜には世話になつてるので、快く送つているわけなのだが、何故だか普段のような会話がない。俯き加減に俺の後ろを歩く桜に俺はどうしたらいいか分からず、黙つたまま歩き続けた。

遠くの車の音が聞こえるほど、あまりに静かな路地。最近の騒ぎのせいもあるのだろう、俺たちの歩く路地にもう周囲に人の影すらない。

「先輩、もうこの辺りで結構ですから」

深山町の交差点を少し越えたところで、桜が遠慮がちに声をかけてくる。

「そうか……家の前まで送るだ？」「

「いえ……ここまでで十分です。すいません、ここまで付き合つてもらつてしまつて」

深々と頭を下げる桜にこれ以上何も言えず、俺は彼女の言葉に従うことにしてしまつた。

「じゃあ、気を付けて帰れよ

「はい、先輩もお気を付けて」

一人で笑顔を見せあいながら、その場で別れた。俺は桜の姿が見えなくなるまで彼女を見届ける。明日も元気な姿を見せてくれたらどれだけいいだろう。

そんなことを考えていた時のことだった、その響きが俺に投げかけられたのは。

「人の妹を自分のモノみたいに……本当に気にくわない奴だよ、お  
前は」

街灯に照らされ、その影は立つ。

その立ち居姿は堂々として、血の威厳をこれでもかと見せびらかすよ。づ。

その表情は自らの苟立ちを隠さず、ハッキリとした嫌悪を俺に向かっている。

“ここまで感情をぶつけてくるとせ、ここからしくない。”

それが「」の男、間桐慎一の今の姿をみた時の、俺の素直な感想だった。

「なんだ？ 僕は桜を送りにここまで来ただけ……」

「つるさいよ！… ああ、本当におまえはうるさい奴だよ！？」

響き渡る大声。おそらくその声に反応する者もいるかもしない。しかしそんなことすら気付かないほどに、慎一は興奮していた。今すぐのでも、俺をじうにかしてしまいたいと言わんばかりの俺に向けながら。

「衛宮、おまえ魔術師なんだろう？ だつたら聖杯戦争の事も知ってるんだろう？ そうだよなあ！？」

一ヤリと嫌な笑顔を見せながら、慎一は言葉を止めようとしない。

「それがどうした？ 知つてて、お前に何か関係があるのか？」

努めて冷静に言葉を紡ぐ。

慎一が俺を試していることは明白。そしてこの後の展開も予想できる。

おそれら「」の場を逃げきることは出来ない。慎一の後ろに居るである。

るつ、“あのサーヴァント”に速度では敵わないといつてから。  
分かっているから。

ガキンと頭の中で、重い鉄が打ち鳴らされる。

目が覚めるような、慣れ親しんだ感覚。

ダラリと投げ出していた腕に力が、目の前の障害を打倒するための力が籠る。

「ああ～関係ないね。だつてさ、おまえは今日……僕に殺されちゃうんだし！」

余裕に満ちた表情で慎一は咳く。その響きと共に、迫りくるは風すら切り裂く凶器。

ゾクッと身が震える。それはいよいよ始まることへの歓喜？それとも別の感情？

その答えを出せないまま、俺の聖杯戦争は再び幕を開ける。そしてその戦いにおいて最初に相対した敵は、かつて友人と呼んでいた男。凶器の迫りくる中、苦笑いを浮かべ一人考えたのだ。

戦いの始まりがこんなに皮肉つたらしいものならば、俺は俺のスタンスを貫き通すと。

いつもの馴染みの言葉から、始めようではないかと。

「 投影・開始！」  
トレス・オン

「ついに始めおつたか……」

明かり一つない、仄暗い部屋に響く年齢を感じさせる枯れ果てた声。その響きはどこまでも重い。まるで部屋中をさらに黒に染め上げるようだ。

声の主は、自分と同じ名を持つ者とある魔術師の戦いを、自らの一部を介して見守る。

それは肉親を気遣つてでも、興味からの行動でもない。ただ、ついに始まつた戦いを見届けんがための、その老人にとつての当たり前の行動であった。

「……つむ、一体どのようにして駒を進めていくか……それにしても不確定な要素が多すぎる」

彼の言つ不確定な要素、それは今までに戦おつとしている魔術師の存在。

それがどのような動きをするのか、それによつて自分の今後の選択は変わつてくる。

「……しかし、前回以上になんとも面白いことよ……」

誰に語るまでもなく、独り言のようだ。

その老人を知る者ならば、驚くであろうその所作から、彼が興奮を抑えきれずにはいるところとは明白であった。

確かにこれまでにないほどに、戦いに臨まんとする者たちは多彩な人材が揃つていた。

一流の血統を持つ、誇り高き魔術師。

その流れを汲みながらも、違つ色に染まりし少女。  
戦いに巻き込まれてしまつた、元暗殺者。

自らの望みを叶えんがために、生に執着する最早人とは呼べないモノ。

聖杯を奪取すべく、そしてその受け皿になるべく造り出された聖女。

監督役という皮を被りこの戦いの中で暗躍する、生まれながらの破綻者。

そして、この戦い最大のイレギュラー。

この老人が今総ての人物の素性を知らなくとも、いずれ総てが露見するだろう。戦局を見極め自らが勝利者となるために、老人はただひたすらに機会を窺い続ける。

カラーンと玄関の開く音が聞こえる。

自らの最大の駒。老人の現状の最高傑作とも言える少女の帰宅の音。

「アレの仕上がりも上々、あとはどの場面でワシジが舞台に立つか…」

開幕戦をその目で見ながら、呴ぐ。自らの出番を待つ子供のよつな嬉々とした表情を浮かべながら。

そう。これは老人自身も待ち望んだ戦いでもあったのだった。

interlude out

迫りくるは凶器の突貫。

おそらく普通の人間ならば突き刺されて殺される。  
おそらくかつての自分なら、致命傷を負わされる。  
そして、今の自分自身ならば……。

「 ッ 」

手に現したのは夫婦剣。馴染みの感触を確かめながら、俺は干将を横に薙ぐ。

刹那響き渡るは互いの凶器の爆ぜた音。それは俺と慎一、二人の戦いの合図を示すようにただ鳴り響く。

そうしてようやく視界には、その凶器を投擲したであろう人物が姿を現す。

そう。記憶のままに残る姿のまま、そのサーヴァント・ライダーは俺を威嚇するように姿を現した。

「 何してんだよライダー！！ なんで衛宮を殺せないんだよー！？」  
まるで子どもの喚き声ように声を荒げる慎一。

おそらく自分のサーヴァントが一撃でもつて、俺を殺してしまつと確信していたはずだ。しかし彼の予想に反し俺はサーヴァントの一撃を受け流し、未だに立ち続けている。それが慎一にとつては堪らなく許せないことだったのだろう。

「

「さあ！ 早く衛宮を殺してくれよライダー！ 君強いんだろ？  
なあ、早くしろよー！」

「

慎一の声に耳を傾けよつともせず、ただジッと俺を見つめるのはサーヴァント・ライダー。確かにその眼帯の下の瞳は、俺をギロリと睨みつけているであつ。彼女から感じられる殺氣は、それを容

易に連想させる。

しかし、俺もライダーに時間をやるほど余裕があるわけではなかった。

この場をどう逃げ切るか。そしてこの一人をどうすれば降すことが出来るのか……それを必死に考えながら、俺は夫婦剣を再度強く握りしめたのだった。

風の鳴る音、そして響き渡る鉄のぶつかり合ひの音。

どこか均整のとれた響きに、ひょっとすると、演舞でも踊っているのではないだろうかという錯覚をしてしまつほどに、俺の意識は高揚するばかりであった。

こんなにも軽やかに、そして力強く短剣を振るい続けるライダーの力量を今だからこそ理解出来る。

かつての俺では彼女の存在に恐怖し、『逃げよつ』としか思つていなかつた。ライダーの力についても何も見極めることができなかつた。

「でもな……！」

ライダーの動きに応えるよつて、俺は手にした夫婦剣で彼女の進攻を遮つていく。

横からの一閃ならばそれを受け流し、突きを返す。

縦からの強襲ならば、受け止めて動きを止める。

ライダーの一撃一動に反応しながら、俺は少しづつ確信していた。

“どうにか、サーヴァントとでも戦える”

「 愚かな」

ズクリ、何が身を引き裂く感触。先程までとは明らかにスピードを上げて繰り出される短剣。

ライダーはより速度を上げながら迫る。逆に俺は身を傷つけながら、  
防御に徹するしかない。

「ガツ！！ ッ ハア！！」

容赦のない身体を裂く痛み。それに気を留めず、掲げた剣を振り続ける。

いや、むしろ俺は振り払おうとしていたのだろう。自分の中に過つてしまつた思いを。

“サーヴァントには敵わない”と考えてしまつた自分自身を。

「フ……フハハハハハハ！！ いいよ、良いよライダー！ さつさと殺しちゃえ！」

嬉々とした声を上げながら、よりライダーを煽る慎一。  
ライダーはその声に応えることもせず、そして手を休めることなく俺への攻撃を続行していく。確かにつけ入れる隙はある。しかしそれをカバーして余りあるほどのスピードを彼女は有している。

「 最期です、マイガス魔術師」

感情のない声が頭上から降りかかる。

脳天に向け振り下ろされる切つ先。おそらく受け止めることが精一杯だろう。彼女自身も、これで詰みと考えたはず。

「 ッ！！」

だがそれは、“ライダーに対する攻防において” とこつこつに限  
定される。

手に持つた剣を左右に投げ放つ。

それはライダーからすれば何と愚かな行為と見て取れるかもしない無論、ライダーの短剣は迫りくる。だとしても、一番有効であろう手段は一つ。

「 まさか！？」

その声は短剣の肉を裂く音と共に響いた。肩口に突き刺さったそれを確認しながら、自分の為そうとしていたことが上手くいったことを確認する。

そう。わざわざ俺が得物を捨ててまでライダーの攻撃を受けたのは理由がある。

「ライダー！ 何してる？ 早く止めを！…………うわあー！」

『標的』自身もようやく気が付いたのだろう。弧を描きながらそれは徐々に『標的』へと近付く。

そう。慎一はろくに魔術も使えないはずの一般人と変わりない。もし対処法を持っていたとしても、気が動転しているあいつには使いこなすことは出来ないはずだ。

刹那、チイという舌打ちと共に、俺に止めを刺さんとしていた影が疾走を開始する。

「ひい つ！」

短い悲鳴が耳に届く。俺は身体を起こしながら、一気に肩に突き刺さった短剣を抜き去り、次の一手を撃たんと力を込める。

田の前で繰り広げられる光景は一つ。主を守るつと疾走する使い魔。あの速度ならば、ライダーが傷を負つたとしても慎一を無傷で救うことは可能だろう。

「トーレス　オング　投影・開始！」

ここで勝つ必要はない。むしろ一人で勝つことなど不可能だろう。

思考する。

何が最善なのかを。

造り出す。

この局面を開拓する最良のモノを。

俺が勝つべきは、目の前の敵ではない。

俺が勝つべきは一分、いや一秒前の自分自身。

より強い自分になるために、弱い自分を打ち倒すことなのだから！

目に映る総てがスローモーション。

両脇に剣の強襲を受けながらも、主を助け出すライダー。飛び散る赤。それは街灯に照らされながら、まるで宝石のように散りばめられていく。

「トリガー・オフ　投影装填」

静かに言葉を紡ぐ。

手に現したのは黒塗の刀。俺はそれに矢を番え、一気に撃ち出すと同時にその場から踵を返し走り出した。

完全に無防備な背中、撃ちとる可能性もあるだろ。だが敵はサーヴァント。簡単に殺すことは出来ない。

「 ッ

聞こえてきたのは痛みに耐える声。おそらく思惑通りに行つたのだろう。しかし俺はそれを目にすることもなく、一心に走り続けた。きつと……俺が逃げ切れることが、慎一に対する皮肉であると分かつていたから。

#### interlude

少年、間桐慎一は興奮していた。

自分の使い魔と、自分に何かと絡んでくる憎たらしい友人との戦いを目にし、何も感じなかつたと言えば嘘になる。

あれだけ大嫌いだつた男、衛宮士郎が自分の駒に傷つけられる様を見て、震えが止まらないほどに自分は興奮を隠しきれなかつたのだ。

しかし徐々に彼の頭に苛立ちが募つていった。

そう。自分が有した力は、士郎のような名の知られていない魔術師などに対抗できるほど弱いものではないはず。むしろ数秒で決着が付くであろうと予想していた慎一にとって、目の前で繰り広げられていた光景は、彼の集中を削ぐのに十分なものであったのだ。

「ライダー！ 何してる？ 早く止めを……うわあ……！」

声を荒げた瞬間に自分に飛来してくる白と黒の殺意。普段の間桐慎一なら避けられただろう、隙を見てライダーを援護できただろう。

しかし彼は戦いに身を投じることは、覚悟が足らなさすぎる。そして戦場に立つということは、自身も傷を負うということを全く理解してはいなかつたのだ。

「ひい  
！」

発した声とほぼ同時に移動していく自身の身体。

そして視界に飛び込んできたのは、自らの従者の姿と鮮血の雨。

「  
あ

ズスンと音をたてて背中から倒れこむ。呼吸が止まり、正常な思考は彼の頭から消え去る。ライダーの身体によつて視界はおおわれ周囲の事を何も目視することは出来ない。

いや、それ以前にそれすら氣にしていられないほどに混乱する慎一。初めて向けられた殺意、そして直面した明確な死のイメージを簡単に払拭できるほど、彼の精神力は強固なものではなかつた。むしろあまりに弱々しく幼いものだつた。

「……え、そうだ、衛宮は？」

よつやく慎一は我に返り、士郎が先程までいた場所に田を向ける。次の瞬間彼が田にしたのは走り去つていく士郎の後ろ姿。

逃げたのか。勝てないと分かったから逃げる」とを選んだのかと振るえる中で、口元を歪ませる慎一。しかしぬに田線を下に向けた瞬間、彼はそれが間違いであつたと気付かされる。

「 何してんだ！ 早く立てよライダー！！」

やつ。田に飛び込んできたのは両の脇腹に深く傷を負い、そして脇脛に矢を受けて倒れ伏す血らの従者の姿。

「 おまえ、何してんだよ？ 早く衛宮を追うんだ！？」

「 ……分かりました」

血らに覆いかぶさる使い魔を強引に退かせながら、声を荒げる慎一に一言だけ返答し、立ち上がるライダー。しかし彼女が士郎を追えないことなど、火を見るより明らか。幾ら彼女はサーヴァントとはいえ、受けた傷が簡単に癒えるなど、そういうことではない。

だがそれでもライダーは踵を返し、士郎の走り去ったあとを追つ。

その姿に慎一は満足げな表情を浮かべながら、もつと一度念を押すよう声をかけた。

「 いいか？ 絶対に仕留めろ！ そりゃないと、あいつが痛い目みるからね」

その声に、より苦悶の表情を浮かべながら、ライダーは振り返らずに走つていく。それは最早は、その場にいる仮初めの主に対するモノではなく、完全に本当の主を守らんがための懸命の行動であった。

彼女が走る度、赤々とした血がその場に落ちる。

それはまるで、彼女が確かにこの時冬木の地に現界していたことを現すように、くっきりとその跡を残していた。

#### interlude out

「 ハア、ハア ッツ！」

走る、呼吸が乱れる、足が縋れる。

ただ一心に一つの場所を目指して走り続ける。

そう。ライダーとの一戦でこれでもかと言うほどに思い知らされたのだ。俺自身、まだまだサーヴァントと討ち合つたのは戦力が足りないのだと。

だから走る。彼女を、俺がずっと会いたいと願っていた彼女を呼び出すために。

短剣を受けた腕が、肩が痛む。

血を流し過ぎた。その上にこの全力疾走。正直精も根も死き果てよ

うとこう状態にあった。

「それ、でもつー。」

俺は脚を動かし続けるしかなかつた。

慎一の性格からして、ライダーに俺の後を追わせるといふことは想像に容易い。だからこそあの時は慎一を狙うのではなく、ライダーの足を狙つて矢を射たのだ。出来る限りの時間を稼ぐために。

「……ッ！ ハア、ハア、ハア」

どれだけ時間がかかつただろう。普段なら大して時間がかからないはずの慣れた道をようやく走り切り、俺は衛宮邸の門をくぐり抜けて庭に出ることが出来た。

あと十数メートル、そこまでいけばどうにか事態を好転させられる。

しかしそんな希望、簡単に形になるわけがなかつた。

刹那、最早聞き慣れてしまつた風を切る音が耳に届く。

「ツ……ー。」

同時に熱くなつてく自身の左腕。何かに引っ張られていくような、何かに持ちあげられていくような感覚に見舞われる。

いや、腕に伝わる感触で理解出来る。目を凝らすとそこからは先程まで俺を傷つけていた短剣の切つ先。そしてそれを辿つた先、俺の目指す庭先の方に肩で息をしながらこりりを見据える一つの影。

「……さすがは、サーヴァントってことか？」

素直に感嘆の言葉を口にする。まさか先回りをされているとは考

えもしなかった。

しかしその影、ライダーは何も応えないままフラフラと近付いてくる。その様子から察するに、確実に俺の攻撃はダメージを与えることが出来たのだろう。彼女の姿は今にも消えてしまいそうなほどに危ういものだつた。

突き刺さつた短剣と鎖に自由を奪われた俺をジッと睨みつけながら、ライダーはゆっくり俺に歩み寄る。そして冷ややかな響きでこう囁いた。

「さあ……あとは、あつません」

それだけで分かる。どれだけライダーが俺を殺そうとしているかということを。眼帯に隠れる瞳の鋭さが感じられるほどに、彼女は躍起になつてそれを為そうとしているということを。鎖に繋がれた短剣を掲げられる。それは死を宣告するかのように、鈍い光を放つ。

しかし俺はその短剣を見据えながら、ポツリとライダーに言葉を投げかける。

「そうか、最期か……」  
「ええ、死になさい！」

挑発されるように、勢いを付けた切つ先が脳天目掛けて降り注ぐ。光に照らされ、剣の軌跡はこれでもかと言うほどに綺麗な線を描く。そしてガキンという音と共にそれは突き刺さり、鮮血が周囲に振りまかれる。

剣の軌跡、そして飛び散る鮮血だけを見ればそれは、あまりに美しい光景だつただろう。

「な、に 」

そこに差し込まれる無粋な音。口元は苦痛に耐えるように歪み、がくがくと膝が震える。

「ま、さか……！」

その言葉は二つの事柄を指し示していた。

一つは俺に突き刺さった短剣。

確かに振り下ろされたライダーのそれは、咄嗟に前に出した右腕に突き刺さり、その場に血の池を造っている。通常の人間ならば深々と突き刺さり、腕の機能総てを破壊していたであろう。しかし短剣は何かに阻まれたように右腕を突き通すことなく、切っ先が刺さった程度に過ぎなかつた。

そしてもう一つ、流された血は窮地に追いやられていた“俺だけ”的モノではなかつたということ。そう。俺の目の前に立つサーヴァント、ライダーも血を流していた。しかし腕などではなく腹部。彼女のそこから赤々と血に濡れた切っ先が顔を出していた。

それは式さんとの本気の戦いの時に使つたモノと同じ。ライダーの後方に一振りの剣を投影し、彼女が俺への止めの一撃を繰り出すと同時にそれを撃ち出した。

無論彼女がそれに気付くことは出来ても、傷を負つた身体では回避することはほぼ不可能に近いはず。それに賭け、俺はどうにかその場で得つる一番の結果を手にした。

「な、なんて……『タラメな！』

言葉と同様に苦悶に満ちた表情を浮かべるライダー。その手に持つ短剣に籠められていた力が弱まつたのを確認し、俺は彼女の拘束から抜け出し、俺は覚束ないながらも走り始めた。

しかし思つよつて呪が前に出ない。急ぐ心とは裏腹に、血を流し過ぎた自身の身体は最早動くことも拒否しているようだった。

「ま、まだっ！」

後方から投げつけられる声。

「ガツッ！」

その声とほぼ同時に腹部を掠める短剣の投擲。だがそれは俺を射抜くことは出来ず、俺の脇腹を抉るだけ。その場から動けないながらも、ライダーは未だに俺を殺すことを諦めてはいない。

しかし何度投擲しようと、確実に足を止めさせるには至らない。それほどまでに、ライダー自身も満身創痍の状態に陥っているのだろう。

しかし、それは俺の方も同じ事であった。

「あ」

ライダーからの執拗な攻撃、それは確実に俺の体力を奪う。数メートルの距離を残し、片膝をついて俺はその場にへたり込んでしまった。

もう動かない。

前に一步も進まない。

このまま、このまま殺されるしかない。

頭に浮かぶのはそんな弱々しい考え方。しかしそれらと共に、全く違つ考えも浮かんでいた。

「そう。俺は言葉にしたのではないか？」

もう決して自分の大事なものは落とさない。の人たちに、約束したのではなかつたのか。

「

もう声にはならなかつた。ただ一步、這いざるよつに前に進む。それ以外に意識をまわした瞬間、總てが終わつてしまつ。やう思えて仕方がなかつた。

「あ

また俺の脇を掠めていく短剣。その幾度目かの殺意を感じながらも前に進む。

そうだ……この身体の痛みは、俺が俺であるつとする証明なのだ。そして俺は何をしたいのか、何をするべきなのかを既に理解しているはずだ。

「ああ

力強く決して折れないように、俺は最後の一歩を踏み出す。傷付いても構わない、ただ一つの目的を果たすために。

始まりはすぐそこにある。  
ようやく俺は、その門に手をかけたのだ。



interlude

「止まれ……、止まれ！」

田の前の少年は私の言葉を意に介さず、ただ歩を進める。

もう何度、彼に対して殺意を放つただろう。  
何度彼に致命傷を負わせようとしただらう。

それすら思い出せないほどに、私は少年に対する殺意を、自らの得物を放ち続けた。

しかし、彼は止まろうとはしない。ただあと数メートルの距離をまるで這うように進む。はたからから見れば愚かな行為。しかし私はそれが、決して止まることのない神の行進のように感じられた。

「なにを、バカなことを……！」

あまりの悔しさに血を吐き出しながらも、私は大声をあげてしまう。

そう。私はサーヴァント、その成り立ちはどうであれ英靈なのだ。  
怒り、憎しみ、悲しみ、痛み、怯え……全ての負の感情を飲み込んできた。

その私が、たかが一介の魔術師に恐れを抱くなど、そんなことがあらわけがない。

しかし、事実田の前を進んでいく男は私を怯えさせる。

そして私の総てが語りかけてくるのだ。きっとこの男は、我が眞実の主の害を為す者になると。

だから殺さなくては……恐怖するよつも前に。

田の前から消さなくてはならない……主が傷つくとわかつていても。

「ア」

すつと血の氣が引いていく。動こうとするたびに、夥しい血が体の外に吐き出される。フラフラと意識を失うかといふところをどうにか繋ぎ止めていたもの、それは皮肉なことに先ほど受けた一撃の痛みだつた。腹部から生える劍の切つ先を目にし、私はよつやく正気を保つていられたのだ。

徐々に痛みに慣れていく身体。いや、これはむしろ身体がマヒしているということなのかもしれない。それすら、今の私にはありがたいものであった。

「なんて、無様な姿なのでしょうか」

立ち上がる最中、口にしたのは田分への嘲り。

これでは偽りの主の愚行をバカにすることは出来ない。無様な姿を見せながらも、どうにか目的を果たそうと、足掻いてでも生きようとする氣概は、きっと彼も私も同じなのだから。

ようやく立ち上がつたのと時を同じくして、魔術師は庭に建てられた蔵の中に足を踏み入れようとしていた。

「 ついに万策尽きたか」

あそこまで傷ついた身体で、まさか籠城を選ぶなど…失策と呼ばれます  
になんと言つだらう。

「これで終わりだ。早く、彼女の……サクラの側に帰りつ  
振るえる手で再び短剣を手繰りよせ、止めを刺さんとゆっくりと  
ではあるが、その足を進める。

あと数秒もしないうちに短剣は再び魔術師の血で染まり、魔術師の  
叫び声があがるだろう……私はそう信じて疑わなかった。  
しかしその余裕と油断が、あの蔵から感じる魔力の奔流に気付く  
のを、一瞬だけ遅らせることになった。

「ハアアアアアアアア！」

聞こえたのはまったく聞き覚えのない、少女の猛々しい怒号。そ  
れに気がついた刹那、何もかもが消え去った。

最後に私が目にしたモノ。

それは血飛沫を上げる自分自身の身体、そしてそれとは対照的な、  
美しい……あまりに勇敢な色を湛えた少女の瞳の色だった。

interlude out

「ハ　　ハア、ハア」

身体に走る痛みに耐えながら、田の前にそびえる重々しい扉を開け、ようやくその中へと転がり込む。

ひんやりとした蔵の中には月明りが差し込み、その静寂さをたたえていた。そこに俺という異物が混入されたことによって、それは全く違うモノへとその色を変貌していく。

静寂が蒼だとするならば、それは殺戮の色。毒々しそうなほど赤色に。

そんなことを頭では考えていたが、身体の方は悲鳴を上げる一方であった。

数多の血を吐き出してきた身体は、もつ完全に動くことを拒否している。

視界も混濁し、意識も闇に落ちてしまつ寸前まで差し掛かっていた。

「　　は　　」

右手の甲に疼きを感じた。いつか感じたことのある様な、懐かしい感覚。

「　　そう、だ……」

投げ出していた身体を仰向けにし、天井を見据える。いつも見ている、慣れ親しんだ光景がそこにはあった。

そつして思い出す。自分がここに来た理由を、何をすべきかを。

「トレス  
投影オブ  
開始」

力なく手の平を掲げ、口にしたのはお決まりの言葉。

多分今の状態では、どんな詠唱も簡単には口に出来ないだろう。

だからこれでいい。俺の言葉で……俺にしか出来ないやり方で！

思ひ。それは彼女と俺を繋ぐ唯一のモノ。

描く。俺の身に宿るモノ、ならば、難しいことではない。造り出す。それこそが鍵……本当の始まりの扉を開ける鍵。そして、この手に現す。自らの幻想を結び、形を成す。

「  
投影、装填」  
トッカー・オフ

ここに形を為すのは、かつての俺では再現できなかつたモノ。今の俺であるからこそ造り出すことのできる……彼女との、これは彼女との繋がりの印なのだ。

かつて、彼女の姿はどんどん自分の中から消え去つていつて、もう思い出すことはできなくなつてしまつた。それはきっと、彼女自身が俺の中にある信念を支えてくれていたからだろう。だから俺の信念が弱くなればなるほどに、彼女の面影は俺の中から消えていつた。

しかし今こいつして、俺は彼女との繋がりをこの手に現すことが出来る。

それは俺の中に、ちゃんと彼女が残つてゐるという証明。この生涯も、この俺自身ですら、彼女のために在る。そう思えてしまうんだ。そしてこんなに血に濡れた手でも、もつて一度彼女と手をとり合つてが出来るのかもしれない。

いや。きっと出来る。これまで強情なまでに信じた理想を求めて続けてきた『HIMAYASHIRO』なら、出来ないはずがない。決して諦めることはない。

黄金に輝くそれを目にし、彼女を思つた。

# 理想郷

彼女こそ、ずっと追い求めていたあの『全て遠き理想郷』なのだから。

2

小さな、声にならない声で呴く。

「……………てくれ  
……………い、来いよー」

再び、今度ははつきりと言葉にする。

声同様に、手にした鞘を力強く天にかざす。

擦れる声で、しかし渾身の力を込め、俺は彼女の名を叫ぶ。

「ゴオと音をたてながら、風が吹き抜けていく。

それと同時に大きな影が一つ俺を覆つたと思った刹那、一気にその場から姿を消していった。

「ハアアアアアアアアア！」

聞き覚えのある声が響く。そしてザンと一閃、何かを斬り伏せた  
ような物音。

何が起こったのだろうか。ぼやける田を凝らしながら、影の動いた  
先を見つめる。

また強い風が吹いた。

目に入ってきたのは風に揺れる金砂の髪。  
和風の蔵の中にあって、それはあまりに不釣り合いなモノ……だか  
らだろうか、周囲はぼやけたままなのに、そこに佇む少女の姿だけ  
はハッキリとしていた。

そこには、確かにいた。

消えゆくサーヴァントを田の前に、ただ悠然と構える一人の少女  
の姿。

勇敢に見えるその騎士姿は、土蔵に差し込む月明りによつて、そ  
れをさらに際立させていた。

「 あ 」

何を言えばいいのだろう。ぼんやりとする意識の中で、俺はそれ  
だけを考えていた。

いつだつたる……確かに前のこんな光景を田にして、俺は言葉を  
失つてしまった。

きっと、きっとそれだけ目の前の少女が綺麗過ぎたんだろう。今  
ように何も口にできないまま、俺はその始まりの言葉を聞くことに  
なる。

「失礼。緊急事態と判断し、独断で行動してしまいました」

凛とした響きが投げかけられる。

それはきっと、俺がずっと待ち望んでいた響き。俺の一番欲しかつたものだ。

そして彼女は呟く。ずっと変わらない、曇りのない瞳を俺に見せながら。

「サーヴァント・セイバー、召喚に従い参上した」

「問おう、貴方が、私のマスターか」

## 始まる日常

### interlude

“（）は一体、何処なのだろうか……”

歩を進めるのは荒野。どこにも拠り所のない、どうしようもなく一人を強いられる場所。熱砂の吹きすさぶこの地を、その終着点を目指し歩き続いている。

しかしどんなに自分の中の記憶を手繕り寄せていても、その光景は自分のモノではない。

そう。自分は孤独ではあつたけれど、常に一人ではなかつた。

共に戦う友がいた。

憎み合つても、同じ志を持つ人がいた。

そして、最期まで付き従つてくれた者がいた。

だからこんなどうしようもない一人の世界、私のモノではあるはずがない。

“あれ、は？”

目を疑つた。数多の戦場を駆け抜けてきた自分だからこそ言える、こんな異様な光景を私は目にしたことがない。

“剣の……葬列？”

それは墓標のように、誰かが生き抜いてきた証のよつこにじに突き立つ。

しかしそれは墓標と言つには、重要な何かを感じる「」ことが出来ない。それを薄らとながらも、私は肌を感じていた。

そう。 」の手が、この足が、この身体が……それを告げているのだ。

それは、突き立つ剣たちからは全く“熱”が感じられないこと。グルリと周囲を見渡しただけでも、名だたる名剣、彼の英雄が所有していたモノすらそこにはあつた。しかしそのどれからも、“熱”つまり所有者の想いか感じ取れなかつた。

通常、宝具にまで昇格した武具であれば、それ特有の“熱”を持つていることは想像に容易い。しかし、そこに突き立つ剣戟からはそれが伝わつてこなかつた。

そうして私は理解したのだ。 」に真実のモノなどない。 」に在るのは総て似せて造られたものなのだと。

それ故にここに本当の想いなどなく、

それ故に本物も思いを抱くことが出来ない。

“ そんなこと 悲しそうではないですか ”

こんなにも一人の世界で、本物には決してなることの出来ないこの世界で、一体何を求めているというのだろうか。私にはそれが分からなかつた。

ただ一つ、分かることがあるとするならば……  
どうしようもなく、 」の道を歩く者が不器用なのだということだけだつた。

起きて最初に目にしたモノ。それは最早見慣れてしまつた自室の風景。

「……俺、どうしたんだ？」

理解の追いつかないまま、寝ぼけ眼で俺は身体を起こす。身体に感じたのは、先の攻防で受けた切り傷の痛みだつた。しかしそれらはきちんと包帯などによつて治療を受けている。

「ああ、そうだ……」

思い出したのは、意識を閉ざす直前に目にした風景。  
あまりに懐かしく、そして俺がずっと求め続けたモノだつた。  
ぼおつと柔らかい光の差し込む襖の方を眺めていると、浮かんできたのは自らの呼び出した剣の英靈の事ではなく、全く別の少女の事だつた。

「これから、どうするつもりなんだよ……」

そう、それは桜についてだ。心のどこかで、これ以上桜を聖杯戦争に関わらせないですむと安心感を覚える自分と、彼女に付き従つていた使い魔を直接ではないにしてもてにかけてしまつたこと。  
この二つが俺のなかで頭をもたげていた。否、それは考えなくとも良いはずだ。だって俺は彼女に出会うためだけに、この戦いに身を投じた。だからもう桜の事を考える必要なんてないはずなのに、どうしてもそれが心のどこかで引っかかつっていた。

「すいません、少しよろしいでしょうか？」

物思いにふけっていた中、廊下に面した障子の向こうから遠慮がちに投げかけられる声。

「 ああ、すまない。入ってくれ」

俺は居住まいを正しながら、声の主の姿を視界に入れ。障子を開けて入ってきたのは、その凜とした声に相応しい凜々しい少女、セイバーの姿だった。

その出で立ちは最初に彼女を召喚した時と変わりず、甲冑に身を包んだモノとなつてゐる。その恰好のままで窮屈ではないのだろうか。

「マスター、お身体の方は問題ありませんか?」

「ああ、問題ないさ。すまなかつたな、君が運んでくれたのか?」

淡々と言葉を投げかけるセイバー。俺の方も心を落ちつけながら、努めて冷静に言葉を返す。

そんな俺の姿に何を思ったのだろう、セイバーは俺のすぐ側に座り、じつと俺の顔を見つめた。

「な、なんだ……なんかおかしいか?」

「いえ、そうではないのです。少し……いえ、気にしないでください

い

問題はないよつて安心しましたと付け足しながら、彼女は俺を正面に見据え、シッカリとした口調で話し始めた。

「 昨夜は緊急事態と判断し迫っていた敵、おやらいですがライダーでしょう。あれを撃退しました」

ハッキリと事実のみを告げるセイバー。

あの何かを斬り捨てる音は、ライダーに止めを刺した音だったのかと思いつ返す。あの場面ではセイバーを召喚に踏み切るということは、一か八かの賭けでしかなかつたが、どうにか最良の結果を手繰り寄せることが出来たことを幸運に感じた。

「……あの後、ライダーのマスターは姿を現さなかつたのか？」  
「ええ。貴方をこの部屋に運び、周囲を警戒していましたが、それらしき人物は姿を現しませんでした」

なるほど。ということは、慎一はライダーの敗退を知りながらも行動を起しかなかつたことになる。それならばきっと慎一がこれ以上脅威になることは決してないはずだ。

セイバーの回答に俺はそう確信を持つて頷く。  
その仕草に、彼女は少し感心したと言わんばかりに目を見開いていた。

「……よし、ならもうライダーの件についてはこれでいいとして

「……  
「はい、これから戦いについてですね」

く。  
待つていましたと言わんばかりに、セイバーは凜々しい表情で呟く。  
うん。まあ確かにその通りではあるのだが、それより先に優先したことがあった。

「いや、違うよ。いつまでも“マスター”だなんて呼ばれていても  
気味が悪いからだ。まずは自己紹介だ」

努めて笑顔を繕いながら、隣に座すセイバーに声をかける。  
その言葉に恥ずかしそうに一度は顔を背けたが、すぐに表情を戻し  
彼女は咳払いをしていつ返してきた。

「すいません、少しばかり気が逸っていました」

「いや、いいよ。俺は土郎。衛宮士郎だ。よろしくな、セイバー」

包帯を巻かれた手を差し出す。それに応えるように彼女も手を出し、固く握手を交わした。何事もない、初対面の人物に対するきちんとした挨拶。

しかし実際のところはどうだったのだ。バクバクと音をたてる心音を俺は隠すことは出来ているだろうか？  
シッカリと、彼女の顔を見ることが出来ているだろうか？

それだけ、彼女を目の前にして緊張していた。  
握られた手の痛みを感じる暇もないほどに、俺はセイバーとの再会が嬉しくて堪らなかつたのだ。

「ではマスター、これからについてなのですが」

先程までの少し碎けたものからは一変、セイバーの表情は厳しいものへと戻つていた。

握りこむ拳に自然と力が入つていく。言わずもがな、俺たちを包む空気は張り詰めたモノに変質していく。

「ああ、そうだな。あくでもマスターって呼ぶのはやつぱりやめて

くられないか？なんだかしつくつこなくてや」

その空気を払拭するように、苦笑いを浮かべながらセイバーにつ提案をする。

やはり普通に接している中で“マスター”と呼ばれていては、どうにもおかしな気分になってしまつ。

「……ではシロウと呼ばせていただきます。確かにこの響きの方が私にとっては好ましいやつだ」

いつか聴いた台詞、それとは少し違つ言葉が俺に返つてくる。それに少し笑みを浮かべてしまつ。セイバーはそんな俺の様子に小首を傾げながら、納得のいかなそうな表情をしていた。

しかし待ち望んでいた彼女に名を呼んでもらえるだけで、俺は嬉しさを隠せないほどに舞い上がつてしまつっていたのだ。

だからだろうか？

「それで、セイバー。今後の話だけど

こんな浮ついた気持ちだつたからだらつ。

「ええ、この序盤に一騎のサーヴァントを撃退できたことは

騒がしこ声と足音に普段ならびすぐに気が付くはずなのに。

「ヤツホーー今日もお姉ちゃんが来ましたよーーーーって、その娘さんはどなた？」

このいつも元気のあり余つた、姦しい虎に気が付かなかつたのは、きっとそれが原因なんだ。

「…………で、どうしたことか説明してもらいましょうか。士郎？」  
「ああ、この人は親父の古い知り合いの娘さんだよ」

突然俺の部屋に押し入ってきた藤ねえを、どうにか居間まで誘導すると彼女はすぐに疑問をぶつけてきた。

確かにごく普通の家に見知らぬ少女、それも甲冑を身に纏った人物がいれば驚くことも無理はないだろう。ただ彼女は俺の腕の裾から見えるはずの包帯には関心がないらしく、全くのノータッチだった。何故だらうか、ホッとすると同時にどこか悲しいような……。

「切嗣さんの？いや、でも……あ、あり得るかも」

藤ねえは天井を見上げながら、苦笑いを浮かべる。きっと親父の事を思い出していたのだろう、表情から読み取れたのは悲哀の入り混じったものだった。

「それでだ、しばらくの間日本に滞在することになつて、親父を頼つてきてくれたわけなんだ……だからしばらく下宿してもらつよ」

「そつか、じゃあしようがないよねえ」

藤ねえは、うんうんと納得したように首を縦に振る。

このまま何事もなく、この話が終わってくれることを望んでいた俺であったのだが……。

「ん？ 居てもうらう？」

パタリと動きを止め、先程までとは全く違う表情を見せる。

その表情の変化にヤバいと感じつつも、先日の戦闘で怪我を負つていた身体はそう簡単に動いてはくれなかつた。

次の瞬間、まるで紙細工のよつとつと浮き上がる瞬間の「フル。

上に何も乗せておかなくて良かったと胸をなで下ろすが、今にも爆発しそうなほどフルブルブルと身体を震わせるのは、言わずもがな冬木の虎。

「なあにこいつとるかあーーー！」のバカー！」

ドンとテーブルの足がついたと同時に、甲高い声が部屋中に響き渡る。

「うん、分かるよ。切嗣さんを頼つて見知らぬ土地に来たつて言うのは理解できた、お姉ちゃんそこまで頭悪くないしー。でもね、若い男女が一つ屋根の下で同棲だなんて……そんなのは大人として、いえお姉ちゃんとして許可する」とはできません！　ええ出来ませんとも！！」

「いや、そんなに気にする」とでもないだろ？　この家には藤ねえや桜だつて出入りするし……」

「当然でしょー！　私は家族、桜ねえさんは後輩。じゃあその子……えっと、セイバーさんだけ。この子は何？　一体何のためにここに居るのよー？」

捲し立てるよつとつと追求をやめよつとしない藤ねえ。確かにこきなり過ぎたかと反省しながら、俺は頭をかきながら次の言葉を探す。しかし虎はあつさりと標的を俺からセイバーへと切り替え、むらなる追求を開始していた。

まあ俺の記憶が正しければ、この騒動は彼女の一言であつさり終わるはずなのだが。

「あなたは何をしてきたのよ？　何で切嗣さんを頼つてきたの？」

「それは、私が切嗣の言葉に従つたに過ぎないからです。そして世話になる間は、シロウを守るよつにと言われています」

ピタリと追求が止まる。

無理もない。ここまでハッキリとした言葉、そしてそれを裏付けるような真撃な瞳を見せられては、それを嘘と感じる者はいないだろう。

藤ねえはセイバーの態度に少しだらぎながらも表情は強気のまま、目線だけは逸らさなかつた。

「……なるほど、そつなのね」

そしてセイバーの言葉に何を感じ取つたのだろうか、藤ねえはスッと立ち上がり正面からセイバーを見据えていた。

どこか苛立ちを滲ませた瞳から分かるのは、まだ納得していainんだぞといつそんな負けず嫌いな藤ねえらしい感情。

「いいわー！じやあ腕ま……」

「あ、ちなみにだけどさー」

次に藤ねえの考え方とは分かる。

俺は一人の間に割つて入りながら、努めて笑顔で藤ねえにこう返した。

「ちなみに、セイバーは俺より強いよ？ 昨日もコテンパンにされたし

「ふーん、どれだけ強くたつて え？ 士郎より強いの」

俺の言葉にまるで固まつたように、動きを止めてしまう藤ねえ。確かに彼女は強い。冬木では敵なしと言われていたほどの使い手だし、俺だってそれは分かっているし、小学生のころは俺も太刀打ち

できなかつた。

だがかつてのまだしも、式さんには稽古を付けてもらつてシッカリ身体を鍛えている俺が、藤ねえに負ける道理があらうはずもない。事実、最近の手合せでは俺の方が大きく勝ち越している。

その俺自身が、セイバーを強いと自信をもつて口にするのだ。その言葉の意味は、もちろん藤ねえにも理解は出来るだろ。

「……ほんとうに？」

藤ねえのその間にただ首を縦に振る。何を言つよりも沈黙で答えるのが、きっと今の彼女にとっては一番納得できるものだらう。藤ねえは俺の動きを確認すると、深いため息をついてその場に座り込んだ。

そして苦笑いを浮かべてセイバーに向き直り、じつ眩いた。

「ん……まあ今回は納得しましょ。見知らぬ土地で、ほっぽり出すわけにもいかないし」

教育者として、それはやつてはいけないことのよと付け足しながら、藤ねえはセイバーに手を差し出していた。

セイバー自身も藤ねえは、全くの書のない人物だと理解したのだろう。彼女も手を差し出して、シックカリと握手を交わしていた。

俺はと言えば、これでどうにか穩便に事が進みそうだと胸をなで下ろしていたのだが……まあそんなに上手くいくはずがないというのが道理なんだろう。

「で、それでもその恰好はいだけないわね。何? コスプレ? ジトツとセイバーの姿を見ながら呟く藤ねえ。確かに、家の中で不釣り合いな恰好をしているのだ。突つ込まれるのも無理はない。

「いえ、この恰好が私の普段着で……」

「いけません！ 女の子なんだから、もっと可愛い服着なきや！」

！ 今から私の家に行きましょうーー とりあえず着替えになるもの出してあげるから

「うーん」

甲冑姿のセイバーをジッと睨みつけながら虎が吠える。その後は言わずもがな、セイバーは藤ねえに連行されてしまった。

「まあ……物騒なことになるよりは、随分マシだろ」

そんな独り言を呴きながら、俺は痛む身体に鞭を打ちながら台所へと向かう。

きっとこの後セイバーの小言を聞かれる羽目になるのだろうと覚悟しつつ、俺は一人朝食の準備に取り掛かるのだった。

## 始まる口算（後書き）

すこません、ちょっとページを編集していたら、色々表示がおかしくなつてしまい、更新しなおしました。  
読んでくださっている方には本当に申し訳ありません。今後ともよろしくお願いします。

結局藤ねえとセイバーが衛宮邸に戻ってきたのは、それから一時間後のことだつた。

俺はとこりとサッサと朝食の支度を終え、今は朝の一コース番組を眺めていた。そこから流れてくるのは、やはり不可解な事故の数々。これら全ての事故の原因が聖杯戦争に在るということを理解しているだけに、正直俺は真っ直ぐにその事件を直視することが出来なかつた。

それら全てが、俺がこれまで選択してきたことに起因するといふことを、心のどこかで否定したかつたからだろ？。思わず畳の上に身体を投げ出しながら、何の弁明の余地も持たない自分自身に、俺は不甲斐なさを感じていた。

「つまーい士郎ーー！ 朝ご飯は出来たかなあ？」

ドタドタと足音をたてながら声の主、藤ねえは声をあげている。その声からは機嫌の良い様子を感じ取ることが出来た。おそれく……いや確實と言つてもいいほどに、セイバーの事を気に入ってくれたのだろうと胸をなでおろしながら、立ち上がり台所に向かいながらこう返した。

「あー、ただ今日は桜が来てないし俺はかなり身体が辛かつたから、簡単なものになつちまつたぞーー！」

「えーそれはショック！ お姉ちゃんショックーー！」

戸の開く音と共に居間にに入った藤ねえは自らの指定席に腰かけ、ブーと顔を膨らましながら俺に抗議の視線を投げかけている。その

視線に田もくれず、俺は淡々と朝食をテーブルの上に並べていく。

そう。今日、桜は衛宮邸に姿を見せていない。

昨日のことを鑑みるに、確実に間桐の家で何かがあったことは明白だろう。ただそれを俺がどうにか出来るとは思えない。俺は桜の『この聖杯戦争に関わる要因』を断ち切った。だからこそ俺と彼女がこれ以上関わりを持てない。せつかく彼女が手に入れるかもしれない平穏な時間を、俺が壊すことなど出来るはずもないのだ。

「じゃあ、もう朝ご飯食べちゃおうセイバーちゃん、何時までそこにいるの？おかげ冷めちゃうよー」

呑気な声が居間に響く。藤ねえは居間の外に田を向けながら、セイバーを手招きしていた。声を掛けられたセイバーはとつと、恥ずかしそうに返事をしながら、躊躇いがちに居間の中に入ってきた。

「えっと、藤ねえ……」

「んー。どしたの、士郎？」

「いくらなんでもお揃いは、嫌じゃない？」

真っ赤な顔をして入ってきたセイバーの姿を見て、ズコッと力が抜けてしまう。今彼女が来ている服は藤ねえの良く着ている虎縞模様の服。何というか……うん、何とも言えない。

「ううう、しょうがないじゃなーーーパンツスタイルでコーデしようと思つてたのに……」

何故か瞳には涙を浮かべながら、しかし饒舌に話す藤ねえ。

「私の持つてゐるのじゃ、ウエストあまり過ぎやうのよーー！ き

ー何て羨ましい子なのーー！」

ガオーとさながら虎のような雄叫びをあげる。

なんとなく予想はしていたのだが、それでもいきなり大声を出され

るところのは、慣れたものではない。

ミミミと涙を見せる藤ねえをとりあえず無視しながら、手早く朝食の配膳を終え居間の入り口で立っていたセイバーに田を向ける。

「まあ、可愛いと思つや」

「しかし、これは機能性に優れません」

ピシヤっと俺の言葉に返答するセイバー。しかしその表情は言葉とは裏腹に柔らかくものだった。

「確かに……褒められたってことは、素直に嬉しいことはあります」

彼女はそう呟きながら、ほのかに頬を赤く染める。その仕草に少しどキリとさせられたが、今はそんなことを気にとめている場合でもないだろう。

「さて……じゃあ冷めないついでに食べるとか」

自分の定位置に腰を降ろし、静かに手を合わせ、こつものよつじのこてんにする。せめて、この時間だけはいつまでもおつこ廻りしたいのだと心の中で叫びながら。

「いいーただきまーす！」

「いただきまーす」

「いただきまーす……」

「じゃあお姉ちゃんは出かけてくるわけなのだが……今田はどうするのかね？」

ズズつと熱い番茶をすすりながら、藤ねえはどこか神妙な顔つき

をしながら呟く。

彼女の言葉に俺は首をかしげると、虎は俺の手首を指しながら、こう呟えた。

「理由は聞かないけどさー。そーんな怪我してるのに、学校に行けると思ってる！？ まあお姉ちゃんのよしみで、今日くらいは休ませてやつてもいいんだぜ」

フフンと得意気に鼻を鳴らす藤ねえ。意外なことに、しつかり俺の様子も見てくれていたんだと少しばかり感心してしまった。実際のところ、藤ねえの言葉に甘えたい気持ちももちろんあったのだが、そういうわけにもいかない事情がある。

「ああ、問題ないかな。学校行つてみて、もし無理そつなら早退するよ」

俺はそつ返しながら制服に着替えるため、一路自室に戻りうと廊下に出た。

今からは藤ねえの“無理しちゃダメだからね”という声が聞こえてくる。その言葉に相槌をうつ、俺は自室に向かつて歩を進める。その反応があとに召さなかつたのか、不満の声が居間から聞こえてきたりもしたが、この際気にしないことにしよう。それにそろそろ“彼女”が我慢の限界を超える頃だつ。

「待つてくださいシロウ！ お話があります」

案の定予想通りに声をかけてきたのは、我が騎士王様。彼女は不機嫌さを隠そつとせず俺に詰め寄つて口にじつた。

「シロウ！ 貴方は自覚が足りないのでないですか！？」

「ん、何が？」

俺の回答に毒氣を抜かれたのか、ポカンとした表情を見せるセイ

バー。

しかし即座に厳しい表情に戻り、彼女らしいまつすぐな言葉で言い放つ。

「何……がではない！ 貴方にはマスターとしての自覚がないのですか？」

その言葉はもつともだった。

聖杯戦争に関わっているマスターが、それと関係ない者を身近に置いている。

それに加えて、今から外出するような口ぶりを見せる俺に、さすがのセイバーも我慢ならなかつたのだろう。

「言いたいことは分かるよ……」この状態で外に出るのは危険だつてことだらう？」

「そうです！ 今は外出を控え、今は療養に努めるべきなのです！」セイバーは俺の腕を掴みながら、矢継ぎ早に言葉を放ち続けた。その手の力強さから、その鋭い語調から、俺を心配してくれていることに嘘偽りはないだらう。

しかし俺は彼女の方に振り返り、こう呟いた。セイバーがこの言葉に反論出来ないことを知りながら。

「セイバー、お前が靈体化してついてくれれば問題ない話だらう」「そつ、それは……」

想定通り、俺の言葉に反論することの出来ないセイバー。無理もない。これは完全に俺の意地悪なのだから。

自分自身でも、既に聖杯戦争が始まっている現状を考えれば、療養に努めることが一番であることくらいは分かっている。しかしこの“俺たちがライダーを打倒したという事実”を上手く利用することが出来るのは、現状を除いて他にはないだらう。

だからこの先を上手く立ち回るために、俺は会いに行かなければならぬのだ。あの魔術師にと、あのサーヴァントに。

「まあ今日はどうしてもやらないといけないことがあるんだ。明日からの外出は控えるよ」

困惑気味のセイバーの表情を見ながら彼女にそう告げ、掴まれた腕を優しく取り払いながら自室へと戻る。彼女に悪いことをしたと思いつながらも、俺は制服に身を包むのだった。

「シロウ、何かあればすぐ私を呼んでください」

藤ねえが出勤した後、俺はセイバーに玄関先まで見送られていた。やはり俺の選択を快く思っていないのだろう、終始不機嫌な表情を見せる彼女をどうすればいいか分からぬ。とりあえずこれ以上は遅刻の危険もあるので、俺はもう一度セイバーを見つめ、こう呟いた。

「帰つたらゆづくつ話をしよう。君のこと、もっと教えてくれ

そして俺はすぐさま踵を返し、学校への道を走り始めた。  
特に他意はないのに、自分でも分かるほどに頬が熱い。大した一言ではないのに、彼女を目の前にすると動悸が止まらない。

本当に俺は、彼女にやられてしまっているんだ。きっと舞い上がっているのは自分だけだと理解しつつも、この気持ちを抑えることが俺には出来ない。

このズキズキと痛む昨晚の傷がなければ、きっと俺は正常な思考を……冷静な気持ちを完全に失つていただろう。腕から覗く真白の包帯を目にしながら足を動かし続けた。

いつもの交差点を越え坂に差し掛かった頃、ちらほらと視界に入ってくる通学途中の生徒たち。その姿にもう遅刻の心配はないだろうと、俺は走るスピードを緩める。さすがにこの時間帯ともなるとよく話す知り合いの姿はない。

「まあ、一成くらいしか居ないんだけどな……」

そんな独り言を呟いたからだろうか。坂の中腹に差し掛かった頃、それは突然俺に襲いかかってきた。

「 ッ 」

それは身を刺すような殺意。  
ここまで露骨にそれをぶつけてくる人物など、俺の知る中では一人しかいない。

「あら、今日は遅い登校なのね」  
その響きはぶつけられる感情とは裏腹に、あまりに温和で心地良い。

「ああ、少し色々あつてな」

ゆつくりと振り返りながらその人物の、彼女の表情を見る。そこには殺気などは感じさせない、見惚れる笑顔があつた。互いに見つめ合う形で立ち止まる俺たち。生徒たちが登校する中、それはあまりにおかしな光景であった。

彼女、遠坂凜は風に髪をなびかせながら、俺をジッと見つめ、向けてくる殺意を更に際立せ、こう俺に告げた。

「そうなの。まあ良いわ。放課後、お時間いただけるかしら？」

「分かつたよ、遠坂。俺も丁度話があつたんだ」

俺の返答に遠坂は笑顔でよろしくと呟き、羽織った赤いコートを翻しながら俺の脇を抜けて行つた。その颯爽とした歩みを見送りながら

ら、俺は緊張に高まっていた胸をなでおろす。

かつての主にこのような、敵意に似た感情を抱くのは、正直など  
こういうものではない。出来るなら衝突もなく、何とか穩便に事を  
済ませたいものだ。そう考えながら、俺は再び足を動かし始めた。

そんなこと、出来るはずもないと頭では理解していたのに。

夕暮れが世界を包む。

毎日見ている光景のはずなのに、どこか初めて見るような感覚に襲われるそれを、俺はどう言葉にすればいいのか分からなかつた。オレンジに染まる教室の中、俺と少女は向かい合う形で立つ。ただ田の前に佇む少女はきっと、俺のどんな言葉も受け付けることはないだひつ。

「さて、衛西くん。私が何を言いたいか理解してゐる?」

まるで挑発するかのように発せられた声に、正面から受け止めゆつくりとした響きで言葉を返した。

「すまないな。正直遠坂が何を言いたいのか、俺には分からないよ

その言葉に気分を害したのか、遠坂の表情は急速に険しいものへと変わる。自分が意図してそうさせただけに、これからひつなるのか慎重にならざるを得ない。

しかしさすがとつて一言に反する。その雰囲気はまさに一流の魔術師と言つても過言ではないほどのものを感じさせる。手のひらに嫌な汗の感触が伝つ。

「……令呪も隠さず外出、しかもサーヴァントも連れていな。」  
「まだ言えれば分かるかしりつ。」

やうだ、普通ならやうに決まつてゐる。これではまるで、殺して下さないと公言してゐるのと変わらない。しかしがつてのよつにただの猪突猛進な自分ではない。

「やう思つのは当然だらうな。ただな……」

「なによ、一体？」

スツと息を吸い込み、同時に自分の中に在る撃鉄を起こす。  
昨夜の戦いで負つた傷も、もはや関係はない。今はただ、明確な“差”を見せ付けなくてはならない。

「遠坂、お前に俺が倒せるとは到底思えないがな」

刹那、顔の横を掠めて行く黒の軌跡。

それはさながら弾丸のように、瞬きの間に俺の後方の壁にその後を残していた。

やはりその威力、速度、どの点から見てもやはり遠坂は一流だ。しかし、それでも付け入る隙はある。

「どう！ これでもまだそんな口を叩けるのかしら…？」

不敵に笑いながら彼女は声を荒げる。隙があるとすればこれだ。

「それだよ  
「…………！」

再び手を掲げ、ガンドを放とうとする遠坂。重々しい音をたてながら打ち抜かれたそれは、俺を捉えることなく、再度壁へとめり込む。おそらく撃つた本人は想像もしていなかつただろう。自身の二撃目が避けられるなどとは。

彼女からの強襲を避け、一気に詰め寄りながらこう呟く。手の平には馴染みの一対、莫耶を手にしながら。

「詰めも状況把握も甘い。それがお前の欠点だよ、遠坂」

静かに、ハツキリと事実を口にする。遠坂も一般的に魔術師戦うだけならば問題はない。しかしどれだけ魔術の練度が高くとも、どれだけ強大な魔術を行使出来ようとも、そう簡単に埋めることの出来ないものがある。

それは『実戦経験』。俺と遠坂では、その差があまりに広い。

だから相手の力量を読み違え、そして有効的な攻撃をすることもできない。遠坂が少しでも戦い慣れしていれば、こんな状況にはきっとならなかつただろう。

「つ！ アンタ、それって！？」

遠坂は無力さに顔を歪ませながらも、その状況を打破するために俺を見据える。そして俺の得物を手にした時、その表情は先程までとは違う、驚き懼いたものになつていた。

「その剣……なんで」

「とにかく、俺から話したいのは一つだけだ」

彼女の声に耳を傾けず、俺は話し始めた。

「前にも言つたがな、俺には聖杯は必要ない。だから争いに加担するつもりなんてないんだ」

「じゃあ、なんでマスターになんてなつたのよ」

「“マスターになる”ことが目的だつただけだ

「何それ！ 訳が分からぬわ！！」

遠坂はキッと俺を睨みつける。微かに震える彼女の手から、苛立ちを必死に堪えようとしていることは明白。確かにこんな言い回しをすれば、彼女を怒らせることがくらい分かつていた。

しかし彼女にしつかりイメージさせなくてはならなかつたのだ。

“自分一人では、勝つことはできない”と。

そう思わせればヤツが出てくる。間違いに嘆くあの男が。

「……いいわ、もう容赦はしない」

決意の火を灯し、見開かれる目。そこには先程までの驕りの一片も存在しない。そして一つの言葉と共に、その男は……いやオレは

そこに姿を現した。

「田の前の男を倒しなさい、アーチャー……！」

### interlude

田の前で繰り広げられる少女と男のやり取りに、私は自分でも把握できるほどに混乱を隠せずにいた。

そう。私は知っていた。  
田の前の男が何を優先して考える人間だったかを。理想を完遂させるためには自分の身が傷付く事を厭わない。そして見返りなどを求めることはしない。そんな男だった。

しかしどうだ？“今”の男はどうだ。

その言葉はかつてのそれとは全く違う、何かを意図しているかのように、そしてその態度は明らかに少女を牽制し、事を起こさせようとしている。

出来る事ならば、今すぐにこの男を殺してしまいたい。自身の得物を奴の背に突き立てたい。これは否定出来るはずもない、私の本心だ。しかし私の思考を、私の動きをこの男が鈍らせる。瑣末な存在であつたはずのこの男が、私にストップをかけるのだ。

こんなことは絶対に起こりえるはずはない。

そう。かつて“この男”を経た私がそれを思うのだ。これが間違い

のはずがないのだ。だから見極めなければならない。この男の目的が一体何なのかを。

しかし、私の意図とは別に状況は動いていく。私がいくら慎重にならうとも、少女の一聲があれば、私は否応なく戦いに赴かねばならないのだから。

「目の前の男を倒しなさい、アーチャー……！」

棘のある響きで、少女が私の名を呼ぶ。

そして私はその場に姿を現す。ヒミヤシロウ……だったはずの男の目の前に。

interlude out

目の前に現れたのは、白髪褐色の男。

男は不敵な笑みを見せながらも、どこかその表情からは俺に対する憎悪の念が伝わってくる。いや。男の表情を見ただけでそれを理解出来るのは、俺がこの男を“経験した”事があるからだ。

「アーチャー、この男を倒しなさい」

遠坂の凛とした声が響く。

その声と共に、鉄と鉄の衝突音が教室中を包み込んだ。

「ツツ！」

手にした剣がガタガタと振るえ始める。

やはり昨夜に負った傷が問題だったのだ。握りこむ手も、力を

籠めているはずの足も、徐々に感覚を失っていく。

「終わりだ、少年」

男が、アーチャーが呟く。俺に聞こえるか聞こえないかというほどの大きさの響きは自分勝手に投げ出され、受け取り手のないままに霧散していく。鍔迫り合いが続く中、やはり男は納得の出来ないという表情を見せていた。

ならばと、俺はアーチャーの剣を払い上げ、一気に闘合を広げこう呟いた

「俺は殺されないぞ……正義の味方さん

「つ！ 貴様！！」

その言葉に苛立ちを覚えたのか、開いた間合を一気に詰めようとする。俺もそれに反応するように後ずさりながら応戦する。一合、二合、三合。幾度となく斬り結ばれる互いの得物。時に火花を散らしながら、風を巻き起こしながら、その攻防は続いた。

だがこのままの攻防を続けていては俺の負けは明白。昨夜からの傷もそうであるが、絶対的に今の俺とアーチャーでは体力が違い過ぎる。だからこそアーチャーが、かつての俺が想像もしえない行動をとればいい。そのアドバンテージが俺にはある。

「投影・開始！」  
トレース・オン

その響きを放った瞬間、アーチャーの顔が困惑の色に染まる。身構えた状態を崩す差ないこととは、さすがとしか言い表しようがない。背後には剣の群。この光景を目にすれば、どれだけ否定していくも納得するしかないだろう。俺は、かつての衛宮士郎と別のものに成つていると。

「停止解凍、全投影連続層写（フリー・ズアウト、ソードバレ

ルフルオープソ）！――」

その言葉をきっかけに打ち出されていく数多の剣。そして俺は一気にその場を離れんと、教室を飛び出した。心配することはない、こんなくらいいの攻撃でやられるほど、アイツと遠坂は弱くはない。

西日に照らされていたはずの廊下は、既にその影を濃いものにしていた。あまりに時間を掛け過ぎた。そう後悔しながら、目的の場所を目指す。アーチャーならば必ず一人で追いつくであろうと信じていたからこそ、俺は後ろを振り返らずに足を動かし続けた。

## セイギノミカタ（後書き）

一区切りといつことで、更新させてもらいました。  
さて、ここから一人のHIMAYASHIロカの立ち回りといつことで、期待  
していただけたら嬉しいです。  
またご意見、ご感想ありましたらよろしくお願いします。  
それではまた、次の更新で！

## セイギノミカタ

吹き荒ぶ風が乱暴に髪を乱していく。

橙色に染められていた世界は、その情景を徐々に闇へと落とし、始まりを告げようとしていた。

夜が来る。俺たち、マスターとサーヴァントが戦い、傷つけ合う時間が迫りくる。

「意外に、速かったんじゃないのか？」

後方に気配を、いや殺氣を感じ俺はそう口にしていた。  
誰に語るでもない、それはあの男に向かって放った言葉だ。皮肉も、  
その他の感情も何もない。俺は心の底からの思いを口にしていたのだ。

「貴様は、一体何なのだ？」

荒々しい風にも負けることのない、芯の強い声が響く。

「何を言つてるんだ？お前が一番知つているだろ？」「

「私が聞いているのだ！質問に答えろ！！」

先程より、一層厳しい声が降りかかる。後方に振り返り、最初に目にしたのはその声と違わぬ、憎悪に満ちた表情だった。

「コオと、より一層強い風が吹いた。

それは俺たち二人の間にハツキリとした隔たりを示すように、しかし確かな繋がりを表すように、流れていった。

「俺は、衛宮士郎……」

「違う！ 少なくとも私の知る衛宮士郎は……ツ……」

俺の言葉を遮るよつて声を荒げるアーチャー。しかしその後が続かない。

その表情を目にし、彼が何を考えているのか。それを自然と理解している自分がいた。

そう。こいつは認めたくないのだ。自分の記録にない力を、俺が身上に付けていることを。自分の目的を明らかに齎かすであろう、『今』の衛富士郎という存在を。

「確かに。俺は、『お前の知らない』シロウなのかもな」

手の平に再び干将、そして莫耶を投影し、切つ先をアーチャーに

向けながら声を放つ。

「……何も語るまい。私は、貴様を、貴様の抱える幻想を殺し尽くすのみ」

俺の声にそう返しながら、アーチャーは俺が投影したものと同一のものを手に構えをとる。

大きく開かれた間合い。屋上という限られた空間の中、それをいかに自分が優位となるよつて使うことが出来るか、その一点が勝敗を左右する鍵となるだろ？だからこそ下手に動く事は出来ない。隙を見せたが最後、きっとその瞬間に勝敗が決するはずなのだから。

「 」

二人の間を重い、重い沈黙が流れる。その感覚はどこか心地よい。昨夜ライダーと戦つていた時とは全く違う、どこかこの状態に興奮を隠せない自分がいるのだ。莫耶を、干将を握る掌が熱くなる。頭のてつぺんから足の先まで……俺は今から起じるであろう戦いを堪能しようとしていた。

「 楽しそうじやねえか、弓兵」

しかし、不意に投げ入れられた声に、俺たち一人の空間は一気にその風景を変貌させた。

鋭い響きの方に、向かい合っていた俺たちは視線だけをそちらに向ける。

フェンスの上、屋上の入り口から最も遠い場所でその男は俺たちを眺めていた。まだ日の光が残る風景の中、男の身に纏つた青はどうか目に痛い。

「 貴様……」

構えを崩さず、アーチャーが青の戦士に呴く。

その響きから感じ取れたのは、明らかに嫌悪と殺意。

アーチャーがそうであるように、俺自身もこの男には複雑な感情を抱かずにはいられない。かつての俺を一度殺したこの男、ランサーがこのタイミングでこの場に現れるなど、予想さえしていなかつたのだ。

「オレだってまたお前の前なんぞに現れるつもりはなかつたさ。でもな、七人目のマスターがいちゃ出てこない訳にはいかないだろう

アーチャーのそれとは対照的に、嬉々とした表情を見せるランサー。二人の会話から、やはり俺が関与せずとも、二人の戦いは何かをきつかけに中断されたということは想像に容易かつた。

しかしランサーの登場は、俺にとっては全く予想もしていなかつた事態であった。三疊みの状態。知らず知らずの内に俺たちを包み込んでいたはずの優しい橙色はその色を完全に失い、黒が世界にののばっていた。

この状況では、先に動いたものが標的となってしまう。そしてこのまま膠着状態が続いたとして、俺の敗北は必至。小刻みに震える手

が指示示すよつて、間違いなく俺は窮地に追い遣られていた。

「『兵！』この戦い、オレに譲れ」

再び、予想もしていなかつた言葉がランサーから囁かれる。ただ俺の自滅を誘うのではなく、あえて一騎撃ちを彼は望んだのだ。それに唖然とし、言葉を失つてしまつ俺とアーチャーを睨みつつ、ランサーは自身の右腕を掲げる。そしてその手に馴染みの、真紅の槍を現していた。

「貴様……何のつもりだ」

「言わなきや分からねえか？」

ランサーの言葉に苛立ちを隠そつとしないアーチャー。俺を放置しながら、彼の殺氣はより濃度を濃いものにしていく。しかしランサーはその殺氣を鼻で笑い飛ばしながら、いつ続ける。

「オレも別にオマエ達の戦いに手を差すような真似はしたくねえさ。でもな、これもマスターからの命令でね」

「……ツ！？」

身を刺すような悪寒が全身を這いずりまわる。それを拭い去るためには、構えを崩さずにいた剣に力を籠めた。

刹那、ガキンとという音と共に、何かをぶつけられた衝撃が全身を打ち震わせた。そう。田で追うことが出来たのはランサーの掲げた腕が振り下ろされる瞬間のみ。

「ぐつ」

迫るは青の槍兵。繰り出されるは重く、そしてあまりに鋭い突きの連撃。

力を抜けば一気に押し倒されるほどの大衝撃をどうにか耐えながら、

どう間合いを広げるべきかを考える。

否、それだけでは足りない。迫りくる槍兵ばかりに気をとられていっては、今も殺氣を向けてくる『兵』の一矢を受けることになってしまう。

しかしその中にあって、大きな疑問があつた。

何故、アーチャーは俺とランサーの戦いをただ傍観しているのか。ランサーと俺が交戦している状態こそ、彼にとつて最大の好機と言える状態であつたはずなのに、動こうとはしない。

“もしそれが動けないのならば、この状況に傍観を強いられているのならば……”

「……解せねえな

甲高い鉄の衝突音が止み、視界を覆い尽くしていた赤の波が一つに集約されていく。

そしてすぐに目に入ってきたのは、納得のいかない表情でアーチャーを睨みつけるランサーの姿。

「おい、アーチャー。高みの見物たあ良い御身分じゃねえか」

気付けばランサーは、俺たちの間に立ち、槍の穂先をアーチャーに向けていた。

「こちらにも事情があるのだよ。君こそ、魔術師を放置しておいていいのかね」

切つ先を向けられてもなお、眉根をピクリとも動かさず皮肉つたらしく言葉を返すアーチャー。しかし微かに振るえる腕から見て取るのは、今すぐにもこの均衡を打ち破らんとする感情。

そうだ。俺の予想は正しい。

槍を防いでいた衝撃に、手の平はジンジンと痺れる。その痛みすら、この確信を確固たるものにする要素。それを感じながら、俺は手の甲に刻まれた刻印に魔力を通す。

さあ、やられたままでは終わらない。より戦いを加速されるため、俺は静かにその言葉を口にした。

「出番だ、セイバー」

## セイギノミカタ

言葉が投げ出され、同時に、田の前に立つ一人の英靈の視線が一気にこちら側に集まる。

手の甲に印された刻印が消え、それに応えるように俺の周囲の空気がうねりを上げ、突き立てられたのは風の柱。

おそらくこの風の中では、誰もが簡単に動く事は出来ない。それが出来るのは一人、今から姿を現す彼女のみ。

風の柱を斬り裂く、より強い風が駆け抜けていく。

それは剣風。あまりの威力に周囲の風は振るえ上がり、その場に、先程までとは全く違う質の緊張をばら撒いていく。だがそれ以上に俺は、いやその場にいた総ての者が、斬り裂かれた風の柱から現れた人物に釘付けになつた。

魔術を繰る俺がこんなことを言つのは、可笑しなことなのかもしない。しかし俺にはその光景を『奇跡』という言葉でしか表現できなかつた。

「 サーヴァントと見受けが、相違ないか」

凛と、透き通る声が響く。その声に違わぬ、清廉なる姿がそこにはあつた。

目の前に現れた英靈、サーヴァント・セイバーは静かに不可視の得物を掲げ、そう告げながら、冴えた瞳で正面を見据える。

そして彼女の動きの一つ一つは、まるで水面に出来た波紋のように、緊迫した空間に影響を及えていく。

「なるほど。貴様が最後のサーヴァント……ってことになるのか」

真紅の槍を弄びながら、槍の英靈は面白そうに顔を歪ませる。

それとは対照的に、その場から一步たりとも動こうとはせず、弓の英靈はただジッとセイバーを睨みつけていた。

セイバーの登場に、戦況は一気に変化するはずだ。

そう。ここで“セイバーの力を見せつける”ことが出来ても、出来なくとも、他のマスターを牽制には十分なはずだ。

それを証拠に、アーチャーはセイバーの出現からここまで、何の行動も起こしていない。遠坂も、俺とセイバーの力をこの場面で見極めようとしているのだろう。だからこそアーチャーはここまで苦々しい表情を見せてしているのだ。

「マスター、指示を」

「ああ。お前はランサーを頼む。アーチャーは……俺がどうにかしておぐ」

「なつ……待ちなさい、シロウ……」

得物を構え、指示を待つセイバーに俺は簡潔に応え、手にしていた剣の柄をグッと握り直し、弓兵に向かい疾走を開始する。セイバーの声が指示通り、マスターが単身サー・ヴァントに挑むなど無謀の極みだろう。事実俺自身も、先日にそれを痛いほどに思い知った。

しかしそうと分かっていても、俺は目の前のこの男と向き合わねばならない。目の前にいるかつての自分自身と、そしてその背後にある彼女だけは、俺自身がケジメを付けなくてはならない。

それだけが、俺が彼女らに唯一示すことの出来る贖罪なのだから。

一体……どうなってるのよ

頭の内に響く困惑した声に、私はただ耳を傾けるしか出来ない。いや、それ以前にこの光景を目にしている私自身が、それを許容できずにいた。

目の前には先日刃を交えた槍の英靈。記憶の隅に追いやっていた、初めて守りたいと思った女性。

そして、かつての自分。いや、この場にいる“自分だつたモノ”と、いうべきかもしれない。何故なら目の前にいるエミヤシロウは、私の記憶のどこを探しても存在しない。

総てを見透かしたような物言いも、人を誘い込み様な行動も……そしてなにより、自らのサーヴァントを楯にする様な行為など、“理想を掲げていた頃の”エミヤシロウには出来なかつたはず。

マスター……指示を。早急に目の前の魔術師を排除すべきだ  
ま、待ちなさい！ 衛宮くんとランサーの戦いを見守るべきよ！  
迂闊に行動は出来ないわ！！

そう。マスターの判断は間違つてはいない。マスターにとってセイバーの情報は少な過ぎる。その力を測るために、先の戦いを経て、実力を理解しているランサーに戦いの場を譲ることは当然のである。そしてこの戦いの最中に彼女の実力が知れればとマスターが決断すれば、私が背後からセイバーとランサー、諸共に射殺してしまえば良い。それがマスターの、遠坂凛らしい当然の判断なのだ。

そう理解していたとしても、彼女の決断は私を苛立たせる。何を悠長なことを言つて居る。目の前に立つマスターをまず打倒してしまえばセイバーを無力化出来るというのに……。それも遠坂凛という少女の一面なのだ。どれだけ残忍な言葉を使おうとも、心のどこかで衛宮士郎に何か特別なモノを感じているのだろう。だから

チャンスであるにも関わらず、彼女は非情に成りきれない。それが遠坂凜の弱さであり、良さなのだろうが。

グルグルと自身の中で考えを巡らせていたからであろうか。

「なつ……待ちなさい、シロウ……！」

マスターとは違う、凜とした声が響き渡る。ハツとしながら、意識をそちらに向けるが反応にタイムラグが生まれた。

……ツ！！ アーチャー！

頭にマスターの声が届いた瞬間目に入つたのは、懐に踏み込みながら剣の刃をたてる魔術師の姿。

「…………！」

迫りくる刃。それを目にしながら私は確信していた。

やはり、今日の前に立つこの男は“H//ヤシロウ”ではないと。このような存在を認めてはならないのだと。

そして私は改めて決意した。何も厭わない。目の前に立つ私の、私が積み上げてきたもの全てを愚弄する“H//ヤシロウの殻を被つた殲者”を完膚なきまでに殺し尽くす。

interlude out

力強く一步を踏み出しながら、刃を横薙ぎに振るつ。  
一撃に渾身の力を籠め、鋭く、より速く。まるで自分を試すかのように。

いや、間違つてはいない。俺はこの一戦に結果を見よつとしているのだ。

幾度となく夢で見たあの戦いの勝敗を。俺が、どれだけこの男に近付いたかということを。ただそれだけの、あまりに我が儘な行為を俺はしようとしている。

「ハアアアア！」

「！」

互いの声・視線が交錯し、次いで結び交わされる刃と刃。

甲高く打ち鳴らされた響きは静寂の中についた空間を覆い尽くし、そして戦い始まりを告げる合図となつた。

二撃目に転じよつとした時、後方から響いてきたのは鉄と鉄のぶつかり合つ轟音。そして繰られた得物により揺さぶられる空気の振動。どこかそれらに背を押されるように、更に一步踏み出し莫耶を、干将を振るひ。一撃目より鋭く、先よりもより素早く。幾度目かの剣の衝突。それを受け流すアーチャーの剣によつて阻まれる。次から次へと繰り出されていた剣戟は、次第に全く力と力がせめぎ合ひ鐔迫り合いへと形を変えていく。

「……遠坂、見ていてるんだよ！」

「き、貴様！」

その状況に持ち込みながら一言、まるでただ会話のみをしているかのようにそう呟く。しかしそれは田の前で殺し合いを演じる英靈にではない。その向ひでこの戦いを観察している一人の少女に向けた言葉。

「ランサーを撤退させる。一番優先させることが重要じゃないのか」アーチャーの殺気に構うことなく、言葉を投げ出し続ける。確かにランサーがこの場に現れたことは予想もしなかつた事態だ。だが

らこそまずはこの状況を、他のマスターからの介入をないものにしなければならない。目的を果たすために、自分が真っ先に犠牲にならないといけない。それは昔も、そして今も変わることはない。

だからこそまず俺とアーチャーが肉薄するという状態が必要だった。

「アーチャー、話は今度だ。今はランサーをどうにかするんだ  
「貴様の言葉になど……ッ！」

俺の言葉に怒りで答えたアーチャーの顔が困惑に歪む。その表情はおそらく、自分自身の想定とは全く違ひ答えたが自身のマスターから返ってきた証拠。まずは一つ、次の段階に移るために俺は再びその手に力を籠め直した。

## セイギノミカタ

### interlude

鳴り響くのは剣戟。散らすは火花。互いの鋼と鋼が衝突し、轟音をあげながらそれは続く。

「クッ　　！」

男の口から零れたのは衝撃に耐える音。飛礫を思わせる男の槍を、少女は一刀で払い、更に一撃を繰りださんと男を追い詰めていく。

そう、これこそがサーヴァント、英靈の戦い。おそらくそれを曰にしたモノは、その情景に圧倒されるであろう。言葉に表すことは容易ではない。

きっと、誰もが同じ感情を抱くに違いない。互いに一步たりとも譲らずその一振り、その一突きに必殺の念を籠めながら繰り返されるそれに、『恐怖』と『驚き』を抱かずにはいられないだろう。しかしその光景を描き出している一人は、そのような感情は微塵も感じさせない。命の奪い合いをしているはずであるのに、全く真逆のモノを感じさせた。

「ああ、面白い！　面白いじゃねえか！？」

真紅の槍で少女の剣を薙ぎ払いながら槍兵、ランサーは嬉々としながら叫び声を上げる。生前戦いに中に身を置いていた彼にとつて、命をかけての戦いは日常茶飯事であつた。しかしここまで、これほどまでに彼の心を高揚させた戦いがあつただろうか。風を斬りながら振るわれる槍は彼のそんな心情を示すかのように、赤の軌跡を描き続ける。

「確かに！ 刃を交えていてここまで心躍るのは……久しいっ！」  
それに応えるように不可視の剣を振るう少女、セイバーは斬撃を  
より一層鋭く、重い一撃を繰り出す。

魔術師の策謀の駆け巡る聖杯戦争の中につつて、このように一対一  
で互いの業をぶつけ合えることなどそうあることではない。なによ  
り時空を越え使命があるにせよ、競い合つことの出来る人物に出会  
えたことはセイバーにとって僥倖であった。だからこそ少女は剣を  
振るい続ける。今この瞬間を心に刻みつけるために。

しかしその一人の英靈の戦いは、いとも簡単に終幕を迎えること  
となる。

くしくもそれは前回の聖杯戦争と同様、自らのマスターの行動によ  
るものとは、今の少女は知る由もない。

#### i n t e r l u d e   o u t

それは暴風。一撃一撃をぶつけ合う度に生み出される強風はその  
都度、周囲を慄かせていく。やはり格が、次元が違うのだ。セイバ  
ーとランサーの戦いはかつて見た衝撃のまま、凄まじいものがある。  
しかしこのままランサーとの戦いを続けさせるわけにはいかない。  
俺はセイバーに対し、こつ念話で訴えかけた。

避ける、セイバー！

次の瞬間、俺の傍を殺意の籠った風が貫いていく。

それは言わずもがな、弓兵の放った矢。アーチャーの矢は無慈悲に

も刃を交える一人に向かい放たれる。

「……ッ！」

俺の声、そしてその殺意を感じ取ったのか、大きくその場から飛び退くセイバー。しかしランサーはそれに反応することが遅らせることとなる。

大気を突き破りながら突き進む殺意。それを視界に入れると同時にランサーの表情が怒りに染まつていく。

「クソ、野郎があ！…」

響き渡つた怒号、そして迷うことなく振り下ろされる真紅の槍。それは迫りくる矢を一撃で撃ち落とすとともに、轟音をたてながらその場にクレーターを作る。粉塵を上げる屋上の中心に青の槍兵が佇み、矢を射た人物に向けて先までと全く異質の、純粹な殺意を向ける。

空気が凍る。まるでランサーを中心に、周囲の熱量が一気に吸い上げていくかのようにすら感じられる。これが怒り。英雄同士の戦い……いや、英雄としての誇りを反故にされたことに対する苛立ちがそうさせているのだろう。

「弓兵、貴様……武人の誇りすら捨て去つたか！」

叫び声を上げるランサー。その瞳は鋭く、自らに殺意の矢を放つた先へと向けられる。その先は言わずもがな、赤の弓兵。彼は嘆息しながらもランサー同様視線を向け、苛立ちを露わにする。

「そもそも私は武人などではないのだがね……これも我が主の命令なのだよ」

それはおそらく、アーチャーの本音であろう。本来ならばこの場の混乱に乘じて俺を殺そうと彼は考えていたはずだ。それがまさかこのような形になるとは予想もしていなかつただろう。チラリと向

けられる視線からは、ランサーに向いていたそれより、より一層濃い殺意が見て取れた。

「ぐだらなえ……ぐだらな過ぎやせ」

言葉を吐き捨てるように口こするランサー。その手には既に真紅の槍はなく、腕組みしながらこちらを見つめている。

「まだ、戦つつもりか？」

俺に一度視線を向けながらランサーは何かを考え込むような仕草を見せ、彼はこう言葉を返す。

「ああ。あまりに分が悪過ぎるつてことじりじくてな。マスターがこの場から退けつて言いだしやがった」

「逃げ遂せることが出来ると想つていいのですか、ランサー？」

「追つてくるか？ それは心躍るじゃねえか。だがな 貴様との戦い、次の機会にとつておくれ」

音をたて踵を返すと同時に、校庭の方に身を投げ出しまさに疾風を思わせる速さでその場から消え去るランサー。

それを追つこともせず、アーチャーは舌打ちをしながら俺の言葉を待つように視線を向ける。

「アーチャー……お前」

「さて……それでは私もこの場から去るとじよつ

「待て！ 貴方まで戦いを放棄するところのですか、アーチャー！」

？」

アーチャーを正面に見据え剣を向けるセイバー。しかしそんな彼女を後目にアーチャーは素知らぬ表情を見せながらこう続ける。

「言いたいことがあるのなら、君の主に言うのだな」

そう口にするとアーチャーはランサーと同様に、その場から姿を消した。

どうにかこの場を收拾することが出来たという事実に俺は胸をなでおろしながら、ようやくセイバーを正面から見ることが出来た。

「すまない。助かったよ、セイバー」  
彼女の近付きながら声をかける。しかしセイバーは俺の言葉にすぐ応えることはなく、顔をしかめながらこちらに向き直るだけだつた。

## セイギノミカタ

「言いたいことはありますか……まずは無事でなによりです、シロウ」

深く溜息をつきながら、セイバーは俺の傍に近付きながらそう語りかける。しかし言葉とは裏腹に、表情はどこか硬い。

「ああ。すまない。令呪を一画使ってしまって……」

「いえ、気にしないでください。貴方の判断に何も間違いはない」

ただと付け加え、正面から俺を見据えるセイバー。

月明りに照らされるその美しい姿は、何度も虜になる。風に揺れる金砂の髪も、実直に光る碧の瞳に俺は何度でも心を奪われてしまう。

「私が怒りを覚えているのは、貴方のその無謀さについてだ」

厳しい口調で囁かれたのは、戒めの言葉。その言葉は鋭く俺の中に楔を打ち込みながら、ズブズブと侵食していく。それはあまりに的を射たそれに俺は後ずさりながら言葉を返す。

「でもアーチャーたちの考えは理解出来た。結果的にいい方向に進んでいる」

いや、そもそもあの二人の考えは手にとるように分かっている。だからこそ、遠坂とアーチャーを牽制し、向こうから手を出しづらい状況を作る必要があった。

それなのに、何故セイバーはこんな表情をしている?何故俺の考えを汲み取ろうとしてくれない?

「貴方は、自ら武器を携えサー、ヴァントに挑んだ。シロウ、あまり

に無謀であると考えなかつたのですか！？」

「……ツ！結果的にランサーもアーチャーも撤退した！誰も傷付いていない……今はそれでいいじゃないか！？」

ブルブルと手が震えている。自分で理解出来なかつた。こんなにも声を荒げる理由が。こんなにも感情的に彼女に接しているのかが。

まるで自分が自分でないかのよつて、自制が効かない。

「シロウ、貴方は私を信頼してくれていないのですか」

「そんなこと……あるわけがないだろ」「う」

「ならば貴方の考え方を、貴方の意志を私に教えて下さい」

困惑する俺を後目に、セイバーは言葉を続ける。

そう。これがセイバーなのだ。共に戦うために蟠りを残してはならない。だからこそ彼女は厳しいと分かりつつも話を止めないのである。

「貴方の剣であるために、共に……聖杯を手にせんとする仲間であるために私たちは互いを理解し合つ必要がある」

優しく手を差し出しながら、セイバーは笑顔を見せせる。

「理解……か」

その言葉がどうしようもなく痛い。

「ああ。すまなかつた、セイバー」

今から口にする言葉が虚ろなものであると分かっているから。だから見れないんだ。目の前の、誠実に俺に手を伸ばす少女の瞳を……俺は見ることが出来ないのだ。

「俺と、俺と一緒に戦ってくれ」

差しのべられた手をとり握り返す。

再び掴んだこの手を決して離すまいと、強く、強く……。

それがただ、今の俺に出来る唯一のことだったから。

### interlude

月が煌々と地を照らす。その中を一人、家路を急ぐ。

少し前に彼、そして後ろからゆっくりと私がその後を追いかける。日が暮れ、周囲が黒に染まっているといふこともあるのだろう。私たちの歩く通りには人影は見られない。

この甲冑の姿を叩撃される心配はあつたが、この分なら問題はないだろう。冷たい空気を裂きながら、私たち一人は歩を進めた。

ゆづくつと、前を歩く少年の背を見つめる。

別人と理解しているはずなのに、私は少年とあの魔術師と冷酷無比なあの男と重ねてしまうのだ。

それは同じ響きをその名に持つてゐるからだろうか。

いや。そうではない。あの魔術師は私にこのような弱さを見せることはなかつた。ただ自らの目的を遂行するために手段を選ばなかつたあの男とは全く違つ。

召喚に応じ、この地に再び降り立つた時に見た表情を見ればそれは容易に理解することが出来る。少年は誠実なままでに召喚を、私を必要としていたのだと。

しかし今日の彼を、戦う姿を目にした途端に、私は拭うとの出来ない疑念を抱えてしまつた。剣を振るつ彼は、どこまでもあの魔術師に似ているのだと。

「セイバー、どうしたんだ？」

不意に前方から言葉を投げかけられる。顔を上げるとそこには、心配そうに私を見つめる少年の姿。

ああ、安堵感に胸につかえていた蟠りが解けていく。やはりこれが少年の本来の姿なのだ。出会ったばかりの私でも理解出来る、タイガと接していた様子からも分かる通り、この少年はお人よしと呼べるほどに周囲に気を使い過ぎるのだと。

「ええ、すいません」

足を送り出す速度を速め、彼の横に並び素直な謝罪を述べる。どこかおかしな行動があつただろ？ 、「口と表情を崩しながらシロウは私を一瞥し正面に向き直った。

その横顔を見ながら、私は考えてしまつた。  
先程否定してしまつたあの考えを。そう。私は考えずにはいられないのだ。

まるで少年は、HIMAYAシロウは変わらない。HIMAYAキリシグと変わらないのではないかと。

「シロウ、貴方は……」

「ん？ どうした？」

「ええ、すいません。急ぎましょ」

頭に浮かんだ疑念を振り払いつつ私は歩を進める。  
この考えが間違いであると、そう言い聞かせながら。



interlude

月は頂からゆっくりと傾き始める。闇は深く、ただその濃度をより濃いものにしながら時間は進む。

それは少年が、かつての自分自身と戦っていた時、剣の英靈が真紅の槍を持つ武人と刃を交えていた瞬間から幾ばくかの時が過ぎた頃。既に周囲の世界は眠りの中にあつた。

そう。誰もあずかり知らぬところで、それは幕を開けようとしていた。

長い石段を目の前に、一人の少女が悠然と立つ。このような時間に少女が一人でいることに疑問を抱かない者はいないだろう。しかし事実少女はその場にいた。銀に輝く髪は月明りを受けその美しさを、そして赤々と光る瞳は強い意志を露わにしながら。

「これを登るの、面倒だわ」

少女は眼前に佇むそれを見据え、一言そう漏らしていた。

周囲に人影はない。ならばと少女は一回りと口元を歪め、続けてこう呟いた。

「飛び越えちゃ おうか……」

その声に応えるように、その場に現れたのは巨大な体躯。おおよそ人とは言い表すことの出来ないそれは、銀の少女を自らの肩に抱く。

「 さあ、いよいよ 」

鈴のなる様な響きに続き、地面を碎く轟音が周囲を揺らす。

それは幕を上げる合図。鉛色の巨人は力強く、そしてその体躯からは想像も出来ないほどに軽やかに闇夜を舞う。

まるで月にも届かんばかりのその跳躍に、少女は嬉々とした表情を浮かべる。

しかしそれだけではない。彼女を高揚させているものは眼下に広がる街の風景だけではなく、これから待ち受けているであろう戦いを夢想しているからである。

自ら他者に戦いを挑む。これほどまでに無駄なことを、普段の彼女なら行うはずもない愚行である。しかし事実少女は、自らの従者と共に今まさに戦場に赴かんとしている。

そう。感じ取っていたのだ。総てのサーヴァントが揃つと同時に、一騎のサーヴァントがこの世界から消滅していくのを。そしてそれは、自らの中にある器を満たす、最初のひとつしづくが零れ落ちてきただことに他ならないといふことも。

しかしそれらが自ら戦いに赴く理由になるとは言い難い。だが彼女は自らを押し止めることが出来なかつたのだ。

ただ少女はあの夜、あの男に感じさせられた苛立ちを、何かにぶつけようとしていた時に、街中から魔力を吸い上げる山上の寺を見付けた。そしてその場所を魔術師が根城にしていることは想像するに容易かつた。

そう。そこにいるであらう魔術師は少女の、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの憂さを晴らすための標的にされたにすぎないのだ。

易々と石段、そして山門を飛び越え鉛色の巨人は、音をたてて寺の境内へと降り立つ。ぐるりと周囲に見送りながら、巨人の肩に佇む少女は一際嬉しそうに笑みを浮かべる。それは彼女が想像していた通りの光景が、そこには展開されていたからに他ならない。

それは骨の大軍。全てが同じ形の骨の兵は、それぞれに違う得物を抱きながら、巨人が降り立つ瞬間を今か今かと待ちかまえていたのだ。

境内を埋め尽くさんとばかりに陣形を整え、少女たちを包囲する兵士たち。どれだけ研鑽を積んだ練達の士であつても、ここまでの数量差を埋めることは至難の業であろう。

「こーんな、骨の人形……一振りよね、バーサーカー？」  
しかしその異形を目の当たりにしても全くおぞけを振るうこともなく、少女は自らの従者にそう言葉をかけた。

彼女の声に巨人は手に携えていた大剣を一閃、縦にそれを振り下ろすことで応えた。周囲の大気を斬り裂き、振り下ろされたそれに境内の石畳は碎かれ、粉塵は月明りを浴びながら光を散りばめる。それに意志を持たないはずの骨の兵士たちは、まるで恐怖を感じているかのように後ずさるよう力タカタと自らを鳴らす。

そしてその光景にイリヤは高揚したのだろうか、残酷なまでに無邪気な響きで告げる。

総てを壊し尽くす、彼女なりの魔術師の戦いの合図を。

「さあ。……やつちやえ、バーサーカー！」

「…………」

鈴のなる様な響きに続き、咆哮が周囲を染め抜く。

静寂の支配していたはずの境内は一変、暴風と鉛の巨人の叫び声に塗り替えられてしまう。

横一閃。大剣はまるで旋風の如く振るわれ、音をたてて骨の大軍を粉砕していく。それは兵士たちが受けることも出来ようはずもないまさに嵐であった。

「あれ？ 本当に一撃で終わっちゃった？」

ピタリとその巨体が動きを止める。

先の少女の言葉通り、バーサーカーの巻き起こした風は、彼らを包围していたはずの大軍を一撃のもとに壊し尽くしてしまったのだ。

「ホント……呆れちゃうわ。こんな小物しか用意できないなんて」「そう咳きながら少女は上空を見上げる。

しかし言葉とは裏腹に、その表情は境内に降り立つた時のまま。嬉しそうな笑みを浮かべたままであった。

そう。イリヤは感知していたのだ。彼らを見つめるその存在を。

「名乗りもしないなんて……貴女はキヤスターのサーヴァントかしら？」

ゆつくつと上空に佇むそれに疑問を投げかけるイリヤ。

「まさか！……いえ、貴方なら当然といつべきなのかしつら」

まるで翼を広げるようにはあった。

それは地に大きく影を作りながら鉛の巨人を見据え、驚きと納得の声を上げる。

「あら。わたしのバーサーカーが、ヘラクレスだつて分かるの？」

先の魔術師と同様に驚きの声を上げるイリヤ。

しかしその彼女の反応に耳を傾けることもなく、魔術師はゆっくりと手にしていた杖を掲げる。

「やつ……人の言葉を聞こつともしないのね」

魔術師の周囲に展開された魔法陣は少女たちを捉え、今までに殺意を撃ち出さんとしていた。対するイリヤはそれを目の当たりにしながら苛立ちを露わにする。

赤い瞳は眼光鋭く魔術師に向けられ、先程までの無邪気さはどこ

も感じられない。

彼女は決意したのだ。決して、目の前にいる魔術師を逃はしないと。

「バーサーカー、絶対に逃がしちゃダメ…… キャスターを叩き落として……！」

棘のある響きでイリヤは告げると同時に、魔術の砲撃が轟音をたて放たれる。

自らの主の隠しようのない苛立ちに呼応するように、鉛の固体はさながら弾丸の如く、上空に佇むキャスターに向かい、飛び出していった。

「

確かに砲撃は放たれた。

数秒とかからず巨人を焼き尽くすほど の出力、そして標的は間違いなくその場にいたはずであった。

しかし声が示す通り、瞬きの間にその鉛色はキャスターの前から姿を消した。

標的がその場にいない、だが既に放たれてしまった轟音は境内を焦がしていく。

「……どこに！？」

眼下で無意味な破壊が行われる中、焦りを隠せず周囲を見渡すキャスター。

見失つてしまつた巨体を、一瞥すれば見付けることの出来るはずのバーサーカーを探す。

「 なつ！」

しかし鉛の巨人は確かにそこにいた。

バーサーカーがどこにいたのか。それはあまりに簡単なことであつ

た。

弾丸の如く、巨体からは想像すら出来ないほどの速度で彼はキャスターのはるか上空に飛び上がった。そして主の命令通り、眼前の敵を『叩き落とした』のだ。

「ア

小さく呻き声を上げ影が一つ、地に叩きつけられる。

この時キャスターは全てを悟った。

そう。何をしたとしても自分がこの巨人に、十一の試練を超えた大英靈に一矢報いることは不可能だったのだと。どれだけ意表を突く攻撃を繰り出そうと、すぐさま逃げる手筈を整えようとしていたとしても、少女がこの寺に目を付けた時点で敗北は、自分が死ぬことは覆らないのだと。

叩きつけられたキャスターの身体は夥しい血を吐き出しながら、境内の石畳を穢していく。まるで自らの破壊してしまったこの場を覆い隠すように、ただ赤々とした血が止め処なく流れれる。

それをイリヤはバーサーカーの肩から降り、ジッとそれを見つめ再び驚きの声をあげる。

「あら、良く生きてるわね」

彼女は一步近付きながら、素直に感心したと声をかける。だが今 のキャスターに応える術はない。

ただ何かを言葉にしようと必死に口を動かすが、既に声を出す機能が破壊されてしまったのだろう。それは叶わない。

「さよなら、可哀想な魔術師さん」

無慈悲に、イリヤは絶命寸前のキャスターに向かい、言葉を投げかける。声に合わせ、巨人の大剣は振り下ろされる。それはおそらく少女には目にも留らぬ速度であつただろう。

しかし一人、巨人とは別にもう一人、その狂気に反応できる者がい

た。キヤスターと大剣の衝突の瞬間、間に割つて入る一つの影。それはキヤスターを守らんと大剣を受け止め、その場に立つ。それはキヤスターが声にならない声で必死に逃げろと訴えていた人物。

「へえ、人間なのに……！　凄いじゃない！？」

そう。ただの人間がその一撃を受け止めた。全身から血の赤に染めながらも、キヤスターの主である葛木宗一郎がバーサーカーの攻撃を退けたのだ。

「　　ツ　　！　！」

しかしやはりその身は人間のモノ。

宗一郎はキヤスターからの魔力付与を得ていた。だがどれだけ魔力の恩恵を受けようとも、サーヴァントの、バーサーカーの一撃を受け止めて無事に済むわけがない。

それはこの男も例外なく全身はその支えを失い、力なく自らの従者の傍に倒れ伏した。

「……キヤス、ター……すまん……」

「　そ……う、……いちろ……さ……」

傍らに倒れ伏す、自らの愛した男の亡骸を目にしながら、キヤスターはゆっくりと瞳を閉じた。それは彼女の聖杯を求めた戦いの終焉、いや彼女が夢に見ていた平穏な生活の終焉を意味していた。

二人の亡骸を目にし、イリヤはどこか複雑な表情を見せる。確かに自分自身が、バーサーカーが勝利したはずなのに、何か納得がない。その答えを出せぬまま、彼女は踵を返し、バーサーカーに歩み寄り、こう告げた。

「……行こう、バーサーカー」

その言葉を耳にし、巨人は再び肩に自らの主を抱き、来た時と同様に一気に山門を飛び越え、石段を飛び降りていく。帰路を急ぐその姿は、感情を表に出すことのない狂戦士が、自らの主を気遣っているかのようにも見受けられた。

ここに一つの戦いが幕を降ろす。

総ての幕引きを急ぐように、器の完成を急ぐように、物語は更に速度を増しながら進みゆくのであった。

interlude out

## 変わり始めた日常

いつもと変わらない朝。団欒を囲むのは三人。

数こそ変動のないものの、見慣れた姿はいつもの場所にはいない。美味しそうに朝食を口に運ぶ藤ねえとセイバーを前に、俺がどこか居心地の悪さを感じていたのは彼女が、桜がそこにいないことだけが原因ではなかった。

そう。昨日遠坂との戦いの後、セイバーからの一言に俺はこれら先の彼女との接し方が分からなくなっていた。かつての自分であれば、セイバーの言葉に耳を傾けつつも『正義の味方になりたい』という意志から、我武者羅に戦いに臨もうとしていただろう。しかし、実際今後の展開を考えれば考えるほどに、何かに絡めとられるような、そんな違和感があった。

そんな俺の表情に気が付いたのか。怒涛の勢いでおかげを口に含んでいた藤ねえは、ゆっくりと橋を置き、俺にこう声をかけた。  
「ちょっと一朝からそんな暗い顔して！ 一日の始まりなんだかもっと元気出さないとダメだぞー」

お茶碗をズイと俺に差し出しながら、藤ねえは相変わらずの笑顔でこちらを見据える。その表情にどこか安堵感を覚えながら、俺は差し出されたお茶碗を受け取る。

この人の底抜けの明るさにはやはり敵わない。やはり藤ねえは強い人なんだ

そつ思つと少しあは心にかかつた靄が晴れるよつた気がした。

「ああ。……ありがとな、藤ねえ」

『飯を田一杯お茶碗に盛り、素直な感謝の言葉を口にする。その言葉に違和を感じたのだろうか、お茶碗を受け取りながら、藤ねえは難しい表情を見せていた。

「「」かとつこでこもり「」つわ……。今日から少しあ、学校を休もうとする。

思つ

「」なれば一気に口元がてしまおうと、俺は藤ねえに休む口を立てる。先田の彼女とのやり取りから、この話が出ても不自然ではないはずだ。

「ん~やつぱり結構重症だったの? その怪我は」  
「いや、一応念には念をつてことじ。実際昨日も結構辛かつたし」  
案の定、俺の身体を気遣う藤ねえ。その言葉に申し訳なさを感じながら、俺はまるで嘘に嘘を上塗りするよう言葉を重ねていく。心配しながらも首を縦に振つて、納得したよつな素振りを見せる藤ねえ。田の前に並べられた皿に盛られていたおかずを平らげ、パンと手を合わせてサツと立ち上がる。

「まあしつかり身体を休めるのよー。あ……そつまくば桜ちゃんも昨日から学校にも来てないのよねー、どうしたんだろ?」

そう言い残し、そそくさと腰間を飛び出していく。

あまりの速さに少しの間開いた口が塞がらなかつたが、とりあえずは良いだろ。まあ欲を言つならば自分の食器くらいは片付けて行つてほしこものだ。

「「」かとつこまでした」

そんなことを考えていると、凜とした声が耳に届いて来る。俺から向かい側、そこに座していたセイバーは姿勢をピンと伸ばし、俺を見据えながらこう続けた。

「シロウ、それではこれから今後こつこで話すとしましょうか」「あ。」

「……ツ！」

容赦なく振り下ろされる竹刀を受け流しながら、俺は少女を正面に見据える。

繰り出される一撃は、少女の華奢な身体からは想像も出来ないほどに重く、そしてあまりに鋭い。

さながら乱れ降る雨を思わせるその攻撃に、ギシギシと身体が軋む。やはり思い知らされてしまうのだ、純粹に戦いに臨んでしまえば、人がサーヴァントには勝つことは出来ない。ライダーと対していた時は、状況が味方していただけなのだと。

今後の聖杯戦争の展開について話し合つた後、道場にあつた竹刀を使い、俺たちは軽く打ち合いをしていた。セイバーにとつては俺の実力を知るための、俺にとつてはリハビリを兼ねての鍛練であつたが、ここ数日それを怠つていたからだろうか、想像していた以上に彼女との打ち合いにのめり込んでいた。

「……シロウ、ここで少し休憩にしましょう」

間合いをとり、正眼に竹刀を構えていたセイバーはそう告げ構えを崩した。

「そうだな。軽く打ち合いのつもりが、結構長時間になつちまた」俺は床に腰を降ろし身体を投げ出した。言葉通りセイバーとの打ち合いで熱中していた。いや、正しく言えば集中しなければ一撃の下に昏倒させられることは、想像に容易い。

かなりの疲労が蓄積していたのだろう。竹刀を手放した手がジンジンと痺れ、床に投げ出していた身体が鉛のよつに重い。

「しかし、貴方の戦士として完成度が高いことには正直驚かされました」

そう口にすると、セイバーは俺から少し離れたところに腰を降ろ

した。

「いや、まあ知り合いに鍛えられたからな」「なるほど……少し貴方の師に興味がありますね」

そう呟き、セイバーはゆっくりと瞳を閉じる。確かに、以前にもこの表情を見たことがある。一体いつの頃だつただろうか。士郎だつた頃か、それともエミヤとして召喚された後だつただろうか。最近はそのことすらもぼんやりと、霞がかつたようになってきている。あの時は違う、ジーンズとTシャツという飾り気のない格好だが、やはりその表情は記憶の中にあったモノと同じ。何度も見惚れてしまつ、それだけ俺は彼女に心を奪われているのだろう。

「シロウ。貴方の実力、少しは理解出来ました。しかし……」

「やつぱり、サーヴァントに単独で挑むのは危険……だろ?」

田を閉じながら言葉を投げかけてきたセイバーに、俺はすぐさま言葉を返した。

何を言われるか、それは既に理解していた。ただそうしなければいけなかつたという事実を付けたしながら、俺はこう続けた。

「緊急事態でない限り、俺が単独でサーヴァントに挑むことなんてもうないさ」「それなら問題はないのですが……」

セイバーはゆっくりと瞳を開いてゆっくりと立ち上がり再び竹刀を構え、一閃。先程までの打ち込みでは見られなかつた速度で得物を振り下ろしていた。

その動きに、俺はまたドキリとさせられながら、彼女の流れのような動きに田を奪われていった。

その時、戸の開く音が響く。

その音に視線を入り口に移す。すると見知つた姿があつた。

「あ……お前……」

入口に立っていた人影はどこか申し訳なさそうに顔を下に向けながら、一歩、道場の中に足を踏み入れた。

「シロウ、彼女は……一体？」

そう口にしたセイバーはその人物を警戒するよつて、田に見えて殺氣を放っている。

セイバーの殺氣に気押されながらも、道場に足を踏み入れた少女は深く頭を下げ、言葉を紡いだ。

「お、おはよっ……、じじこます、衛宮、先輩」

そう、もう決してここには姿を見せないであつたと予想していたのだ。

しかし彼女は、ライダーの真のマスター……間桐桜がそこにはいた。いつもと変わらない、可愛らしい笑顔を浮かべながら。

## 変わり始めた日常

「すいませんでした。昨日は、来れなくて……」  
そう口にしながら、桜は深々と頭を垂れる。

「桜……お前、学校は？」

言葉を返しながら、俺は自分でも分かるほどに困惑していた。  
そもそも何故桜はいつもと変わらずにここに来ることが出来るのか。  
サーヴァントを失い、最早俺に接触している意味などないはずなのに。  
しかし桜に対する不信感を抱えながらも、心のどこかで桜が来たことに安堵感を覚えていた。  
何故こんな感情を抱いてしまうのか。正直、俺には分からなかつた。

「シロウ、この少女は一体？」

セイバーは桜を見据える。決して警戒を解く事はなく、敵意があると判断すればすぐにでも斬りかからんと、その瞳は語っていた。

「この子は……うん、俺の大事な後輩だ」

「申し遅れました。間桐……桜です。衛宮先輩にはお世話になつて  
います」

俺の言葉に続き、再度深々と頭を下げる桜。一瞬、チラリと見えたその表情からは感情を読み取ることは出来ない。

「なるほど、失礼しました。私はセイバーと申します」

桜の動きに倣い、頭を下げるセイバー。

完全に警戒を解いたわけではないだろう。しかしセイバーらしい礼儀正しさで言葉を返した。

「セイバーさん……」

「ええ、よろしくお願ひします。サクラ、とお呼びすればいいでしょうか?」

互いに名乗りあり、ゆつくりではあるが打ち解けた様子を見せる二人。それを見ながら俺は内心胸をなで下ろしていた。セイバーと桜、出来ればこの二人が険悪な仲になつてほしくない。それは一人が俺にとつて大事な存在だから。いや、一人には限らない。藤ねえと先日相対した遠坂。そしてこれから戦うことになるであろうイリヤ……皆が俺にとつては大事な存在だ。出来るなら戦いなどせずに過ぐすことが出来ればいいのに。

「何考へてんだか……」

知らず知らずの内に俺はそう呟いていた。

何をバカなことを考へている。これまで一体何のために大事な人たちとの関わりを犠牲にしてきた。何を為すために俺は力を求め続けた。

まさかこんなにも短い間に、決意すらも揺らいでしまうほどに弱くなつていたとは……自嘲を通り越し、怒りすら覚えてしまう。

「シロウ、どうしたのです？ 難しい顔をしていますね」

そんなにもおかしな表情をしていただろうか。セイバーは心配そうにこちらに声をかける。俺は相槌を打ち、一人の傍へと歩みを進める。そして何事もなかつたように二人に笑顔を見せながた。

俺の表情に安心したのだろう。一人はそれぞれに笑みを見せる。俺も同様に胸をなでおろしながら、外に視線を向けてこう提案した。

「いいタイミングだし、昼にしようか？ ……って、材料なんにもないんだつたな」

そう。この数日間、家事がおざなりになつっていた。無論聖杯戦争

が始まってしまったことが一番の原因なのだが、これでは本当に生活が成り立たない。

「シロウ、では材料を調達に参りましょ」

「よし、じゃあ三人でいくか？」

セイバーの提案に賛成しながら、俺たちは一路道場から外に歩を進める。空の頂に到達せんとする日の光は、寒空の空氣の中で本当にありがたい。道場の入り口にいた桜、そして彼女に並び立つようにな歩を進めるセイバーの後ろ姿を追いかける。

「なあ……桜？」

「はい。なんですか、先輩？」

桜を呼び止め、俺は彼女にどうしても話さなければならなかつたことを言葉にする。それを口にしてしまえば、取り返しのつかないことになるとそう気付きたがら。

「間桐は、アイツはどうしてる？」

「兄さん……すいません。兄さん、一日前から戻つてなくて……」

そう。慎一がライダーを俺に嗾けて以降、俺はアイツの姿を見ていない。余程俺が殺されることを確信していたのだろう。マスターが何時襲われるとも知れない中で一人になつたのだから。しかし結果的にライダーはセイバーによって打倒され、桜の言葉通り慎一が間桐邸に帰宅していないということを考えると、自ずと答えば導き出される。

ただ、それは桜の言葉を『信じる』ならばだ。兄がいなくなつてしまつたのに、わざわざ俺のところに来た事を考えると、その言葉が信用できるかは正直判断が難しい。

「そう、か。心配だな」

「はい……」

顔を下に向けながら、桜は少し悲しげな表情を見せる。

確かに、俺はこの表情を引き出すために慎一のことを桜に聞いた。しかし何故だらう。こうなると分かつて言葉を紡いだはずなのに、胸が痛い。この少女の顔を見ると、あまりに胸が締め付けられる。

この時の俺にはただ一つ、信じて疑わないものがあった。それは桜が俺に……『HIMAYASHIRO』に危害を加えるはずがないだらうといふこと。

そう。俺は桜の好意に甘えていたのだ。その甘えが、後に想像もしながら事態を招く事を、今の俺は考えもしなかったのだ。

「シロウ、サクラー？ どうしたのですか？」

「ああ、すまない。今行くよ」

セイバーの声に俺たちは彼女に追いつき一路商店街を指し、衛宮邸を後にした。

変容していく桜の表情に気付かぬまま。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8836q/>

---

終わりの続きに

2011年12月31日15時57分発行